終の將來に亙りて種々なる世界を出現し行くは阿賴耶識によるものなりと論ずる本宗の如きを阿賴耶識緣起論と稱し小乘にて論ずる業感緣起論に一歩を進めたるものなり。

阿賴耶識緣起論と業感緣起論

佛教特有の用語に相分、見分と云ふ名目あり。相分とは吾人の心に對する外界の相狀を指す語にして所謂對境又は對象の意なり。見分とは其の相分を認知する作用をなすものなり。眼耳鼻等の六識は阿賴耶識より發する相分を認識するものにして末那識は阿賴耶識の見分を認識するものなり。卽ち阿賴耶識より現ずる相分の中、眼識の認むるものは形色となり、耳識の感ずるものは音聲となり、夫等の見分を末那識が認めて實我實法ありとの妄執を起すなり。詮ずる所八識の源は第八識の阿賴耶識にしてこれ卽ち萬有の生ずる根元なり。八識中眼耳鼻等の前五識は吾等の具へたる五官によるものなれば睡眠等のために五官休止すれば從つて休止すれども第六識なる意識は睡眠中も猶働くことあり。夢の現象の如き之なり。されど全く熟睡の狀態に入れば第六識も休止して夢の作用も感ぜざることあれど第七識第八識は決して休止することなく間斷無しに相續し、肉體死して五蘊空に歸すれば前六識は玆に全く斷滅するも第七、八の二識のみは永久に相續するものなり。我等信心を起して佛德を觀ずる時第八識中なる最善の種子開發して玆に最善の國土を顯出し來ると敎ふるなり。然らば如何なる機類の人も同一の佛果を得べしやと云ふに、總じて五種の機類に分ち無始以來法爾として五性各別の種子を阿賴耶識中に藏し、その聲聞決定の種子を有するものは四諦を觀じて羅漢果を得るに止まり、緣覺決定の種子を有するものは十二因緣を觀じて辟支佛の果に止まり、無性有情の種子を有するものは唯有漏の種子のみを有するゆゑ人間天上の善果を得るを至極とし、菩薩決定の種子を有するものと不定種性を有するものゝ中菩薩性の種子を具備せるものとのみが布施、持戒等六度の修行をなして佛果

相分と見分

五性各別

を證すべしと云ふが本宗の所論なり。

本宗の所依は六部の經と十一の論部なりと雖も、その根本をなせるものは解深密經と瑜伽論と唯識論となり。佛滅後九百年代彌勒菩薩が都卒天より阿瑜遮那の講堂に下り、無着菩薩のために、嘗つて釋尊が唯識中道の說教をなされたる解深密經の會座に列なりて親しく聽聞せし處を述べ五部の論藏を說かれしと云ふを以て創めとす。解深密經は一部五卷八品よりなる、初めの勝義諦相品に於て如理、請問等の諸菩薩のために廢詮談旨一實の妙理をとき、心意識相品に於て密惠菩薩に對し八識の性相を說きて生死輪廻の根源を悟らしめ、一切法相品に於て德本菩薩に對し偏計、依他、圓成の三性の相を說き雜染有漏の法を斷じて淸淨無漏の法を證すべきことをあかし、無自性品に於て勝義生菩薩に對し三性無自性を說かれたり。卽ち偏計所執の體相は有にあらず、依他起の諸法は有にあらずして有に似たり。圓成實の眞理はその體無相にして宇宙に充滿し、有情非情にわたりて增減するなし。偏、依、圓三性は畢竟自性無しと說きて玆に唯識中道の理を顯了せられたり。

解深密經

唯識中道

支那に於て本宗を力說廣宣せられしは實に

玄奘三藏

なり。玄奘三藏は唐、河南洛陽の人、俗姓は陳氏、母は張氏、幼名を禕と云ふ。兄長捷法師に誘導せられ東都の淨土寺に至り始めて佛敎を學ぶ。偶々起信論をよみ眞如緣起の說に疑を抱き遠く印度に遊びて佛典を究めんと欲し、太宗皇帝の貞觀三年上表せしも許されざるを以て竟に脫して玉關を出で蒙古の大沙漠を橫ぎり土耳其斯坦より中央亞細亞を經、南下して北印度を通過し同七年中印度に至り更に王舍城に入り那爛陀寺に至りて英名赫々たる戒賢論師に從ひ玆に法相の學を稟けて釋然悟る處あり貞觀十九年、梵典五百二十夾、六百五十七部を賫して長安に歸る。其間實に十七年、あらゆる辛酸を嘗めて旅中詳密なる觀察をなし大唐西域記と名づくる十二卷よりなる大旅行記を作れり。その記述の深切なる、用意の周到なる、印度の古代地を知るに於て唯一の憑據なり。今日佛跡のなほ明かに知らるゝもの實に西域記の力なりと云ふ。玄奘の歸るや朝野を擧げて之を尊崇し、太宗、高宗二代の皇帝之に歸依し、勅して洛陽の弘福寺に居らしめ譯經に從はしむ。その譯する所經論七十五部一千三百三十五卷、就中大般若經六百卷の飜譯最も顯はる。譯文精妙、よく原文の玄理を盡したれば從來の譯書に對し新譯と稱し世にもてはやさる。麟德元年二月五日六十五歲を以て寂す。帝哀悼し朝を廢する三日に及べりと云ふ、如何に渴仰せられしかを知るに足るべし。三藏とは經律論の三藏に通達し且つ之を譯する人を尊び呼ぶ名稱なり。玄奘の門下人材林の如し。中にも傑出せるを窺基となす。慈恩寺に居りて盡んに說敎、著述に從事したれば世に慈恩太師とよぶ。數多の著書の中、法苑義林章七卷、法華玄贊十卷最も著はる。支那に於ける法相宗は慈恩太師に至りて完成したればとて一名慈恩敎と呼ぶに至る。

大唐西域記

新譯

三藏の義

慈恩太師

慈恩敎

其五、三論宗

龍樹菩薩の作なる十二門論、中論、と提婆菩薩の作なる百論とを所依として破邪卽顯正の利劍を提げ眞向より一切の有所得偏論を破折したるものに三論宗あり。隋の煬帝の時嘉祥太師(諱は吉藏)が絕倫の資を以て縱橫無礙に論議し三論の宗風を擧揚せるを以て祖となす。

有所得とは善惡邪正を分別して自己の見る所のみを善なり、正なりと固執するを云ふ。之に反するは卽ち

有所得

無所得破邪卽顯正

無所得にして一方の偏見に陷らず、一切の固執を破し了りて破する所もなく破する能もなく所破、能破ともに盡きて絶對の眞理顯はれ來る、之を破邪卽顯正と云ふ。蓋し絶對眞理の上には善惡邪正の分別を容れざるゆゑ名づけて無所得と云ふ。外道は實我ありと執し、小乘有部は諸法實有と執し、成實は空に執し、大乘は自ら中道と稱してなほ有所得に執す。三論は是等一切を破折して曰く、如上の戯論滅し盡して玆に眞道顯はれ來る。至道の玄極は口言ふべからず、心思ふべからず、有と云へば愚に歸り、無と云へば智にあらず、舍利弗は有に執して文殊に叱られ、須菩提は空に執して維摩に呵せらる。有にあらず、無にあらず、亦有亦無にあらず、言語道斷心行處滅、湛々として寄るべきなく、寥々として據を絶す、名の名づくべき無く强ひて名づけて顯正と云ふ、と。但しこは絶對理體上の玄談のみ、萬差の現象は此の理體の上に顯ずる所の假象なれば無所得の上に假有存す。假有なれば實有にあらず。その假有なるを俗諦と云ひ、實有にあらざるを眞諦と云ふ。有と斷ぜず、無と斷ぜず、機に從つて有無の言をなす、之を對偏の中道と云ふ。依りて以て有無の迷見を破したるものを盡偏中道と云ふ。迷見悉く破し終りて中道にも亦執せざるもの之を絶對中道と云ふ。執すべき中道もなしと雖も衆生化益のため無所得中道の上に有無を假立するもの之を成假中道と云ふ。されば無所得の上に緣生の諸法顯然として羅列し、しかも諸法元來假有なれば假名の俗諦そのまゝ直ちに無所得の實相なり。故に空は宛然として有、有は宛然として空、色卽是空、空卽是色てふ般若の眞理は之を云ふなり。

俗諦眞諦

對偏中道

盡偏中道絶對中道成假中道

色卽是空

八種の見

萬有の眞相に對する吾人凡俗の情見は大別して有無の二見に過ぎざれど更に之を擴張すれば生、滅、去、來、一、異、斷、常の八種となる。卽ち一切の諸象は或は神の力により、或は因緣によつて生じ來り滅し去ると見る生滅、去來の見、或は諸象萬差區別して對峙すると見、若しくは平等無差別なりと見る一、異の見、或は一切は實在なりと見、又は實在するものにあらずと見る常、斷の見之なり。一切の迷見は此の八種の外に出でず。本宗に於ては此の八種の偏見を破折するため悉く之を否認して不の字を冠せしめ名づけて八不の中道と云ふ。これやがて本宗の骨髓にして八不の終る所に眞理顯前し來ると敎ふるなり。

八不の中道

本來是佛

本宗の所論を詮じつむれば一切の衆生は本來是佛にして六道の群生、差別の當相直ちに本自寂滅無所得なれば迷ひも無く悟りも無し、從つて成佛も無く不成佛も無し。されど眞俗二諦の方面より觀ずれば俗諦に執着するものは凡夫にして眞諦に觸るゝは覺りなり。機根勝れたるものは八不の正道を聞きて一念直ちに無所得正觀に達するを得べきも機根劣れるものは三祇の長きにわたり萬行を修するにあらざれば悟界に至らずと說くなり。

眞如緣起論

要するに本宗は不可說、不可思惟なる眞如の理體が動きて萬法の世界を開現したりと云ふ眞如緣起論にして、眞諦の方面にて眞如の眞相を說き、俗諦の方面にて萬法の現象を論じ、眞諦は俗諦を離れざる故に眞如の上に萬法を現じ、俗諦は眞諦を離れざる故に萬法の中に眞如を見る。二者はなれざる所に中道存す。一切の偏執を離るゝことに依りて眞如の風光に接し得べしと說くなり。

其六、天臺宗

陳隋の際に當り佛敎史上前後に比類を絶したりと歎稱せらるゝ大學者天台の智者太師

灑川に生る、諱は智顗、字は德安、姓は陳氏、父を起祖と云ふ。梁孝元帝の時益陽縣開國侯たり。母は徐氏、

慧思禪師

嘗つて五彩の香囊の如くになり懐に入ると夢みて太師を生めりと傳ふ。幼より穎悟常に寺院に行きて僧侶と親しむを悅び七歳の時普門品を誦んず。十五歳にして僧たらんことを誓ひ十八歳にして湘州果願寺の沙門法緒に隨ひて出家し、二十二歳にして南嶽の慧思禪師に謁す。慧思禪師は北齊の慧文禪師の門に出づ。慧文禪師は一代の大德にして智度論を讀み三智實在一心中得の文に至り朗然として一心三觀の理を無師獨悟したりと稱せらる。智者太師は慧思禪師のもとにありて專念讀經觀念に更ける二七日、一夜法華經藥王品の諸佛同讚是眞精進、是名眞法供養といへるを誦するに及び身心豁然として大悟する所あり、卽ち悟る所を以て慧思禪師に呈す、禪師歎じて曰く、汝に非ずんば證すべからず、我に非んば識るべからず、縱令文字の師千群萬衆汝の辯を尋ぐとも窮む可からずと。陳の太建七年秋九月始めて台州の天台山に登り一切經を繙く事十五度、我肱三折の苦學を爲して玆に一代佛教に對し、空前の大判釋を下し、浩瀚にして岐路に迷はしむる散漫的佛典を秩序整然一絲亂れざらしめ悉く法華一乘の大海中に歸入せしめ天台法華の大教學を大成したり。隋煬帝の開皇十一年、帝親ら請ひて菩薩戒を受け、太師に智者の號を贈る。同年故總荆州に歸り玉泉寺を建て玆に入りて大講演を開き、法華玄義（十卷）摩訶止觀（十卷）の幽玄深遠なる教說をなす。之より先き建康の光宅寺に於て法華文句（十卷）を講ず。太師の法を說くや常に何等の稿本を持する無く唯壇に向ひて理義を述ぶること縱橫、しかも論旨整然玄意をつくして餘す無し。弟子灌頂傍にありて之を記し、後に編して三大部を成せり。世に天台の三大部と稱し台宗五教の根本教典となす。智者に灌頂あるはさながら佛に阿難の侍せるが如し。章安太師と稱するは此の灌頂の事なり。以下天台太師判釋の梗概を述べん。

我肱三折の苦學の一代佛教の大判釋

天奉の三大部

章安太師五時の說教

先づ釋尊一代の說法を時に約して五段に分ち、一に華嚴時、二に鹿苑時、三に方等時、四に般若時、五に法華涅槃時となして之を五時の說教と云ふ。華嚴時に說かれしものは卽ち華嚴經にして釋尊が正覺をとられたる菩提樹下に於ける最初三七日間の說教なり。釋尊自覺の御內證を直ちに說かれたるものなれば論旨高遠にして劣機の者の耳には響かず、座に連なれる人皆聾の如く啞の如く唯默然として端座せる釋尊を見るのみなりき。釋尊乃ち波羅奈國の鹿野苑に出でられ、教理を遙かに下して小乘三藏經を說かるゝ十二年。此の期を稱して鹿苑時と云ふ。衆生の機根稍整ひたるより漸次大乘を說きて小乘を貶し彼等をして小を恥ぢ大を慕ふ念を起さしめ奮勵一番大乘に向はしむ。此の間八ヶ年、名づけて方等時と云ふ。方等とは對比的大乘の義なり。次の二十二年間は所謂般若時にして廣く法門を開き具さに行相を示し、一切法皆大乘なりと說きて大小乘の法を隔つる執情を破れり。最後に靈鷲山に於ける八年間の法華經開會は卽ち法華時にして眞實に方便を捨てゝ佛道の眞髓を說き玆に如來出世の本懷を遂げ涅槃の雲に入られたり。斯の如く次第を追うて說かれたりと雖も衆生の機根は一樣なる能はず、大乘の機已に熟したる者のある中に小乘の埒を未だ出づる能はざる劣根の者もあり、玆に於てか機根最勝の者に對しては次第を追はず、直ちに佛陀の所證を說かれしものあり、之を頓教と云ふ。次第を追ひて說かれしをば漸教と云ふ。同じ法會に連りて教へを聽くも聽者の智識に應じて或は小乘と解し、或は大乘と會得するものあり、斯の如き同聽異聞の教へを不定教と云ふ。佛陀の不思議の威力を以て小乘の座に於て大乘を說き、大乘の座に於て小乘を說かるゝも聞者は終に之を知らず、知らずと雖も其の加被力を以て得益を蒙るものを祕密教と云ふ。頓、漸、不定、祕密の四つは衆生を化導する儀式にして之を化儀の四教と云ふ。更に教法の義趣を解釋して藏、通、別、圓の四つとなし之を化法の四教と云ふ。

華嚴時

鹿苑時

方等時

般若時

法華時

頓教

漸教

不定教

祕密教

化儀の四教

化法の四教

藏教通教

藏教とは具さには小乘三藏教と云ふ。三界内に於ける生滅四諦の事相を說く、倶舍宗の如きは是なり。通教とは下は小乘に通じ上は大乘に通ずとの意なり。三界内に於ける無生四諦の理想を說く。卽ち萬有は凡て因緣所生にして實體無し、有の如くにして其實無なりと說き諸法本來生なく滅なしとの無生の觀を以て空理に悟入せしむ、成實宗の如き是なり。

別教

別教とは小乘の徒なる聲聞、緣覺を相手とせず特別に菩薩のみに被る教にしてしかも圓教の如く萬有の相卽融通を說かざれば前後二教に別なりとの義にて名づく、三論の如き之に當る。卽ち萬有は有にあらず、無にあらず、中道眞如の理が無明の風に動かされて無量の現象となり顯はるゝなりとふ無量四諦の說法なり。現象は中道の發現なりと說けども之を發現せしものは眞如の外なる無明の力なりとし、眞如と無明との圓融を說かざるゆゑ之を隔歷の法門とも云ふ。

隔歷の法門

但しこは既に三界の外に言及したる大乘論にして萬有の當體につきこれが融通を說かざるを以て三界外に於ける事相論となす。

圓教

圓教とは迷悟差別一切の法が圓融相卽して無礙自在なるを說く教なり。差別の諸法は皆法性本具の德にして迷も悟の外にあるにあらず、差別の事相は直ちに平等理性の發現なり。眞如の外に無明のあるにあらず、本來法爾として萬法の差別を開顯すべき理を眞如の自體に具備せりと云ふ完全なる絕對論なり。

八教

以上述べ來れる化儀の四教と化法の四教とを合せて八教と云ふ。釋尊が最後の八年に說かれたる法華經は是等八教を攝束したる八教卽一の圓教なり。他の圓教は圓教ならざるものに對比したる相對的圓教にして法華は諸教を網羅し融合したる絕對的圓教なりとして之を區別せり。涅槃教に說かれたる

五味の譬

を以て五時の說教になぞらへたり。華嚴時は乳味なり、自然のまゝにして味淡し。阿含時は酪味なり。方等

乳味
酪味

時は生酥味なり。般若時は熟酥味なり。次第に醇熟して味を增し、法華涅槃時となりて最上の醍醐味となれりとなす。蓋し牛乳を製して順次良品となし最後に醍醐の醇味を生ずる如く佛教も次第に衆生の機根に應じて說き法華經に至りて佛陀出世の本懷たる究竟の教へを說かれたりとなすなり。

生酥味
熟酥味
醍醐味

天台太師は法華經の教理より

一念三千の法門

を開けり。法華經第二方便品の中に如來、舍利弗のために一切諸法の實相を述べて、如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟と宣へり。卽ち如何なるものも法として存するものには相あり、性あり、體あり、力あり、作用あり、依つて起れる因あり、緣あり、果あり、報あり、是等を總括せる本末究竟の法備はれり。之を諸法の十如是と云ふ。如は眞如なり、是は僞りなきなり。如是とは僞りなき眞實相なり。萬有の眞相は此の十如是の外に出でず。又一切有情の世界を分ちて地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界となし、而して正報には衆生世間を成じ依報には國土世間を成じ是等を作れる能成の世間に五蘊世間あり、合せて三世間と云ふ。上の十界は各自に十界を具して百界となり、百界は凡て十如を具すれば千如となり、之を三世間に配して三千の如是となる。此の三千の實相は總べて我等が一念の發作によりて起れば名づけて一念三千と云ふ。

諸法の十如是

十界

三世間

一念三千

一念三千の法門は實に天台宗の骨子にして又佛教教理の肝心なりと思ふが故に繁をいとはず之を再說せん。我等には我等特有の相貌と特有の性と特有の體とを備へ特有の力ありて特有の作用をなす。我等の生れたるには特有の因と特有の緣とありたるは明かにて、今日の我等は過去に於ける因業と現在に於ける種々な

る緣とによれる果なり、報なり。是等一切を總括せる本末究竟は納まりて我等の一身にあり。而して我等は今幸にして生を人間界に得たれども惡める者をば苦しめたしと思ふ地獄の心も存し、飢ゑては人の食事を羨ましと思ふ餓鬼の心も存し、性欲に耽らんとする畜生の心も存し、權勢のため爭奪を欲する修羅の心も存し、靜かに道理を考ふる人間並の心も存し、羽化登仙を願ふ天上の心も存し、敎へを聞きて覺らんと欲する聲聞の心も存し、飛花落葉に對しては何と無く無常を觀ずる緣覺の心も存し、修行を積んで佛陀たらんと欲する菩薩の心も存し、鱠魚の相食むを見ても哀れと思ふ佛陀の心も存するなり。卽ち我等は一人にして十如十界を具するにあらずや。しかもこは我等が心に人間の心熾なれば人間として十界十如を具せるなり。我等の心もし畜生の心熾んなる折ならんには卽ちこれ畜生なり。されど此の場合にも他の九界の心を全く失へるにはあらず、これ畜生にして十界を具せりと云ふ可し。我等が心もし慈悲の心熾んにして全く他の心を覆ひたらんには我等は卽ちこれ佛なり。しかも他の九界の心性全く滅したるにはあらず、卽ち佛にして十界を具せるなり。他の場合も全く同樣なれば十界各自に十界を具して百界となり、百界は何れも十如の相を備ふれば千如となり、之を三世間に配するとき明かに三千の實相となるなり。此の三千の實相何ものぞと究め行くとき我等一念の作用に外ならざるを知る、卽ち我等が一念の三千なり。我等が一念の中に三千世界を顯出すべき因を悉く具備しあるなり。親殺しの大罪人にも哀れを感ずる涙あり。一切衆生を救はんとする佛陀の心にも地獄の相うつりて之を說かる、その相のうつるは地獄の心存すればなり。此の一念三千の法門は

法性本俱

の根本說より當然生じ來るべきものなり。差別の諸法は本來眞如の當相なりと、卽ち善惡開發の因は本來眞如の中に備はれり。但し善惡並び存すと云ふにあらず、法性は無記なり、善にあらず、惡にあらず、其の善惡の差別を生ずるは畢竟一念の所作に外ならず。さきに述べたる十界の說も說明の順序として說けるのみ、十界の心並び存すと云ふにあらず、一念の作用により種々に變化するなり。常に慈悲の心を養へるものにありては佛、菩薩の心となりて顯はるゝ事多く、他の心を生ずること少なし。されど本來固定性のものにあらざれば緣に從つて他の心をも生ぜんとする傾向あり、之を十界俱有と說けるのみ。例へば玆に一振の名刀ありとせんにこは善性とも云ふべからず。惡性とも云ふべからず。用ふる人の如何によりて奸を誅する寶刀ともなり、忠に仇する不祥の劍ともなるなり。法性に善惡の差別を生ずるもの亦實に一念の所作に外ならざるなり。玆に於てか我等は一念發起して佛陀の位にまで向上するを得べく、墮落しては那落の地獄にも沈淪すべきなり。

空諦
假諦
中諦
三諦

斯の如く三千の諸法は本來寂滅相にして定性あるものにあらず、如々として唯空なり、之を空諦と云ふ。一念僅かに動けば萬差の現象歷々として生じ來る之を假諦と云ふ。假諦の現象の生ずるは諸法に定性なきに因る、空假の二諦は圓融して不離同體、空卽假、假卽空なり、之を中諦と云ふ。假へば鏡面の明朗として一物の障ふる無きは空なり。種々なる影像のうつり來るは假なり。明朗として空なるか故に種々なる假象うつり來る、これ鏡の自然に備ふる中道の德性なり。空、假、中の三諦互に融合して一諦なるもの之を圓融無礙の三諦と名づく。この三諦の妙理を觀照するを三觀と云ふ。三觀は智惠にして三諦はその對象なり。されば三諦三觀その名異なりと雖もその體一なり。之を吾人の一心に具せりと觀了するを

一　心　三　觀

と云ふ。一心三觀の心月を澄まして萬象に對するとき一切の國土は淨土と化し、一切の物類皆佛となり、松吹く風も法の聲、柳の綠も觀音微妙の相となり、その玄その妙云ふべからずして娑婆卽寂光の理り眼前に顯はれ來らん。此の時に於ける吾人は旣に佛陀なり。

智者太師晩年再び天臺山に上り專念臺宗の蘊義を宣揚する事に勗められ開皇十七年十一月六十歳の壽を示して入滅せらる。

荊溪尊者

時代遷りて唐の代となり、華嚴の高きを論ずるあり、眞言の深きを嘆美するあり、敎外の別傳と稱する禪宗亦盛んになり、臺山の月影漸やく光り薄らぎ來るや、荊溪尊者湛然、慨然として立ち「將に正を取らんと欲する者予を舍きて誰にか歸せん」と喝破し三大部の註釋九十卷を作りて塞を通じ妄を破し玄宗の末より肅代二世の間大いに祖意を顯揚し宗運を挽囘せり。世に妙樂太師と稱す。その門に興道尊者道邃和尙あり。

道邃

道邃は實に我朝天臺の開祖たる傳敎太師の師なりけり。

其七、華嚴宗

天臺太師より後るゝ事約百年にして

賢首太師

あり、香象太師とも云ふ。唐の太宗の代貞觀十七年長安に生る、實に一世の博識を以て稱せられたり。これより先き杜順禪師あり。陳隋の際に生れて大いに華嚴の敎理の高きに服し法界觀門、五時止觀等の書を著して華嚴の法門を發揚す。その門に智儼法師あり。搜玄記、孔目章等の書を作りて之が宣傳につとめたり。賢首太師は智儼につきてその蘊奧を極め五敎章を作りて華嚴宗の敎相、義理を明かにし探玄記二十卷を著して華嚴經を釋し、玆に本宗を大成せり。深く玄宗皇帝並びに則天武后の歸依を受け嘗つて命を奉じて華嚴を講じ、賢首品に至るや、忽然として天より妙華を降らしたれば是より賢首菩薩と呼ばれしと傳ふ。今その一代に對する敎相判釋を略述せんに

五敎の判釋

小乘敎

先づ小乘敎、大乘始敎、終敎、頓敎、圓敎の五敎に分ちたり。こは天臺五時の敎相の如く年代によりて別ちたるものにあらず、所說の法門の淺深によりたるものなり。小乘敎とは聲聞、緣覺等の劣機の蒙る敎門にして人法二空の中、人空のみをあかして法空をあかさゞるもの、

大乘始敎

大乘始敎とは漸やく小乘の區域を脫して大乘の敎理を說くと雖も、大乘深妙の義を內に含みあらはに之を顯はさゞれば之れを始敎と云ふ。

終敎

終敎は大乘終極の敎門にして空に偏せず、有に偏せざる事理融通せる法門なり。以上は修行の行位に次第階級を設け優劣淺深を示すものゆゑ漸敎と云ふ。

頓敎

頓敎とは斷惑證理の階位を設けず、八識二無我等の諸法差別の相を說かず、一念不生卽佛と立て直ちに眞性妙理を顯示すと云ふ無言絕相なる頓速頓悟の敎門なり。

圓敎

圓敎とは卽ち華嚴經の所說を指す。天臺に於いては法華經を以て絕對的圓敎となせど本宗に於いては法華を大乘終敎の部に入れ、華嚴を以て絕對的圓敎なりと論ずるなり。天臺の五時の敎相を破れるにはあらず、唯觀察の方面を異にしたるなり。天臺にありては佛陀出世の本懷は最後の說法なる法華經にあり、一切の法門この中に納まれりと論じ、華嚴にありては佛陀が自覺の內證をそのまゝ直ちに說かれしものなれば、最初の華嚴こそ佛敎の根本なれと云ふ。更らに四法界の法界觀を立て十玄緣起の法門を說きて華嚴の位置の最勝なるを論ぜんとせり、

四法界

事法界
理法界
事理無礙法界
事々無礙法界
一滴の水に大海納まる

とは事法界、理法界、事理無礙法界、事々無礙法界の四類にして事法界とは眼前に見る所の森羅萬象の差別の相を表面より觀じたるなり。理法界とは不增不減にして一切平等無差別なる眞如界を觀じたるもの、萬法の自體を理の方面より內觀せるなり。事理無礙法界とは萬法差別の事相は眞如の理體より開顯せるものなれば現象を離れて眞理無く眞理を離れて現象無し、二者互に融通して無礙なりとの理象卽置在觀なり。事々無礙の法界とは眼前に見ゆる事々物々は皆法性の顯はれにして法性の理は圓融無礙なれば從つて是等の事々物々皆圓融して無礙なり。縱令一微塵の微と雖も法界の事理を具備するゆゑ一滴の水にも大海納まるべく、一の中に千萬無量の數を備ふべしと說くなり。小乘敎は物心諸法の差別を說き、法相宗の如きもその事相を立つる方面に於て何れも事法界觀に屬し、三論宗は諸法皆空と說くを以て理法界觀に屬し、天臺の論ずる所は事理無礙法界にして唯華嚴のみ事々無礙の玄を說くと云ふが本宗の所論なり。

同時具足相應門
金獅子の譬喩

事々無礙法界の理を更に詳細に論じたるものが卽ち

十　玄緣起門

なり。其名目の如き煩はしければ之を省かん。その第一を同時具足相應門と云ふ。之を總說とし他の九門を別門とす。第一の門を開けば後の九門となり、後の九門を合すれば最初の一門に歸結す。凡そ宇宙の萬有は個々別々に分れありと雖も互に脈絡貫通して相互に重々緣起の關係をなせり。賢首太師は則天武后に向ひ殿階の金獅子を例にとりて此理を敎へられたり。金は獅子を作れる材料にして獅子は之によりて作られたるものなり。されば此の金無くんば此の獅子あるべからず、しかも此の獅子の體を外にして材料たる金は無きなり。畢竟この金とこの獅子とは相卽不二なり。金は此の獅子を作れるものなれば理に相當す、獅子は作られたるものなれば現象卽ち事に相當す。此の二つのもの不二なるが理事の不二を示すものなり。而して獅子の眼耳鼻舌身より毛孔の微に至るまで同時に具足して圓滿に相礙げず、これ一切の事理同時に具足するなり。しかも此の獅子その一毛を損ずるも完全なる獅子の全體と云ふべからず、卽ち獅子の一毛は獅子の全體を包容するものなり。云ひ換ふれば部分を離れて全體なく、全體を外にして部分無し。部分に全體を包容すべき理の存するは明かなりと云ふべし。此の理を推して一ヶの芥子粒の中に須彌山を容れ、一滴の水に大海を收むる道理を知るべきなり。

因陀羅網の譬喩

賢首太師は更に寶珠の譬喩を以て巧みに重々緣起の理を說明せり。玆に帝釋天の宮殿に因陀羅網と稱する玲瓏たる無數の珠玉もて作れる網あり。その一つの玉に黑點を附すれば他の千萬無數の珠は悉くその影をやどして又互に影じあひ重々無盡の黑點を生ず。斯の如く我等の一言一行は悉く宇宙法界に瀰滿して餘すなく、又一室中に千燈を點ずるに其の光り互に涉入して毫も遮塞せざる如く萬物互に相映じ相重りてしかも何等の遮ぎるなく重々無盡に相緣起し、一は多に卽し、多は一に卽して融通自在なるべき事相を論じたり。

一刹那に永劫を容る
一位は一切位なり

上の說明は空間的に事々無礙を論じたれど更に時間に約すれば過去、現在、未來の三世も互に相緣起して變化し行くものなれば今の一刹那と雖も無限の過去にも無限の未來にも相關係するものにして今の一刹那はなれて過去無く未來無し。此理を推して永劫を縮めて一刹那に容るべく、一刹那を伸べて永劫を兼ねしむるを得可し。一塵を舉ぐれば萬界共に舉り、一行を修すれば萬行たちどころになる。一位は一切位なり、一行は一切行なり。されば一面に於て修行の階段を設け多數の歲月を要する如く說くも、他面に於て一念の短時間に萬行を具足して成佛の利益を示すを得るなり。一々の微塵中に十方の世界あり、一々の毛孔中に無數

の佛土あり、一佛の毛孔を觀へば一切衆生悉く其の中にあり、一々の蓮華中に幾億萬の佛身を現じ、一々の毛端に一切の世界の光明を放つ事を說きたる華嚴の所說は妄誕を極めたるが如きも事々物々融通無礙の理より推演せる玄妙なる理想の極致にして如來が菩提樹下に洞觀せられたる悟りの境界なり。かゝる深遠の理を機根未熟のものに說くとも悟り得べからず。聾の如く啞の如く一語をも解せざりしと云ふもの故あるかな。貧里の寓子が百萬長者の招ぎに恐れて逃げたりと云ふ法華經の譬喩穿ち得て妙なりと云ふ可し。但し此の事々無礙の思想は獨り華嚴にのみ限れりと云ふべからず、法華經開會に於て過去、現在、未來の諸佛悉く集まり、十方の佛土は娑婆世界と通じて無礙透徹になれりと云ふもの豈に空間に約しても時間に約しても融通無礙なるを說きたるにあらずや。

清涼太師

賢首太師の寂後、敎義に異論を挾むものあり、一宗の正統將さに湮滅せんとするに當り澄觀太師（荆溪尊者と同時の人）之を歎き華嚴の經疏を作りて本宗を再興せり。太師は五臺の清涼山大華嚴寺に住せしを以て世に清涼太師と云ふ。

其八、佛身觀

應身佛

釋尊所說の法門は次第に論議追究せられて微を開き細を穿ち終に天臺、華嚴に至り殆んど其の極致に達したり。敎理の進むに從ひ其の佛身觀も次第に發達し來り、初め覺りの人を以て目せられたる釋尊は宇宙法界の眞理の權化と仰がれ、終には法界の眞理そのものなりと信ぜらるゝに至る。宇宙法界に漲る大悲心が人類のすがたに應じて法を說かれたりと見る時、之を應身佛と云ふ。印度の伽耶城に生れられ八十年の生命を示して滅度せられし釋尊はこれ應身佛なり。佛敎々理の眞諦は因果の理にあり、一事一物因果の理を離れたるものなし。佛陀の果を得んには之が因を修せざるべからず。大悲心を起して一切衆生を救はんとし、如何なる苦勞困難をも之を甘受し、一身皆擧げて衆生濟度に盡すと云ふ最大修行の因は佛果と稱する最上の報を得て法界に通達無礙の絕對智者となる、之を名づけて報身佛と云ふ。四十八の大願を果さんとして無限の長き歲月に涉り、修行を積まれ終に極樂淨土を建設せられたりと云ふ阿彌陀佛の如きは報身佛の一例なり。更に進んで考ふれば修行によりて佛陀の生ずるも畢竟大悲心を生ずべき宇宙本來の大靈力なかるべからず、之を名づけて法身佛と云ふ。法身佛を理體の方面より考ふれば宇宙の眞理と稱するものに外ならず。一切の萬象は悉く眞理の表顯なれば卽ちこれ法身佛の顯はれなり。されば冷やかなる心もて觀ずれば川の流るゝも、山の聳ゆるも、鳥の飛ぶも、獸の走るも、唯しかあるべき理によりてしかあるのみと思ふに過ぎず。今日の科學者の研究は此のしかあるべき理を我等の智識欲を滿足せしめ得る程度までに知らんとするなり。研究の目的已に玆にあり、如何に科學研究の終極に達したりとするも法身佛には觸るべからず。されど一度樂しき生涯、甲斐ある人生を欲すと云ふ我等有情の僞はらざる本來の希望より出發して初めは果敢無き浮世をかこち儘ならぬ世を歎じたるもの、何かの緣により翻然として眞理を達觀したるとき無趣味、不自由、苦痛を以て滿たされし世はさながらに寂光の樂土と化し、山の聳ゆるも、川の流るゝもそれ〴〵に趣きあり、鳥の囀づるも、獸の走るも、乃至樂しきも、苦しきも、我を慰め我を導く佛の方便と觀ぜられ、玆にはじめて理體の眞理は法身佛の大慈悲となりて顯はれ來らん。以上を法、報、應の三身佛體と云ふ。而して華嚴、天台の大乘佛敎にありては法報應の三身卽一と論ずるなり。蓋し釋尊の應身は過去遠劫の昔より衆生を救はんと生を替へ世を改めて修行を積まれたる結果が終に菩提樹下の成道となられたればやがてこれ報身佛なり。法華經の

報身佛

法身佛

理體の觀察

科學の目的

法身佛の感得

三身卽一

迹門は之を道破せり。しかもその大慈悲心は法爾として無始無終に渉れる法身佛におはすなり。法華經の本門如來壽量品は實に之を開顯したるものなり。斯の如く觀ずるとき釋尊は法報應三身卽一の如來にておはすを知るべし。

應身佛の說法

顯教

法身佛の說法

其九、密　教（眞言宗）

眞言密教

法、報、應の三佛身は一に卽すべき事、上に述べたる如くなれど觀察の方面を異にする時、應身佛、報身佛は法身佛の化身に外ならざれば法身佛は本體にして應身佛、報身佛は其の一部の表顯に過ぎず。釋尊の如きその御內證に至りては究竟の境に達しられたりと雖も、その說かれし所は衆生の根機を相手とせられたるものなれば未だ其の祕奧を盡さず、俱舍より乃至天台、華嚴に至るまで皆これ應身佛の說かれし顯教なり。絕對究竟の教へに至りては佛と佛とのみあかしあひ給ひ衆生に對しては祕密に附せられたり。然るに法身佛大日如來が常恒不斷に說かれたる自受法樂の法門を上首の金剛薩埵が經文に結集して南天竺の鐵塔の中に置きたるを龍樹菩薩之を開きて金剛薩埵に拜謁し、大日經、金剛頂經その他密部の教典を授かり、茲にはじめて金胎兩部の祕訣を受けて弟子の龍智に傳へたり。これこそ眞實究竟の教へなれと論ずる一派あり。眞言宗これなり。眞言とは方便ならざる佛陀の眞言なりとの意なり。釋迦佛の說教を顯教と云ふに對して之を密教と云ふ。

龍樹菩薩
金剛薩埵

善無畏三藏

金剛智三藏

善無畏三藏龍智菩薩に從ひて密教を學び唐の開元四年支那に來り玄宗皇帝の勅を奉じて大日教を譯したりと云ふもの支那に於ける密教の初めなり。されど密教の正統を傳へたりと稱せらるゝものは善無畏より四年遲れて支那に來れる金剛智三藏なり。金剛智は龍智に就きて密教正統の附屬をうけ三十一歲の時その高弟不空三藏を俱して支那に渡り盛んに密教の宣傳をつとめ開元廿九年七十一歲を以て沒したり。その後を襲げるは不空三藏なり。不空三藏は錫蘭島に生れ諱を智藏と稱す。開元六年十四歲にして金剛智に師事し、開元八年師と共に支那に來り、金剛智の滅後その遺命によりて印度に歸り、龍智にあひて密教の梵本五百餘部を授かり、天寶八年唐に歸り、同じき十二年より譯譯をはじめ大歷六年十二月まで殆んど一百十部にわたる大譯述をなし大歷九年六月九日長安の大廣寺に於て寂す、壽七十。實に羅什、玄奘と並び稱せらるゝ譯經家にして玄宗、肅宗、代宗三帝の歸依をうけ密教のため萬代の基礎を作りあげたり。不空の後を繼げるは慧果阿闍梨にしてこれ卽ち我朝の弘法太師に法を傳へたる偉人なり。眞言宗の教相判釋を完成したるは弘法太師にして支那にありては一ケの祕密的學說と云ふ有樣なりき。されば其の判釋の如きは弘法太師を述るの條に讓り茲には眞言所說の大綱たる六大、四曼、三密の概略を述る事とせん。

不空三藏

慧果阿闍梨

六大

地、水、火、風、空、識大の義

とは地、水、火、風、空、識の六なり。茲に地と云ふも水と云ふも今日理化學に論ずるものとは大いに異なり、固有の物質を指せるにあらずして其の性を述べたるものなり。卽ち地とは靜的固性のもの、水とは濕性のもの、火は溫性、風は動性、而して空とは定相なきもの、識とは心法なり。その大と稱するは以上の六つの物が宇宙に遍滿して至らざる無く、一切の萬象これに依りて成ればなり。換言すれば六大とは眞如實相の異名なり。是等六大は相互に融通無礙にして又各自に無碍自在なり。卽ち一大の存する處他の五大必ず之に伴ふ。宇宙間何れのものを擧ぐるも地大ならざるもの無し、而して甲を作れる六大と乙を作れる六大と互に融通するゆゑ鬼畜を作れる六大は轉て佛、菩薩を作る

隨緣の六大
法爾の六大

六大ともなるなり。衆生の作れる業に千差の別あり、各自の因緣萬樣なれば、依りて感應する隨緣の六大にも善惡、苦樂、有漏、無漏等の區別あれども、其の本體たる法爾の六大に於ては常に法界に遍滿して三世常恒不增不減なり、之を大日如來の法身となす。大日如來の性德を開示するために

金剛界、胎藏界

胎藏界
金剛界

兩部曼陀羅

の二部を立つ。胎藏界は母の胎内に其子の身體を含藏する如く大日法身の中に一切諸法を攝持すてふ慈悲の意を示し、地、水、火、風、空の五大を以て之に配し、金剛界は金剛の如く動きなき大日如來の智慧を顯はせるものにて識大を以て之に配す。しかも智慧は慈悲を離れず、慈悲は智惠を離れざる佛の圓滿具足せる德性を顯はせるものなれば二者一に卽して離れざるものなり。此の理を圖に顯はせるものを金胎兩部の曼陀羅と云ふ。曼陀羅とは梵語にして圓輪具足して缺くる無しとの意なり。されば宇宙法界は金胎兩部の大曼陀羅にして圖に顯はせるは其義を示せる縮圖のみ。而して圖解の曼陀羅に四種の別あり、之を

大曼陀羅
三昧耶曼陀羅

四曼陀羅

と云ふ。諸佛菩薩の形體相好を表示せるを六大所成の意にて大曼陀羅と稱し、宮殿樓閣より刀劍輪寶機杖乃至草木國土に至るまで佛菩薩の大智大悲より起る內心の本誓を表顯すと見るものを三昧耶曼陀羅と云ふ。例へば釋迦如來の衣鉢、不動の利劍、觀音の蓮華の如き之なり。三昧耶は梵語にして本誓、除障、平等等の義あり。畢竟佛菩薩の衆生を濟度するため魔障を除き、平等に利益を施さんとする誓願の本質を物體によりて象徵せるなり。釋迦如來は諸法無我の理を示し、貪欲を離れしめてそれより衆生を愛りに導かんとし給へれば一衣一鉢の出家の相、これ卽ち釋尊の三昧耶曼陀羅なり。不動尊は降魔の利劍を以てその大悲の心を代表し、觀音菩薩は濁れる衆生界に身を現じ、蓮華の淨きを理想として衆生を救はせ給ふより之を三昧耶曼陀羅となせるなり。又諸佛菩薩の種子並びに經卷所說の文義、言語等人をして之に對して理解を起さしむる標的となるものを法曼陀羅と云ふ。眞言にては薩字を重んじ之に就きて特殊の玄理を說き、字母を以て諸尊を代表せしむ。例へば阿字を以て大日如來を表はし、吽字を以て金剛薩陀を表はすが如し。故に阿字に本來不生不滅の眞理を含めりとし、阿字を觀ずるによりて大日の眞理に入るを得可しと說く。かゝる聲字を佛菩薩の種子と名づく。而して是等佛菩薩の衆生濟度のため行動する一切の作用を羯曼陀羅と云ふ。以上の四つを併せ稱して四曼陀羅といへるなり。

法曼陀羅
聲字
佛菩薩の種子
羯曼陀羅
四曼の例解

本系は更に之を布演して宇宙萬有を組織する一切のものは皆この四種曼陀羅を具足するものなりと論ずるなり。一例を軍人にとれば其の人體をなせるは大曼陀羅なり。三尺の劍は三昧耶曼陀羅なり。軍人たるべき精神枝能は法曼陀羅なり。劍を採りて逆を打ち、正を助け護國の實を現はすは羯曼陀羅なり。斯くて一切衆生の有する四曼は其儘佛陀の四曼と一體不離なりと悟る處を佛智と云ふ。已に佛智を開發すれば此の身さながらに佛陀なり。斯くの如く衆生本來佛身なれども煩惱の雲に遮られて微妙善美の曼陀羅會上に優遊するを知らず。大日如來は玆に迷者を憐れむあまり凡身に卽して佛身なることを十界輪圓の曼陀羅に依りて開示し給ひ卽事而眞の法を說き給ふ。

卽事而眞

凡夫卽佛陀

とは現象の事相そのまゝ眞如なりとの意にて凡夫卽佛陀の心なり。今少しくこの心を論ぜんか。愛は元來美德なり、神の博愛、佛の大慈悲皆この愛の發露に外ならず。されど迷へる凡夫にありては小さき我に執着し、

財寶を愛し、聲色を愛してはては不義不德のあらゆる罪惡となり了る。聲色を愛する愛も、道義を愛する愛も眞理を愛する愛も同一の種子より發するなれど迷へるものと悟れるものと終に萬里の隔たりを生ず。しかも本來不二のものなれば聲色に溺れて欲界の奴隷となれるものも一度無明の夢醒むれば直ちに菩提の人となる。龍樹菩薩もはじめは欲界に彷徨へる荒凡夫なりき。阿育大王も初めは破倫の無道者なりき。されど一度迷ひの雲去るや法界を照らす光りと仰がれたり。これ卽ち凡夫卽佛陀煩惱卽菩提の實例なり。更に吾人凡夫が卽身成佛すべき修行の道を說きて

三密加持

三密

三密瑜伽加持

と云ふ。三密とは身に行ひ、口に云ひ、意に思ふ身、口、意の三業にして佛陀の三業は衆生の測知すべからざるものなれば密と云ふ。但し佛陀の之を祕密にすとの意にあらず、衆生の三業は本來佛陀の三業と同一なるべきものなれど、迷見によりて之を知らず、故に密と云へるなり。今心に本不生の阿字を觀じ、口に佛陀の眞言を誦し、手に諸尊の印契を結び、若しくは其の三摩耶形を持して佛陀の三業を衆生の三業の上に現ずる時は、佛陀の三密は直ちに衆生の三密となる、之を三密瑜伽と云ふ。瑜伽は梵語にして相應と譯す、卽ち佛陀と衆生と相應じて玆に佛果を證するとなり。此の相互の關係を加持と云ふ。加は力を與へて加護するを云ひ、持は攝持して失はざるに名づく。卽ち吾等信心を起して佛を念ずれば佛陀の淨心は吾等衆生の心に印現し來る、此れ加なり。吾等こゝに佛心を感得して無漏淸淨の法悅に滿たさる、此れ持なり。又吾等が佛の本願を念ずるを加となし、佛の大悲よく我等の誠心を攝受するを持とすることあり。要するに感應道交と云ふ語と全く同意なり。密敎に於ける實際修行の場合には或は供物を加持する法あり、壇場を加持する法あり。

陀羅尼

新禱

事相の上に眞如を論ず

卽身成佛

不立文字禪宗

例へば加持香水とて密壇の上或は道場の入口にある香水を加持することあり。手に三鈷の印を結び甘露明と名づくる陀羅尼（陀羅尼とは佛菩薩の說き給へる呪語にして一語の中にも萬德を包藏す、故に總持と譯する事あり。如來の實語なればとて之を眞言とも云ふ。こは誦すべくして解すべからず、解すべからずと雖もこれを誦すれば不可思議の妙力を顯ずとなす。されば一切の陀羅尼經は飜譯せずして其儘誦するを法とす）を唱へながら印を左右に廻はし心に觀想を用ふれば玆に香水はその感應を受けて淨化せらるゝなりと云ふ。斯くの如く理談を事相の上にうつして眼前に佛陀の靈力を示し、精靈の解脫を祈れば中有に迷へる有情も忽ち得脫して淨土に往生し、施主の滅罪を祈れば罪障頓滅して諸願も成就すと云ふもの實に密敎の特色なり。思ふに佛敎に祈禱と稱することの起れるは玆に起因せるものなるべし。高尙なる理論を實際の上に示して一般衆生の信仰心に一種の滿足を與へたる功は確かに沒すべからざるものあれど、延いて世俗の迷信を助長したるは爭ふべからず。

他の大乘諸宗にありては眞如を本として萬法を論じ、眞言にありては萬法を本として眞如を論ず。眞如卽萬法の極致に至りては兩者一なりと雖も、前者は觀念に傾きて理に趨り、後者は現象界の事實の上に眞如の靈動を認めんとするものなり。前者に論ずる眞如は無形無色の理なり。後者に論ずる眞如は有形有色の事相なり。眞言に於て卽身成佛を力說するもの大いに理由あるを知るべし。

其十、敎外の別傳

上に述べ來れるものは何れも經論を所依として佛敎の面目を發揮せるものなり。然るに何れの經論をも所依とせず、不立文字、敎外別傳を標榜して直指人心、見性成佛と說く一宗あり。禪宗是なり。佛陀の覺り

の境界は絶對にして相對的智識を以て論究し得べからざるは云ふまでも無けれど他の論議的佛教にありては論議を一の手段となし、經文を唯一のよりどころとし、導き〳〵て悟道に入らしめんとす。しかも經文になづむの結果は枝葉に渉り、論議は論議を生じて徒らに繁雜を極め眞の佛道に遠ざからんとする傾向あり。禪宗にありては座禪觀法によりて一切の妄念を拂ひ、一念直ちに佛教の第一義諦に觸れんと勗むるなり。經文は見てこれ佛陀の月を指す指に過ぎず。一度月を觀るに及んで指に要なし。一切の經文は之を捨つるにあらず、探るにあらず、活殺自在にして、要は唯我が心内の佛性を認むるにあり。そも〳〵禪とは梵語禪那の略にして定或は靜慮と譯す。念慮を安靜にして眞理を思惟し、以て不動の定に至るの謂ひなり。佛道修行の六波羅蜜の一なれど本宗にありては禪の一字に六波羅密の修行悉く備はるとなすなり。恰も律宗に於て戒の一字に他の一切を攝すと云ふに同じ。

経文は佛陀の月を指す指

禪宗の起原

禪宗の起原は實に釋尊の菩提樹下に於ける座禪觀法の方式にあり。附法のはじめは釋尊靈山會上の說法に於て金波羅華の花を拈し無言にして法弟に對せられし時迦葉尊者ひとり微笑して其意を悟られ正法眼藏涅槃妙心の奥祕を傳へられしと云ふに因ると雖も其の宗名となりて顯はれしは傳法第二十八祖の正統と稱せらるる達磨太師におこる。

達磨太師

は南印度なる香至國王の第三子として生れられたり。幼より穎悟、禪宗の第二十七祖般若多羅尊者の讖る所となりてその血脈を授かり、尊者の滅後その遺命を奉じて支那に來り法を傳へたりと云ふ。南北時代梁の普通七年九月廣東に着し、翌大通元年十月金陵へおもむき梁の武帝に面會す。當時武帝は熱心なる佛教信者にして其の佛道興隆のため盡せる功績を舉げて以て其の功德を尋ぬるや、達磨は一言の下に無功德と一喝し去れり。武帝懌ばず、更に聖諦の第一義は如何と問ふや、廓然無聖と答へたり。其の心は武帝が献身的に盡したる佛道の供養も無功德なりと云ふならば佛道究竟の目的は何ものなりやと問ふに對し、澄み渡れる空の如し、求むべき何物も無しと答へたるなり。三寶のためあらゆる供養を施して佛果を得んと望みたる武帝には其意を解する能はずして再び「朕に對する御身は何物ぞ」と問へり。達磨は一言「不識」と答へたるのみ。其の應答者の間にはあまりに懸隔ありき。武帝は啞然たり、達磨は憮然たり。達磨は去れり、武帝止めず。對者不相應にして然かも相應せる逸話を千古にのこし達磨は飄然楊子江をわたり魏領嵩山の小林寺に入り弦に面壁九年の觀法を修して靜かに遺法附屬の俊秀を待てり。笈を墮して頭を回さゞるも斤を揮ひて鼻を犯さざる一人を得たり。月霜輪を轉じて北斗夜柄を垂るゝ一夜、稀世の俊傑慧可神光和尙、鋭刀一閃腕を斷じて求道の誠心を示すに及び達磨はじめて印可を與へ嫡々相承の衣鉢を傳へて支那に於ける禪宗第二の祖となせり。達磨支那に居ること十年、魏の天平三年(梁の大同二年)十月五日入滅す。同年十二月廿八日洛陽嵩州の熊耳山に葬りて塔を定林寺に建つ。後唐の代宗皇帝より圓覺太師の諡を賜はれり。

廓然無聖

不識

面壁九年

慧可和尙

神光和尙

は第三祖鑑智僧璨を得て法を授け、後舜和法師と教理の爭ひをおこし、終に寃罪を蒙りて開皇十三年斬罪に所せられたり。僧璨は信心銘を著はし第四祖道信を得て寂す。道信亦極めたる傑僧なりき。唐の貞觀十七年、太宗皇帝が四隣を席卷せる武威を以て三度之を招致せんとしたれども從はず、太宗怒りて其の頂を切り來らん事を使者に命じたるに道信は平然として首をさし出せり。何ものにも屈せざる意氣の前には終に太宗を服せしめて不拜王侯の面目を全うす。第五祖大滿弘忍の門下より大鑑慧能、玉泉神秀の二神足を

鑑智

道信

大滿弘忍

慧能　神秀

出せり。はじめ慧能は碓房に米を舂きたる下司僧にして神秀は黄梅山に於ける千五百の大衆の首座にて法嗣に擬せられたる高弟なりき。一日弘忍、門下に命じて其の悟る所を述べしむ。神秀乃ち偈を作る。

身是菩提樹、心如二明鏡臺一、時々勤二拂拭一、勿使惹二塵埃一。

米舂の下司僧忽ち之を破して曰く

菩提本非樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹二塵埃一。

其の識見はるかに神秀の上にあるを見、弘忍乃ち之を碓房より拔きて衣鉢を傳へ第六祖となす。しかも神秀との間終に圓滑なる能はず、慧能は去りて南方(今の廣東地方)に法を弘め、神秀は北方長安に勢を振へり。

南禪　北禪

前者を南禪、後者を北禪と云ふ。北禪は之を導くに詢々たり。南禪は一喝一棒直ちに肺肝をさすが如き勢あれば世に南頓北漸の稱ありき。而して北禪の系統はやく衰へ、南禪ひとり榮え傳へて今日に至る。嫡々相承の衣鉢も第六祖に至り傳燈上の爭はげしくなれるより之を廢するに至れりと傳ふ。

臨濟の祖　南嶽禪師　曹洞の祖　青原

慧能の門下數多の俊足を出したり。中にも化風の最も盛んなりしは南嶽禪師懷讓にして青原行志禪師之に亞ぐ。南嶽禪師は臨濟系統の祖にして青原は曹洞系統の祖なり。唐の中葉以後、佛教諸宗の中、禪宗は特に盛んにして臨濟、曹洞、潙仰、雲門、法眼の五派を出せり。潙仰、雲門、法眼の三派は今日に全く傳はらざる故之を略す。

馬祖道一　百丈和尚

南嶽禪師の門に馬祖道一あり。宗風擧揚の盛んなりしこと南嶽を凌ぐ。馬祖の門より百丈和尚懷海を出す。一日作さざれば一日食はずの則を守りて弟子を率う。その門に黄檗希運禪師あり。臨濟禪師義玄は實に此の黄檗禪師の法を嗣けるものなり。臨濟禪師の黄檗に仕ふる二十年。佛法の大意如何と尋ぬる事前後三回、終に一句の教へも無くして三度頭を打たる。臨濟も因緣なきものと斷念して茲を辭し、大愚和尚に參して委細を話すや、大愚案を拍ちて黄檗の深切を賞す。臨濟此の時廓然として大悟し早々黄檗の許に歸りて其の罪を謝し、終に臨濟派の開祖と仰がるゝに至る。

佛法を尋ねて頭を打たる

長价禪師　曹洞宗

青原の法嗣に石頭和尚あり。それより藥山、雲巖の二禪師を經て洞山の良价禪師あり。即ち曹洞宗の祖にして六祖慧能の居れる曹溪の地と此の洞山の名とを合して宗名を生じたりと云ふ。

禪宗の特色

元來禪宗は教理解釋に依るものにあらず、直覺的に天地の大道、宇宙の眞理に觸れんと欲むるものゆゑ其の宗教的根據に別派を生ずべき理由なし。唯直覺的なり、故に之を發揮したる人格の風丰に特殊の色彩を生じ、後來繼ぐもの各々其の好む所に從つて長き歲月の間に自ら種々たる別流を生ずるに至りしならん。古より臨濟將軍、曹洞土民と云ひ傳へたり。蓋し臨濟の威を奮つて一喝する有樣、さながら馬上の將軍か百萬の貔貅を叱咤縱橫する概あり。曹洞の深切に人を導く有樣は農夫が孜々として耕作に從事するに似たりと云ふなるべし。

臨濟將軍　曹洞土民

臨濟禪の面目

臨濟禪師、門下に對し教へて曰く

赤肉團上、有二一無位眞人一、從二汝等諸人面門一(口)出入、未證據者看看、

一人の僧

如何是一無位眞人

と問ふや、禪師、禪床を下り其の僧を捉へて單兵急に

道へ道へ

と詰る。その僧喫驚して云はん所を知らず。禪師直ちに之を突き放し

一無位眞人、是什麼乾屎橛（一無位の眞人とはこれ何の糞べらぞ）

と言ひも了らず衣を掃つて方丈に歸る。

これ臨濟禪の面目なり。其の息もつきあへざる所に微妙の機存す。機根熟せるものにありては此の瞬間に大悟徹底するなり。かゝる問答は其の字義を穿鑿して理會し得べきものにあらず。心田の朗然として開發せらゝもの殆んど直覺的にして理論を超越せるものなり。俱胝和尚の一指の禪にあやかれる小僧が師のために指頭を切られ泣いて退くや、突然その名を呼ばるゝに應じ切られし指を立てんとして忽然悟れりと云ふもの、南泉和尚が猫を斬りて有無の執着を滅せしと云ふもの、其他破石の聲に悟りを開き、星の光りに自覺せりと稱するもの古今に其の例甚だ多し。こは常識を以て判ずべきにあらず、理論を以て推究し至るべきものにあらず。一心に道を求めて息まざるものゝ向上して大靈に接觸する際におこる自然微妙なる心界の消息と云ふべし。劍道の師が其の高足に奥義を傳授すと云ふを聞くに互に刀を含して睨み合ひ、氣合ひの移りたる瞬間にそを了するなりと云ふ。口に言はれず、筆にかゝれず、所謂以心傳心の極處にて、皆此の禪の心なるべし。

禪は佛道の總府なりと云ふものまことに故あり。禪を離れて佛道あるべからず。何れの宗派にせよ、理論や批判のみにて眞の安心を得べきにあらず。信仰と云ふも、悟りと云ふも心の種子より働き來る徹底的のものならざるべからず。

直覺的自覺

禪は佛道の總府

曹洞禪の面目

洞山禪師の人を導くや、反覆して其の意を悟らしめんとす。嘗つて一人の僧

寒暑到來如何廻避（寒暑の到來するに當り、如何にして之を避くべきか）

と尋ぬるや

何不向無寒暑處去（寒暑の無き所に去れ）

と教ふ。僧進んで

如何是無寒暑處（寒暑なき所とは如何）

と質せば

寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨（寒き時には此身を寒殺せしめ、熱き時には此身を熱殺せしめよ）

とさとす。寒を寒として厭ふ無く、熱を熱として避くる無く、むしろ進んで此身を寒殺し、此身を熱殺する覺悟ありてはじめて寒暑の境を離るゝを得可し。斯くの如く詢々として說くは曹洞禪の面目なり。若しこれが臨濟の派ならんには最初の一問に對し直ちに一喝を與ふるなるべし。されど臨濟は不深切にして曹洞は深切なりと云ふにあらず。唯その開發の手段を異にすと云ふのみ。父の嚴なるも、母の慈なるも子を思ふ愛は同一なるが同じ。

臨濟にありては悟道工夫の方便として

公　案

を授け、一階二階と漸々に誘導す。公案とは具さには話頭公案と云ふ。悟道上の問題を公衆に開示するを公府の案牘に喩へて云ふなり。公とは聖賢其の轍を一にし、天下其の途の至理を同じうすとなり。案とは聖賢理を爲すの正文を記す、一人の臆見にあらず、百千開士同禀の至理なりてふ意なり。一例を擧ぐれば

如何是汝父母未生以前本來面目

公案に對する工夫の要

と云ふ公案を授けたりとせんに、修道者は正座して妄念を拂ひ、一心に公案を按ず。しかも理論的に推究するにあらず、些かの思議忖度を挾まずして我心と公案と一如し公案我なるか、我れ公案なるかの境に至り朗然として其の面目に逢着す。茲に於て其の悟れる所を師に向つて開陳す。元より言語舉動の能く顯はし得べきにあらねど、しばらく言語を假りて之を述ぶるなり。師亦よく其の機を察す。果して悟れりと思へば之を許し、然らざれば一喝して退け、之を二たびし三度せしむ。要は答辯の言辭の如何にあらずして、徹底せりや否やを彼れの靈臺より我の靈臺に傳はる直覺的感應によりて之を判知するなり。言辭の答案は一の形式のみ、普通の學術的答案とは雲泥の差あるなり。

看話禪　默照禪

曹洞にありては公案を要する事なし。箇の不思量底を思量せよ、不思量底如何か思量せん、非思量。これを座禪の要術となすなり。畢竟吾人凡夫が道の當體に冥契する能はざるは妄想に充たされたる我等の相對有限の思慮分別の枠の中へ道の當體を入れんとすればなり。此の思慮分別を超絶し、直ちに道の當體に迫らんとするには座禪によりて一切の思慮分別を杜絶し非思量の境に達せざるべからず。

公案によるを看話禪と稱し、無公案なるを默照禪と云ふ。何れも道に達する形式のみ。一度道の當體に冥契し、自己本來の面目に立歸る時は、此身さながら佛にして鋤鍬とりて耕すも、十呂盤持ちて商ふも、飲食茶飯の行事まで悉くこれ佛作佛行なり。山高く聳え、川長く流れ、鳥飛んで鳥の如く、馬走りて馬の如く、柳は綠、花は紅に、法の法位に座したるを觀ず。漢來れば漢現じ、胡來れば胡現ず。その間に何等の智解分別を挾まず、善惡の分際を離れ、因果を泯亡し、悟りの悟りたるをも忘れ蕩々たる太古の民の如き境に達するもの禪宗の極致なり。

禪宗の極致

斯の如く禪宗は經論を所依とせずして直ちに吾人本來の佛性を發揮せんとするものなれば煩雜なる佛典發理の研究を必要とせず。門外の人も容易にその道に入るを得べく、而して苟しくも精神修養に志あるものには誰人にもうなづかるゝふしあれば今も昔も智識階級にある人は、佛教の信者たると否とを問はず、一度は其の門を窺ひ見んとするもの甚多し。唐宋の時代に於ける諸學者多くは禪を兼修せり。中にも白樂天、蘇東坡の如き殆んど其の三昧に入れるものあり。

白樂天

鳥窠和尚

一日鳥窠和尚を訪ひ「如何かこれ佛法的々の大意」と尋ねしに和尚は七佛通戒の句なる「諸惡莫作、衆善奉行」と云へるを以て答へたり。佛法に於て幽玄高妙の理を談じながら歸する所は之に過ぎざるか、斯の如きは三歲の童子も能く云ふにあらずやと反問すれば「三歲の童子も能く之を云へど八十の老翁尚行ふ能はず」と答ふ。此の一語いたく白樂天の心肝に銘じ思はず起ちて和尚の足下に禮拜せりと傳ふ。かゝる問答は甚だ平凡にして心肝に銘ずる程の事とも思はれねど、茲に禪門悟道の消息あり。白樂天は平素佛道の眞義を知らんと熱心に研鑽を積みたりけん。かくて悟りの奧の扉の開けんとして未だ開けざる折、和尚のさとしに接し露然開扉せられたるなり。さればこそ豪放の樂天も肝銘のあまり和尚の足下を禮拜したるなれ。馬の耳には念佛讀經も空吹く風と齊しかるべし。求むる所ある人は行人の囁きにも大なる利益を得る事あり。吾等求道に赤心あらばかゝる逸話を等閑に聽流すべきにあらず。

蘇東坡

はじめ佛を排す。一日玉泉の皓禪師の一喝にあひて辟易し、それより禪師の會下に參し禪定工夫して生死の

關門を透徹し、後金山寺の佛印了元禪師に就きて學ぶ。一日廬山に遊び山水の清秀なるに接し、忽然默會する所あり。乃ち一偈を誦す。

溪聲の廣長舌

溪聲、卽是長廣舌、山色豈非清淨身
夜來八萬四千偈、他日如何擧三示人

廬山の煙雨

又曰く

廬山煙雨浙江潮、未到千般恨不消
到得歸來無別事、廬山煙雨浙江潮

是等は何れも人口に膾炙せらるゝもの一讀禪門悟道者の面目躍如たるを覺ゆべし。

碧巖錄を焚く

宏智禪師

公案を集めたるもの多くある中に

碧巖錄と從容錄

圓悟禪師

との二つは古來禪家の雙璧と稱せらる。碧巖錄は宋の圓悟禪師が張無盡居士の請に應じ、碧巖の中に住みて義きに雪竇禪師が集めたる百則の頌古集を評解したるもの、梁の武帝が達磨に問ふの則にはじまり、已陵の吹毛劍に終る。門弟子これを編纂して十卷となす。後禪門の徒多く此書の字句に拘泥して其の肝心を忘るゝに至りしかば圓悟の法弟大慧和尙之を庭前に焚きて爾來二百年、この書を見ざりしと云ふ。元の大德中張燁明遠これを重刊して再び世に出で傳へて今日に至る。圓悟より少しく遲れて宏智禪師百則を選んで頌を作り、萬松老人これが垂示評唱せるもの卽ち從容錄なり。碧巖錄は臨濟宗にてもてはやし、從容錄は曹洞宗にて尊重し春蘭秋菊の美を競ふ。

印度は生産地支那は製造所日本は應用地

本書の目的

支那國民の通有性

第三節　支那佛敎の結論

吾人が支那の佛敎を敍するに當り稍詳細に其の敎理を說きたるもの、支那は佛敎研鑽の本場なりしと思惟したればなり。印度は生産地なり、支那は製造所なり、日本は實に之が應用地たるの觀あり。本書の目的は日本に於ける佛法の因緣と、其の活躍せる面目とを敍し、冷淡に見過ごす現代の人士に幾分の反省を乞はんとするにあり。印度、支那の敍述はこれが準備のみ。佛敎の記事を見るものは敎理の大要を知らざるべからず。しかも諄々しき敎理の說明に力を用ふれば現實に活躍せる面目を髣髴せしむる能はず。吾人が支那に於ける乾燥無味なる敍事的歷史記事をなるべく省略して敎理の說明を試み、日本に至りて歷史的人物の活働を自在にせんとしたるもの微意全く玆に存すればなり。

支那の記事を止むるに當り、彼の地の名士が佛敎に對したる態度を略述せん。

凡そ支那國民の通有性として天道を尊とび、天道に從ひ、無爲にして治まれりと云ふ先王の世を理想とす。彼の治國平天下を論じたる孔孟の敎へと、無爲を標榜せる老莊の敎へと外面甚しく相反するが如きも、其の理想の極致は天命に遵して先王の道に達するにあり。一は差別的國家を認め仁義忠孝等、相對的道德の實踐を敎へて之に達せんとし、一は平等的人類を認め、人爲的階級を破り自然の大道に從ふを敎へて之に達せんとしたるなり。無爲にして化すと云ふ先王の代を理想とせるに至りては二者その志を一にせりと云ふべし。

佛敎の支那に入り來るや、其の源を異にせる外敎なるが故に、先王を外にして夷狄の覺者を尊とぶと思ふが故に、其の敎の非國家的なりと思ふが故に、其の敎典の荒誕無稽を極めたりと思ふが故に、之を排斥した

韓文公

歐陽修

張天成

朱子

るもの多かりしは支那國民性自然の發露と云ふべきなり。されど佛教の教理を會得して破したるにあらず、多くは感情的なりき。所謂食はず嫌ひの人なりき。誰も知る韓文公の癈佛論の如きその一般を代表したるものと云ふ可し。されど眞理のある所は終に覆ふべからず。求道に熱心なるものは心を空しくして研究し、支那在來の思想よりも遙かに高遠なる理想を說けるを見、その敎ふる所決して先王の道に抵觸するものにあらざるを知り、佛道の信者となるもの彬々として輩出するに至る。歐陽修は韓退之に私淑したる排佛者中著名の人なり。しかも韓愈別傳の跋に予瑯琊に官たる時韓愈別傳を以て示すものあり。反覆讀誦して乃ち大顚は是れ常人に非るを知れり。予嘗つて浮屠氏の盛んなるを患ひ退之の說を嘉みす。大顚が言を見るに及んで柳千厚の佛を信ずるの過ちたらざるを知る云々と述べたり。南宋の儒者張天成嘗つて破佛論を書かんとす。其妻傍にありて先づ佛教の要旨を究めて後に破られよと云ふ。張天乃ち佛典を探りて之を閲みし其の所論の深遠にして教への高きに服し、研鑽數年の後、先非を悔いて盛んに興佛論を書きしと云ふ。朱子は有名なる儒道の泰斗なり。その註釋の書中往々排佛の語見ゆ、しかも晩年齋居誦經の詩あり。

端居獨無事、聊披釋氏書、暫息鹿果牽、超然與道俱、
門掩竹林密、禽鳴山雨餘、了此無爲法、身心同晏如、

と、その佛書を繙くに及び彼が非凡の哲學的理想と共鳴を感じたるを見る可し。其他、謝安、王導、陶侃、房玄齡、杜如晦、周茂、司馬光等數多の名士が何れも佛教の理に服したる證跡歷々として存す。されど彼等の多くは飽くまで支那の國民性を維持したり。先王の道を尊とぶに於て人後に落つるものにあらざりき。賢きものは佛教の理をとりて儒教、道教を潤色し、狹きを廣く、淺きを深からしめたるものあり。同時に佛教も亦儒教、道教と接觸し、夫等の影響を受けて印度に於けるものと大いに面目を異にするに至れるは明かなり。一は一種の愛鄉心とも云ふべきものにて心はその理に服しながらも在來の形式を捨てず、其の理の善きを探りて肥料となし從來の幹根を養へりと見るを得べく一は純佛教者として立つも其人既に支那人なれば遺傳的國民性に於て印度人と異なるべきは云ふまでも無く、從つて夫等の人に論究陶冶せられたる佛教の支那的色彩を帶べるに至りたるべきは當然の事と云ふ可し。されど佛教の精神がこれが爲に動かされたりと云ふにあらず、唯その形式、色彩を異にし來れりと云ふのみ。同一の小麥粉も國民性の嗜好によりパンともなれば溫飩ともなる。然かも其の滋養價に至りては同一なり。斯くて支那に陶冶せられたる佛教は朝鮮を經て日本に渡れり。支那の文物を輸入するに勗めたりし當時の日本人に吸收せられ易　調製し置かれたりと思ふ時その因緣の偶然ならざるを感ずるものあり。

佛教の日本に渡來するまでの因緣觀

第三編　日本佛教

第一章　佛教の日本渡來

人皇第二十九代欽明天皇の十三年十月屬濟百濟の明王特使を派して金銅釋迦佛の像一軀に經論を添へて皇上に上る。その上表の文に曰く

百濟王の上表文

佛法は諸法の中に於て最も殊勝なり。解し難く入り難し。周公孔子も尙ほ知らざる所、無量無邊の福德果報を生じ無上菩提を成辨す。譬へば人の隨意の寶を懷き、用ふる所に從つて心の儘なるが如く、此の妙法の寶は祈願心に任せざしき所無し。遠く天竺より三韓に及ぶ。皆敎へのまゝに奉持して尊敬せざる無し。是に由りて百濟王臣明謹んで怒唎斯致を遣はし帝國に傳へ奉り、佛の我が法は東に傳はるとの予言を果さんとす。

司馬達等

これぞ我國に佛敎渡來の濫觴なりける。これより先き繼體天皇の十六年に梁の司馬達等大和に來り草堂を結びて佛像を安置し之を禮拜したりと雖も當時の人その何者たるを知らず、唯目するに異域の神を以てしたるのみ。今や公然堂々として萬人環堵の中に入り來れるなり。

物部氏、蘇我氏の衝突

天皇乃ち群臣に其の採否を謀らせ給ふ。當時の大臣蘇我稻目は外邦の例にならひて之を禮せんと乞ひ、大連物部尾輿をはじめ多くは之に反對せり。天皇は各自の自由意志に任せ給ひ佛像、經論を稻目に賜はる。稻目悅びて向原なる已れの家を寺となし之を安置して冥福を祈れり。然るに間もなく天下疫病流行したりしか

ば尾輿等を以て國神の譴となし、奏して伽藍を燒き佛像を難波の堀江に投じて其の蹤を斷たんとせり。稻目死して馬子後をつぎ尾輿逝きて守屋後を襲ふ。何れも父の遺志を守り、馬子大野丘の塔を建つれば守屋之を燒きて佛像を再び堀江に捨てたり。兩氏の爭ひ愈はげしきを加へぬ。以上は佛教渡來の當初に於ける國史に傳はる梗概なり。

我國古來の宗教觀念

蓋し想ふに兩者は當時に於ける執政の重鎭なり。物部氏は建國の功臣可美眞手命の孫、蘇我氏は六世の天皇に殊勳を建てたる武內宿禰の子孫なり。互に自家の勢力を張らんと勗め居たれば感情の衝突もありつらん。政治的權勢の爭ひも勿論加はり居りしならん。されど宗教的情操のその根底をなせるを等閑に見過ごすべきにあらず。我國古來の宗教的觀念は今より審かに知る能はざれども國史に傳はる所を透して考ふるに何等の深き哲學的根據を有したりとも思はれず。天神地祇は我等の國土の守りなり。我等はその子孫にして皇室に其の宗家におはし、死したる吾人の祖先代々の靈は常に國家の守りとなり、吾人の幸福を助くるものと信じ居たるのみ。其間には何等の疑問もなく、神は何れも人格的神にして吾人に善惡美醜の別ある如く、神も亦然りとなし、淨き神は高天原におはし、汚れあるものは夜見の國に到るとなす。高天原は何れなりや、夜見國は何れなりや、その所在を云々するは後世の事にして當時は夫等の穿鑿をなしたりとも思はれず。唯神のおはするは高天原なり、汚れあるものゝ行くは夜見の國なりと信じて疑はざりしものゝ如し。要するに國土を中心とし、神々は之を守り居るものと信じたるに過ぎず。宗教的情操の自然の發露のまゝにして極めて幼稚なれども其の信念は極めて強かりしものゝ如し。但し一貫せる理想の下になれるものにあらざれば今日より之を吟味すれば矛盾せるもの數多あり。祖先を神として崇拜する一面には死を不淨のものとして忌み嫌ふこと甚しく、神に通力ありと信じたる一方には死者の心を慰安するため從者の一部を殉死せしむる風習あり。死者は神に歸すべくして然かも其の間に橫たはれる大なる橫渠は如何にして除かるべきか。後世人智の發達は巧みに是等の解釋を與へたりと雖もそは後世の思辯のみ。當時はその矛盾の間に所して怪しまざりき。斯の如き理智の判斷をはなれたる信念は反りて强烈なるものなり。我國は神國なり、我等は神の裔孫なりてふ單純なる信仰は上代の人心を支配したるものにして又實に古今を通貫する我國民性なり。佛教の渡來するや、其の教義の上より贊否を表したるにあらず。物部氏一派の排佛の理由は簡單なり。佛陀と稱する外國の神を祭らば我國神の怒りに觸れんと云ふのみ。我等には我等の神あり、蕃神を祈るは道にあらずと云ふのみ。これ實に我國民俗の代表的意見と見るべきものなり。簡單なれども力あり、又熱烈なりき。蘇我氏が贊佛の理由亦簡單なりき。佛陀の祈願に對する利益の大なるを聞き、先進國の例にならひ福祉を祈らんと云ふのみ。其の經論の如きは僧尼をして佛前に祈らしむる呪語の如き觀をなしたりき。當時物部氏の勢、蘇我氏を凌ぎしもの我國民性自然の發露に從ひたればなるべし。蘇我氏の位置にありて辛くも佛教の命脈を保つに過ぎざりしもの故なきにあらず。此の際若し厩戸皇子の如き高德の生れて之が興隆を計らるゝなくんば種子は棚に載せられたるまゝにてさて止みけん。されど佛教は我國民の自覺を起さしむる一大因緣を有するものなりき。佛意計るべからずと雖も事實は着々として歷史の上に證明せり。佛教は實に我國民性に融合して其の完全なる發達を遂げしむるもの、決して我國民性に乖離するものにあらざりき。

我國民性通有

物部氏排佛の理由

蘇我氏贊佛の理由

第二章　聖德太子

第一節　太子の生誕と佛教の興隆

釋尊と聖德太子

釋尊は印度迦毘羅國の太子とあれまして十方法界を照らす道の光りとならせ給ひ、聖德太子は皇朝の太子とあれまして自然に備はれる靈國に自覺の因緣を與へさせ給ふ。太子は實に第三十一代用明天皇の皇子として敏達天皇卽位の第三年に生れ給へり。佛教の渡來より僅かに二十三年目に當る。御母は間人后、金色の沙門忽然として胎内に入ると夢みて胎らせ給へりと傳ふ。母后一日逍遙して厩の前に到らせ給へる時少しの御惱みも無く生れさせ給へればとて厩戸皇子と名づけまつる。三歲にして東方に向ひ南無佛と唱へて再拜し給ひしに生來未だ開き給はざりし右の御手はじめて開き一粒の佛舍利掌心より出でたり、其の大いさ菽粒の如し。法隆寺の什寶となりて今に傳はると云ふ。五歲にして文筆の書法を學ばれしに筆法自然に備はり、博士等諸種の經典を敎へまつれば唯一回にして諳んじ其の義理にまで通じさせ給へり。十歲の時戲れに十人の訴訟省を設けロを齊しうして各自の思へる種々なる難問を發せしめ一々之が答をなし給ふに寸毫の誤りも無かりしかば人々唯驚嘆し奉るのみ、何時とはなしに豐聰耳尊と稱へまつるに至る。其他古書に傳はる瑞祥談一々書き盡すべくもあらず。是等は今日の理智より判して一々信ずべき限りにあらざれど、火の無き所に煙りは立たずと云ふ如く、太子の聖德常倫を絕し種々なる奇蹟的事實さへ伴ひて佛陀の權化なりと人々衷心より信じ仰ぎたりしは覆ふべからざる所なり。太子は此の絕倫の智慧德望をもたれて熱心なる佛教の信者となられたれば、僅かに餘燼を存したる佛教は燦然として活動し初めたり。用明天皇のいたづかせ給ふに當りては僧侶を内裏に召して御腦平癒を佛に祈らしむるに至る。物部氏等の怒りや如何なりけん。佛教の盛んなるにつれて蘇我氏の勢は增し來れり。兩者終に勝敗を干戈に訴ふるに至る。太子時に御歲十六歲、佛教興隆の目的に對しては蘇我氏を助けて物部氏を討たざるべからず。德望一世に高き太子を向うに廻はしては物部氏も終に勝算なし。榎木の枝より射落されて萬年に佛敵の名を止む。物部氏の滅亡と共に廢佛の思想は頓挫せり。太子の聰明にして佛道に歸依するの厚きを見たる國民は崇佛の擧の決して國神の意に違ふものに非るを知り朝野を擧げて佛道歸依の念をおこしたり。太子は物部氏追討の折たてたる誓願を果すため攝津の國に四天王寺を建て、馬子は飛鳥に元興寺をおこしたり。斯くて太子の在世中に建てたる寺院は四十六、度したる僧尼は一千三百八十五人に及べり。僧尼を管理するため僧正、僧都の僧官をも設けたり。最初の僧正は百濟より歸化せる僧觀勒、僧都となれるは鞍部の德積なりき。

太子の聰明

物部氏滅亡

我國寺院の初め

最初の僧官、僧正、僧都

第二節　太子の佛教に對する見識

蘇我氏が佛教に歸依せりと稱するも素より佛教の眞義を解したるものにあらず、唯是れに對して一身の幸福を祈りたるのみ。佛教の眞諦に觸れて之に歸依せられしは唯太子に於て之を見る。太子は徒らに佛に侯して一身の安穩のみを計られしものにあらず、佛意を御身に帶し其の大理想を國家の上に實顯し、完全なる佛國土を建設せんとし給へるなり。斯くの如きは印度にもあらず、支那にもあらず、實に我日本に於ける最初の佛教宣傳者におはする聖德太子に於て之を見る。印度の阿育王、迦膩色王をはじめ支那唐宗の諸皇帝にや

佛國土の建設

三經の標榜　法華經　勝曼經　維摩經

や之に類するものありしが如きも、彼にありては唯佛德を讃し、佛事供養に專らなりし傾きあり。太子にありても勿論佛德を讃し、之に祈りて國家の幸福を求められたりと雖も、徒らに讃佛祈念のみを以て能事とせられず、制度文物より人情風俗等凡て佛陀の精神に適ふべく、彼の大乘經典に顯はれたる理想談を活釋して實際の上に顯はし萬代不易の寂光國土を造らんとし給へるなり。太子は先づ數多の諸經典中法華經を以て其の中心と定め、勝曼經と維摩經とを以てその左右に配したり。法華經のことは既に屢々之を述べたり。勝曼經は波斯匿王の王女勝曼夫人が父母の勸めによつて佛道に歸依し大乘の妙典をさとり大願を起して說かれたるものにして佛陀の眞意に叶ひ未來の成佛を證明せられたるものなり。維摩經は在俗理想の大德維摩居士が病氣と稱して佛陀の高足理想の菩薩文殊の見舞を受け、佛敎根本の原理を問答したるものなり。勝曼經は時の女帝推古天皇に勸めまつり、維摩經は在俗佛敎の護持者たる維摩を以て太子自ら任じさせ給へるものなりとは古來識者の論ずる所なれども吾人は更に廣く法華經を來て國家を統一し、維摩經を以て男性のために、勝曼經を以て女性のために配せられたるものと思惟するものなり。而して太子の如何に是等諸經典の祕奧に通達せられしかは、諸人のために親しく諸經典を講じさせ給ひ、就中上の三經の義疏を作られて萬世に敎へを遺されたるを拜讀しても知るを得可し。勝曼經の義疏の如きは支那に渡りて珍重せられ、天台中興の祖なる荆溪太師の弟子明空法師が更に註釋を加へたるものを後年慈覺太師入唐の折生寫して持歸れりと云ふ。卽ち今日に傳はれる勝曼義疏合註と稱するものなり。

三經の義疏

太子一日その師とたのまれし高麗の沙門惠慈に向はせ給ひ法華經に落字のあるを告げさせ給ふ。惠慈は誰人の所持本も皆斯くの如くなれば別に落字にては候ふまじと答ふ。太子は再び我が昔時の所持本には確かに此の下に文字ありけりと宣ふ。惠慈その意を得ず、昔時の御所持の本とは如何にと尋ねまつるや太子ほゝゑませ給ひ、我が南嶽に居りし時の本の事なり。こは我が弟子なりし念然の誤り寫せるものぞかし、我れ禪定に入りて正しきものを取り寄せ見せまし。と、それより夢殿に入らせ給ひ三昧に入ること七日七夜、終に其の通力によりて落字無きものを取り寄せ示されたりと云ふ。

法華經の落字

般若台に收め置きてし法華經も
夢殿よりぞ現にはこし

とは此の事蹟を慈鎭和尙の詠めるなり。事實の有無は暫く措き、太子の佛眼紙背に徹したりてふ傳說的逸話と見るも、その識見の超邁せられしを伺ふべし。太子を南嶽太師(天台太師の師)の再來なりと云ふは此の逸話に胚胎せしなり。

南嶽太子の再來

第三節　太子、佛敎活顯の治績

釋尊は大法宣言の勞頭に於て四姓種無し、佛道に入るものは悉く平等なり。百川其の流れを異にするも一度海に入る時は悉くこれ大海の水なり、と宣ひ道に入るの淺深を以て次第を定め、出生の族の尊卑を論じさせ給はず當時最も嚴しかりし印度の氏族制度を法の上にて破らせ給へり。佛陀の精神をさながら體得し給へる聖德太子は、因襲久しき我國上代の氏族制度を國政の上より破り、萬民をして悉く平等なる佛光に浴せしめんと思したゝれたり。

氏族制度の打破

氏は和名うぢにして產筋の略語なり。卽ち血統又は家柄を表はす言葉にして服部氏は機織を職業とする家

冠位の制と其の精神

柄、鏡造氏　鏡を造る家柄、中臣氏、齋部氏は祭祀を司どる家柄、大伴氏、物部氏は武を統ぶる家柄と云ふが如し。姓は和名かばねにして株根と云ふ語より轉化せしならんと云ふ。こは其の階級の尊卑を表はすものにて臣、連、首など云ふが是なり。臣は王族より出でたるもの、連は神族、卽ち功勞ある貴族の子孫の稱にして何れも最高位の姓なり。是等多くの臣、連を統率して直接政務に當るものを大臣、大連と云ふ。斯くの如き制度の下にありては生れながらにして職業一定し、階級自然に定まりあるに、武家は武人とならざるべからず。智識技能の他に秀づる者あるも之を用ふるに道無く、愚かなるも階級高き家に生れたるものは人を率ゐる任に當り、賢こきも賤民として生れたるものは奴隷となりて生涯を送らざるべからず。今より之を觀れば不當の制度なりし事云ふまでもなけれど當時にありては當然の事として怪しむ者だにあらざりしなり。第三十三代推古天皇の御代を知ろしめすに當り聖德太子御齡廿九歲にして皇太子に立たせ給ひ、兼ねて萬機を攝政し給ふや先づ革政の第一歩として其の攝政の十一年十二月初めて冠位の制を定められたり。德、仁、禮、信、義、智の六つの德目に大小の二字を附して十二階とせり。位に應じて服色をも定め給ふ。新しきを設くるは古きに替ふる心なり。形式なる生種を尊とぶ氏族制度を改めて其の人の功績により位階を配して次第するは、道に入るの淺深を以て次第を定めし佛陀の心を學ばれしなり。而して德を以て最高位となし仁禮信義智と次第し給へるもの實に太子の御心を忖度しまつるに難からざるものあり。德は一切善行を包羅せる名稱なり。仁は衆生愛撫の慈悲心なり。德の次ぎに仁を配したるものまことに故あり。玆に所謂智とは佛智見を開くべき無漏智を指せるにあらずして才智と熟する有漏智の謂ひなるべきは勿論なるべし。才の德にまされるは小人なり、德の才に勝れるは君子なりてふ先哲の敎へもあり。智を以て最下位に置かれたるも尊とき敎へを示されたるものと拜するを得可し。平等の中に差別存し、各々その位を保ちて亂れざらしむるものは禮なり。禮は德の表顯なり。漢の高祖が禮を治めて初めて皇帝の貴ときを知ると云はれし如く、朝制を調ふるに於て禮の如何に必要なるかは云ふまでも無かるべし。信を義の上に置きたるもの、其の憲法の中に於て信は義の本なりと釋せられたるに照らして知るを得べきなり。斯くの如く觀察し來るとき太子が甚深の尊慮を窺ひ見るべきなり。

十七條の憲法

太子は玆に氏族制度を破るべき形式を定められたれど其の初めに於ては從來の高き位置に居たるもの自然の順序として高き位階に補せられ漸を追ひて其の改善を計られたり。歸化人の末なる鞍作鳥に大仁の位を賜はれるが如きは氏族制度を破れる最初の記錄として傳はる。

冠位を定められたる翌年、十七條の憲法を作らせ給ふ。これぞ太子が法國一如の精神を流露したる萬世不磨の聖訓と思ふまゝ繁を厭はず全文を擧げて些か感想を述べんと欲す。

一に曰く、和を以て貴としとなし忤ふ無きを宗と無す。人皆黨有り、亦達者少なし。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。上和し下睦びて事を論ずるに諧へば則ち事理自ら通ず、何事か成らざらん。

二に曰く、篤く三寶を敬せよ。三寶は則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何れの世、何れの人か此の法を貴ばざる。人尤惡のもの鮮なし、能く敎ふるを以て從ふ。それ三寶に歸せざれば何を以てか枉れるを直さん。

三に曰く、詔を承はれば必らず謹め。君は則ち天、臣は則ち地なり。天は覆ひ地は載せ四時順行せば萬氣通ずるを得。地、天を覆はんと欲せば卽ち壞を致さんのみ。是を以て君言へば臣承はり、上行へば下靡

く。故に詔を承はれば必らず愼しめ、謹しまずんば自ら敗れん。

四に曰く、群卿百寮禮を以て本となせ。其の民を治むるの本は要禮にあり。上禮ならざれば下齊はず、下禮無ければ必ず罪あり。是を以て君臣禮あれば位次亂れず、百姓禮あれば國家自ら治まる。

五に曰く、餐を絕ち欲を棄て明かに訴訟を辨ぜよ。其れ百姓の訴へは一日に千萬あり。一日すら尙ほ爾り、況んや歲を累ぬるをや。須らく訟を治すべきもの利を得るを常となし、暫を見て讎を聽かば便ち財有るものゝ訟は石を水に投ずるが如く、乏しきものゝ訴は水を石に投ずるに似たり。是を以て貧民卽ち由る所を知らず、臣道も亦焉に闕けぬ。

六に曰く、惡を懲らし善を勸むるは古への良典なり。是を以て人の善を匿さず、惡を觀ては必らず匡せ。それ諂ひ欺くものは則ち國家を覆へすの利器なり。人民を絕つの鋒劍たり。亦佞媚なるものは上に對ひては則ち好みて下の過を說き、下に逢ひては則ち上の失を誹謗す。それ此の如きの人は皆君に忠无く、民に仁無し。是れ大亂の本なり。

七に曰く、人各任あり、掌ること宜しく濫れざるべし。それ賢哲官に任ずる時は頌音則ち起る、奸者官を有せば禍亂則ち繁し。世に生れながら知る事少なし、刻く念ひて聖となる。事大小と無く人を得て必らず治まり、時急緩と無く賢に遇ひて自ら寬なり。此に因りて國家永久にして社稷危き無し。故に古聖王、官の爲めに以て人を求め、人の爲めに官を求めず。

八に曰く、群卿百僚早く朝し晏く退け。公事監靡し、終日盡きず。是を以て遲く朝する時は急に逮ばず、早く退く時は必らず事盡きず。

九に曰く、信は是義の本なり。事毎に信有れ。それ善惡成敗、要は信にあり。君臣共に信あらば何事か成らざらん、君臣信無くんば萬事悉く敗る。

十に曰く、忿を絕ち瞋を棄て人の違ふを怒らざれ。人皆心あり。心各執る所あり。彼是とすれば則ち我は非とし、我是とすれば則ち彼は非とす。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是非の理、誰か能く定むべき。相共に賢愚なること環の端無きが如し。是を以て彼の人は瞋ると雖も還りて我が失を恐れ、我獨り得たりと雖も衆に從ひて同じく舉へ。

十一に曰く、功過を明察し、賞罰必らず當てよ。日者、賞は功にあらず、罰は罪にあらず、事を執るの群卿宜しく賞罰を明かにすべし。

十二に曰く、國司、國造百姓に斂することなかれ。國に二君靡く、民に兩主無し。率土の兆民王を以て主となす、所任の官司は皆是れ王臣なり。何ぞ敢て公と與に百姓に賦斂せんや。

十三に曰く、諸任官者は同じく職掌を知れ、或は病み、或は使し、事を闕くことあらん。然れども知ることを得るの日和ふこと曾て識れるが如くせよ。それ與に聞くことなしと云ふを以て公務を妨ぐることなかれ。

十四に曰く、群臣百僚嫉妬あること勿れ。我既に人を嫉めば人も亦我を嫉む。嫉妬の患はその極を知らず。所以に智己れに勝れるは則ち悅ばず、才己れに優れるは則ち嫉妬す。是を以て五百歲の後乃ち賢に遇はしむ、千載にして一聖を待つこと難し。それ賢聖を待たざれば何を以てか國を治めん。

十五に曰く、私に背きて公に向ふは是れ臣の道なり。凡そ人に私あれば必らず恨あり、憾あれば必らず同

憲法の精神

ぜず、同ぜざれば即ち私を以て公を妨ぐ。憾み起るときは則ち制に違ひ法を害ふ。故に初章に云はく、上下和諧せよと其れ亦是の情か。

十六に曰く、民を使ふに時を以てするは古への良典なり。故に冬月間あらば以て民を使ふ可し。春より秋に至りては農桑の節なり、民を使ふべからず。それ農せずんば何を食はん、桑せずんば何をか服せん。

十七に曰く、大事は獨斷すべからず、必らず衆と共に宜しく論ず可し。小事は是れ輕し、必ずしも衆とすべからず。唯大事を論ずるに逮びては若し失有らんことを疑ふ、故に衆と共に相辨ぜば則ち辭理を得ん。

和を以て貴しとなすと仰せられたる第一條は實に全體を總括するものと申すべし。凡そ治國の要道の和を以て第一とすべきことは古今を通じ萬國に渉りて戻らぬ事なり。國を舉げて上和し下睦し春風駘蕩の域に達しなば又何をか加へん。之卽ち佛國土なり。而して玆に至るは至德の發揮に待たざるべからず、至德は佛性より生ず、佛性の開發は三寶に歸するによりておこる。三寶を佛法僧の三つなりと云ふより排佛思想家は之を以て佛に佞するものと誹る、甚だ謂れなし。古來人情の通弊として已れの好める所に偏して他を仇敵の如くに嫌惡す。智者學匠と雖も此の弊を免るゝもの鮮なし。儒者は聖人を理想としながら、神道家は神ながらの淸き道を說きながら、佛道者は我執を離れよと論じながら、何れも我道獨り尊としとの我見に執らはれ、自ら其の道を狹くし、人をして一種嫌厭の情を起さしむるは古今同一の弊風にして歎かはしき事と云ふ可し。さればこそ太子の憲法にも人皆黨あり、亦達者少なしと云はれたるなれ。好める道によりて黨を作るは決して惡しきにあらず、眞に達者の黨ならば自らの黨を愛すると共に他の黨をも敬すべきなり。斯くの如くにして君子の黨あり。されど世に達者少なし、已れの黨に私して他の黨を排斥する所謂小人の黨天下に跋扈す。

これ和の德を讃し三寶に歸せしめて道を敎へ、枉れるを正さんとし給へる所以なり。宇宙の眞理を體得し完全圓滿究竟の道を人にさとし給へるは佛なり。其の修行の道の法爾として備はれるは法なり。佛の敎へを受けつぎて法を說くは僧なり。此の三つのもの一に卽して佛道となる。我見を去り、佛道に歸依することにより始めて凡ての善德おこり來るべし。世に尤惡のもの鮮し、概ね敎へて以て善導すべし。眞道顯はれて枉れるを正さんとは第二條の心なり。第三條に於て差別の當相自ら次第あり、次第を誤れば亂階玆に生ずと示され君臣の大義嚴として犯すべからざるを敎へ給ふ。差別の當相のまゝ平等に卽すと云ふ大乘佛敎の精神玆にあり。世間往々佛敎の平等觀を誤り解するものあり。太子の其の意を活釋せられて法を示されたるもの尊とし

民を治むるに公平無私なるべきを諭され我欲を離るゝにより玆に至るべしとの意を示し、第六條に於て佞媚の者の國を賊する所以を說きて必ず之を匡すべしと敎へ、第七條に於て官に任ずる必らず賢者を用ふべし、而して官のために人を求むべく、人のために官を求むべからざる旨を諭し、第八條に於て官にあるもの孜々として其の職に殉すべしと敎へ、第九條に於て君臣の義も信に源するを說き第十條に於て自らを知る明智を養ひ忿瞋の心を離れて衆と共に事に從ふべきを敎へ、第十一條に於て賞罰を明かにせよと諭され、第十二條に於て國に二君なく民に兩主無しと斷じられ歸向の中心は唯一なるを敎へ國司任官の者の百姓を私するを戒しめ給ふ。氏族制度の弊を匡さんとし給へる御精神玆に至りて最も鮮明なるを覺ゆ。第十三條に於て官にあり事に從ふもの事故ありて廟議に列せざることありとも既に議定せられたる事は之を尊重し、已れの職責に關する事は議定の精神に適ふ如く行へと諭して私心を離るべきを敎へ、第十四條に於て官にあるもの皆嫉妬

の心を去り賢者をして其の才を盡さしめよと諭し第十五條に於て私心を捨てゝ公に奉ぜよと敎へ再び上下和諧の初章を繰返させ給ふ。第十六條に於て民を使ふの道を敎へ數句の間に民を思ふの至情を盡させ給ひ、第十七條に於て大事を斷ずる必らず衆とはかり過なきを期せよと敎へて議會制度のはじめを開かせ給ふ。

十七條憲法の眼目

十七ヶ條の條章は悉くこれ國を思ひ民を愍れむ太子が至情の顯れならざるは無し。更に仔細に之を觀るとき、日本佛敎の開山におはする太子の御示しとしては驚くばかり所謂佛敎の臭味を脫せられたるを發見すべし。其の第二條と第十條とを除くの外何れにか佛敎專有の言葉を用ひられたる。然も大乘佛敎の精神躍如として言外に溢るゝもの是ぞまことの大乘佛敎の活釋と申すべき。太子は佛敎の信者におはしながら詢々として儒教的道德を述べられたるを見、佛道の敎のみにては國家をなさゞるゆゑ儒佛の二敎を折衷せられたるなりと論ずるものあり。甚しきに至りては儒敎の道德說を剽竊せられたりと酷評するものすらあり。是等は未だ佛敎の眞相を知らざるものゝ皮相的觀察のみ。そも〳〵佛敎は宇宙を包括する眞理の敎へなれば廣めて論ずれば大哲學となり、卷きて修むれば實踐躬行の道德となる。釋尊は生死の問題に沒頭したる當時の印度人を救濟するために專ら出世間的なる解脫の要道を說かれたり。而してこれ實に人生究竟の問題、宗敎の生命なり。しかも一面に於て人類社會に順應すべき世間的敎へを示されたり。唯宗敎的生命たる出世間的方面の色彩著しきため世間的方面の敎へが比較的、門外の人に等閑視せらるゝ傾きあり。聖德太子は族長漫こり、禮儀亂れ、奸臣事務を私し、良民苦しめらるゝ國の現狀を救濟せんとして特に世間的の敎へを布演せられたるなり。但し世間的なる俗諦は出世間的なる眞諦に卽すべきが大乘佛敎の極致なれば俗諦なる道德的方面を敎へらるゝと共に之を三寶に歸納せしめ一切の道德的行動は佛心の顯現となす處に眼目の點睛あるを忘るべ

出世間的敎へと世間的敎へ

からず。道德的名稱熟字の如き儒敎のそれを採用せられたるは勿論なるべし。千字文、論語、孟子、書經、詩經、さては老莊の中よりも適當なりと思されたるは名稱のみならず、其の意もとりて顧慮せられざりしは怪しむに足らず。佛敎は決して彼と是と對立するが如き門戶狹小の敎へにあらざるなり。

國神に對する太子の態度

太子攝政の十五年、詔によりて神祇を祭るに忘り　るべからざる旨を布告せられ、同時に太子は大臣百僚を率ゐて神祇を祭拜し給へり。佛道より見たる我國神觀の如何なりしやは本地垂跡說の條に讓り、茲には唯本邦佛敎の開祖　る聖德太子の、國神に對し敬虔の至情を致されし事實の儘を擧げ置く可し。

遣隋使

太子は更に內政革新に資するため外國文明を輸入せんと思し立たれ大禮小野妹子を隋國に派遣し給へり。時に隋には豪迹を以て後世に鳴れる煬帝、位にあり。四隣を見ること臣妾の如し。太子の國書に、日出處の天子、書を日沒所の天子に致す、恙無しや云々とあるを見て煬帝悅ばず、鴻臚卿に謂つて曰く、蠻夷の書の禮無きものは復た以聞する勿れと、明年文林郎裴世淸を遣はし倭國に使す、とは彼の隋書列傳に記載せる處なり。思ふに獨立の君主互に應答せらるゝに對等の禮を用ふべきは勿論の事にして怪しむべきにあらざれど當時支那は其の文明の程度に於て、其の領土の大なるに於て、其の兵の强きに於て、世界の中心を以て許されたるものなり。聰明なる太子にして、支那の事情に通じたる韓國の頑德を有し給へる太子にしてかゝる事實を知らしめさぬ事あるべからず。況んや先進國として敬意を拂ひ其の文明を輸入せんとして十分の禮を盡させ給へるものと推察すべき理由あるに於てをや。しかも其の名分を正させ給へるに於ては一歩も假借せらるゝ事なく堂々として日出所の天子書を日沒所の天子に致すと遊ばさる、正大の意氣、これ實に我國民性の代表的發露と見るべきものなれど又しかしながら徹底せる佛敎の信念より起れる自覺の燈きとも拜察せざる

正大の意氣

を得ざるなり。煬帝が一面其の國書に不滿を懷きながらも翌年妹子等を送りて斐世清を我に派したるもの、太子の意氣と使臣の態度とが彼を服せしめたるもの無くんばあらざるべし。太子は再び妹子等をして斐世清を送り歸さしめ高向玄理、僧旻、南淵請安等の人々を從はしめて彼の地の制度文物を學ばしむ。これ留學生のはじめなり。是等留學生は何れも太子の內意を受け各自その目的に向つて研學せり。高向は主として彼の制度を調査し、僧旻は佛典の研鑽に從事し、南淵は儒教に關して取調べ、任滿ちて歸朝するや其の蘊蓄を傾けて國家のために寄與したり。他日是等の人々によりて大成したる大化の新政は實に太子の理想の實顯せるものと云ふべきなり。

留學生に囑したる太子の用意

大化の新政と太子の理想

第四節　佛教興隆と美術工藝

宗教と美術

我國に於ける建築、彫刻、繪畫、音樂等の美術工藝は佛教の興隆に伴ひて大革新を來したり。蓋し思ふに宗教は心界最高の理想にして、美術工藝は理想の一部の色界表顯なり。智の方面より宇宙に遍滿せりと見る大智惠、大慈悲心も之を情の方面に移すときは智悲圓滿の德相を備へたる大人格佛となりて顯はるべし。一切の罪汚より超脫せる悅び樂しみに滿たされたる理想の境は、七寶をもて裝られ、迦陵頻迦の鳥鳴きて天人舞樂を奏する寂光の都となりて映るべし。其の面影の髣髴を求むる時、佛像となり佛畫となり、淨土の繪となり、さては莊嚴なる寺塔、微妙なる音樂となりて顯出せらるゝなり。覺れる人の理想が繪畫、彫刻、寺塔、音樂となりて表顯せらるゝ時、凡俗の人は是等對象を直觀して宗教的觀念、美的觀念の構成を促し漸次覺者の理想に逢着するに至るべし。高山樗牛嘗つて此間の消息を漏らして曰く、九憂の穢土にさすらひて三界の苦惱を濟ひ、圓滿無邊の大慈悲を以て普ねく一切衆生を度せんとするの妙相高容を仰げば言絕ち語斷じて恍惚の間一脈の靈氣相通ずるありて茫然悲想の中に萬法一歸の妙悟に徹底す。是の如きは宗教美術の吾等に與ふる感情にあらずや、と。吾人暫く此の語を借りて佛教の興隆に伴ひ美術工藝の發達せるもの偶然にあらざるを說かんと欲す。宗教は心界を美化し、美術は感覺界を靈化し、兩々相助けて人類社會は向上し行くものなり。已に美術は心界理想の發現なり、從つて低級なる理想の下には美術も凡俗なるべく、理想高遠にしてはじめて妙技神に入るものあるべし。古來美術の精妙を稱するもの多くは宗教の盛時にあり。而して其の技の入神を稱せらるゝ人の概ね宗教的信念の熾烈なりし事實は理の當に然るべき事と云ふ可し。

我國工藝の大飛躍

聖德太子の寺院建築は實に我國工藝の大飛躍なりき。吾人は是等に關する智識なきゆゑ嘗つて南葵文庫に於て講演せられたる斯道の專門家伊東工學博士の法隆寺に關する感想を略記せんに

法隆寺

我國にて最も由緖尊とく又美術工藝上優秀なる建築は法隆寺なり。聖德太子が我國に初めて建立せられし佛寺は攝津の四天王寺なれど、こは一面政治的意味も加はり居る事にて眞に學問研究の道場として建立せられしは法隆寺なり。太子は一部の史家の云ふ如く佛に侵したるものにあらず、佛教によりて日本國民の思想を導き文教を授け藝術を向上させんと思されたるなりき。されば法隆寺建物の配置も總て學術的なり。その中心建物は本尊安置の金堂と佛舍利を安置する五重塔とにて之に廻廊を續らし中門を加へたり。是等は推古朝より千三百年來舊觀を保ち門廊堂塔の配置頗るよく調和し、單に一個づつとしても活躍しえも云へざる美觀なり。是れ當時の工匠の手腕の進み居たりしのみならず、監督御指揮あらせられたる太子の非凡なる才能と御氣分とが建築物個々の上に流露したるものにして何等の型にも囚はれざりしに依れるな

り。他の建物との比例に重きを置きて柱の何れに行くも意とせず、上狹く下廣やかになしたるゆゑ非常に高尙にして上は如何にも輕く据れり　德川時代になれる比叡山根本中堂、芝增上寺の門は何れも上大にして下を壓したる型ゆゑ高尙優美の點を缺けり。法隆寺は內部の調和も亦些かの缺點なく、建築樣式は百濟のを日本化したるものなるが全く六朝風の藝術にして其の根底は印度より來り、遠く希臘、アッシリヤの藝術も含まれて東洋西洋の藝術の接觸をも知る事を得、實に世界的の一大國寶にして、これが今日まで保存せられしは天下の奇蹟なり。これ大和地方の氣候乾燥せる故と、全部檜の上木なりしと、太子の住まはれし地へ親から建立せられしに對する民衆の尊敬とによれるなるべし。云々。

以て其の精妙の程を察するに足るべし。後世太子を以て工藝の神と仰ぐもの亦故あるかな。推古式佛像、佛畫の鼻祖と稱せらるゝ人に鞍作多須那及び同鳥佛師あり。多須那は司馬達等の子にして用明天皇大漸に及ばせ給ふや、奏して天皇のために出家し、丈六の佛像及び寺院を作らんと乞ひまつりしに天皇聞召し悲慟し給へりと傳ふ。鳥佛師は多須奈の子なり。佛畫、佛像を作りて古今獨步の稱あり。推古天皇の十四年に勅を賜はる。「朕內典を興隆せんと欲し、佛刹を建てんとするに當り汝が祖父達等、舍利を獲て以て獻ず。又汝が父多須奈、先帝の爲めに出家し、汝が姨島女始めて尼となり、釋敎を修行す。今又汝朕が命を奉じて丈六の佛像を造る、朕之を嘉す。」と乃ち大仁位を鳥に授け近江坂田郡の水田二十町を賜はりぬ。鳥直ちに此の田を施入して天皇の御ため金剛寺を建つ、南淵坂田の尼寺と云ふもの是なり。刺繡も此の御代に發達せり。聖德太子の薨後、推古天皇が王妃の奏請によりて作らしめたる天壽國曼陀羅の圖二張の殘闕は今猶法隆寺中宮尼寺に修めあり。彩色並びに紙墨の製法亦この御代に高麗僧曇徵によりて傳へられたり。

鞍作多須那

天壽國曼陀羅

鳥佛師

曇徵

かくて燦然たる文化は精神界にも、物質界にも太子が佛心の顯現につれて我國史の上を飾れるを見るべし。

第五節　太子の大悲心

太子の大悲心は天性にておはしたるなり。佛道に歸依して始めて發し給へりと云はんよりは、佛陀の大悲心が假りに太子の御身となり、大乘佛敎の本義を我國土に敷かせ給はん方便に生れませりと思惟するの當れるを覺ゆるなり。太子生涯の御行動は凡て大悲の發露なりき。玆に二三の重なる事柄を擧げて其の萬一を偲びまつらん。

大悲の發露

太子の孝心

太子御年十六歲の時聖父用明天皇病ませ給ふや、太子は衣帶を解かせ給はず日夜御傍に侍して御看護に餘念無く、父君一飯すれば御身も一飯し、父君再飯すれば御身も再飯し、香爐を擎り、祈請を籠めらるゝ其の赤誠には侍臣感激せざるもの無かりしと云ふ。攝政とならせ給ふに及び療病院、施藥院を作りて病者を救はせ給ひ、敬田院を作りて三寶に奉仕する心を知らしめ給ひ、悲田院を作りて鰥寡孤獨の貧民を救はせ給へり。

三福田

敬田、非田と稱するは佛敎の所謂福田に因めるなり。福田とは福善を生ずる事、田地の穀物を生ずるが如しとの義にて信者の福因を植うるに譬へたるなり。之に敬田、恩田、悲田の三つあり。佛法を敬ふ一切の所作は敬田なり。父母師長の恩惠に報ずるは恩田なり。衆生を憐れむ一切の行動は悲田なり。

蒐田野の御狩

推古天皇一日蒐田野に於て狩の御催しあり。太子も從ひてそを觀はす。數多の勢子、軍兵、弓箭刀杖を携へ雄叫びなして野山を狩りたつれば矢を免れたる雉子は鷹に搏たれ、刀を洩れたる兎は犬に咬まれ、廣き天地に匿るゝ場所無く、狂ひ叫び鳴き亂るゝ有情の有樣を如何に哀れと思しけん、太子は恭しく鳳輦の前に跪

まづき、一切の生あるもの命を以て寶となさゞるものなし。さればこそ佛法に於ても殺生戒を第一と敎へられたるなれ。尙おもんみるに六道の衆生は皆これ我が父母なり、と梵網經に說かれたり。過去遠劫を顧みるに我等の父母となれるもの幾そばくなりしを知るべからず。今狩りたつる鳥獸の中にも嘗つて我等の父母たりしものが因緣拙くして畜生に墮ちたるものゝ雜りてやあるらん。他生恩愛のよしみを忘れ前世の父母を殺さんこと、恐ろしからずや。痛ましからずや。今一天の君とあらせ給へるも過去十善の戒力に因らせ給へるなり。今日の御催しの殺生戒を犯す事となられ未來の苦果を招かせ給はんは如何にかなしき事におはさずや。それも民を助くるよすがともならばこそあれ、是は一場の御娛樂なり、返す〳〵も思召し止まらるゝ樣にと涙ながらに奏し給ふ。天皇飜然として悟らせ給ひ、急に命じて狩を止め改めて藥草を山野にあさらしめ御機嫌麗はしく還幸遊ばされたり。是れより藥狩りは宮中行事の一に定まりしと云ふ。太子の悲心、禽獸に及べるを見るべし。

藥狩

片岡山に飢ゑたる旅人

雪降り積る師走中ばの事なりき。太子河內の國よりの歸るさ片岡山を過ぎさせ給へるに途に臥したる乞食あり。飢に痩せて骨露はに衣破れて寒風の曝すに任す。太子憐れみて名を問はせ給へど得云はねば、食物を賜はり、召したる御衣を脫ぎて被はしめ、安く臥せよと宣ひて歸らせ給ふ道すがらもそを憐む情に堪へさせ給はず

しなてるや片岡山に飯に飢ゑ臥せる、其旅人あはれ、親無しに汝生りけめや、さす竹の君はやなき、飯に飢ゑてこやせるその旅人あはれ。

と歌はせ給ふ。明る日はやく使して見せしめしに早や息絕えたりと歸り聞え上ぐ。太子いたく歎かせ給ひ、屍を葬りて墓を造らしめ給ふ。日を經て太子從者に向はせ給ひ彼の飢死したるもの凡人にはあらで眞人と覺ゆるぞ、行き檢め見よと宣ふ。從者乃ち行きて見るに墓は聊か變れる樣無し。偖て掘りて見るに不思議や、屍は消え失せて太子の賜へる衣のみ殘りあり。いと怪しくて其旨聞え上ぐれば太子はさもこそと頷づかせ給ふ。時人その心を知る能はず、聖者にしてはじめて聖者を知るかと噂しあへり。應化の聖者達磨太師、昔し衡山の峰にて太子に日本の化導を勸め、太子の降誕に先たつ二十年、我國に渡來したれども時節未だ早かりしかば一法も說く事無く大乘の機に饑ゑて痩せ衰へたる形を太子に示されたるなりと傳ふ。もとより信ずべき事にあらねど、餘りに尊とかりし太子の行動を仰げる人々の心の中に達磨が日本に渡れり等云ふ憶說を種として胚胎したるものなるべし。我等は唯太子が路傍に臥せる乞食を哀れまれし悲心の一端を窺ひ見るものとして述べたるのみ。

達磨太師日本渡來の憶說

太子法華經疏を作らせ給ひて後、梵網經一部二卷を金泥にて寫させ給へり。寫し終りて宣はく是れ衆生成佛の師範にして一切含識の福田なり。之を信ずるもの必らず生死の源を出離すべく、之を保つもの定めて菩提の果を得べし。と、やがて御手の皮を剝ぎ生寫の梵網經に血印を押させ給へり。今も此の寫經は上宮王院に祕藏せらるると傳ふ。如何に衆生を哀れまれしか、如何に衆生を導きて菩提の樂しみを願たんと苦慮せられしか、思へばかしこき極みにこそ。

梵網經に血印を捺す

第六節　太子の薨去

推古天皇の二十九年二月廿一日、太子の愛妃大膳郎女みまからせ給ひ、墜くる廿二日と申すに太子は四十

薨去に對す國民の悲泣

九歳の寶算を以て涅槃の雲に入らせ給ふ。皇上を初めまつり群卿百官より下は賤の男はしために至るまで歎き悲しまざる者なく、釋尊御入滅の當時を漫ろに偲ばしむるものありき。書紀に此時の有樣を記して曰く、

半夜に厩戸豐聰耳皇子命、斑鳩宮に薨ず。是の時諸王諸臣及び天下の百姓悉く、長老は愛兒を失ふが如く、鹽酢の味、口にあれども嘗めず。少幼は慈父母を亡ふが如く、哭泣の聲行路に滿てり。乃ち耕夫は耕すことを止め、舂女は杵せず、皆曰月輝を失ひて天地既に崩れぬべし、自今以後誰をか恃まん。云々

書紀は第四十代天武天皇の御代、舍人親王及び太安麿の勅を受けて撰集したるもの、太子の薨後六七十年を出でざる時代の作なれば太子の記事は殆んと實際の寫生として信憑するに足るものなり。而して書紀三十卷を通じて斯くまで熱情を籠めて書きたるものなし。單なる形容の辭と見るべきにあらず。實に當時の人心の太子に歸向せる眞相をさながら寫し出せるものと云ふべし。上に述べたる太子の事蹟に照らして當然の事と思はるゝと同時に、此の薨去に對する國民悲痛の光景より推して太子の御德の愈高かりしを偲ばるゝなり。吾人は佛教全史を通じて釋尊の髣髴を求むる時、太子を外にして他に無きを見るなり。書紀の筆者は太子を以て佛陀の權化と目して書かれし一條は誰人も心づく事なるべし。

愛馬の殉死

御遺骸を棺槨に納め河內國科長の御墓に葬りまつるや、遠近の貴賤巷に滿ち悉く喪服を着し、香を燒き、號哭して別れを惜しみまつり、御葬送後五十余日の間は御墓の周圍に低徊悲泣の音絕えざりしと云ふ。更に不思議なりしは太子の平素乘りませる逞しかりし甲斐の驪馬は太子のかくれましゝ日より悲鳴して更に水草を喫はず、葬しまつれる當日喪輿の左の方に牽きて御墓所まで連れられしに棺槨を納めまつると齊しく一聲鳴きて忽ち息絕えにけり。畜類ながらも御德を慕ふあまり御あとに殉ひけんと人々哀れみき。月日たちて漸やく人の遠のける頃より一羽の異鳥來り、御墓の上に棲みて去らず、其の形鵲の如し。鳶鳥の類御墓の邊りに近づけば追ひのけて供物の類を亂さしめず、時人稱して守墓鳥と云へり。三年程經て何れへ行きけん再び來らざりしと。かゝる不思議の事ども數多云ひ傳へられたるもの何れか太子の德を談らざる。

守墓鳥

山背大兄王摩理勢を諭す

第七節　太子の御遺戒

太子の薨後七年にして推古天皇崩御あり。馬子の子蝦夷等諸臣と計り敏達天皇の御孫田村皇子を次の帝に仰ぎまつらんとす。蝦夷の弟境部摩理勢等は太子の御長子山背大兄王を立てんと主張して端無くも爭ひを引き起したり。大兄王摩理勢の來れるを諭して宣はく

汝先王(太子)の恩を忘れずして來る事甚だ愛ぐし、然れども汝一人によりて天下まさに亂るべし。又先王殺せ給はんとせし時諸子等に謂つて宣はく諸惡莫作、衆善奉行と、余斯の言を承けて以て永戒となす。是を以て私の情ありと雖も忍びて以て怨むこと無し。願はくは今より以後意を改むるに憚ること勿れ。

と大兄王は先帝の病床に臨みて親しく御繼嗣の御遺言を受けさせ給へるなり。されど田村皇子亦同樣の事ありと聞こしてよりは退いて爭はせ給はず、御身のために世の亂れん事を恐れさせ給ひ、何處までも父太子の御遺戒を守らせ給はんとす。斯くて田村皇子は第三十四代の帝位を踐ませ給ふ。舒明天皇と申し奉る。蝦夷等の橫暴は是より益々甚しきを加へ次の帝皇極天皇の御代に至り大兄王の威望高きを忌み不意に斑鳩宮を攻めて之を失ひまつらんとす。王は御一族と共に一度は生駒山に逃がれ給ひしも爭亂益々しげからんとするを聞はし再び斑鳩宮に歸らせ給ひ三輪文屋君をして入鹿の軍將に「我れ兵を起して入鹿を伐たば定めて勝つべ

王の殉難

きを思へど一身の故に百姓を傷り殘はんことを欲せず、是を以て吾一身を入鹿に賜ふ」と傳へしめ、御一族二十三人悉く自殺して失せさせ給ふ。その三輪文屋君が王にむかひて「東國に走り兵を催し乳部の民を根據とし師をおこして戰ひまさば勝たんこと必せり」と勸めまつるや、王は默然として

卿が云ふ所の如くせば勝たん事必然ならん。然かも我が情に十年は百姓を使役せずと冀へり。一身の故を以て萬民を勞せんや、又後の世に於て民の吾の故に己が父母を喪へりと云はれんを欲せず。豈戰の勝つのみを丈夫と云はんや、身を捨てゝ國を固くせば亦丈夫ならずや。

と、一人だも無辜の民を傷めしめんを欲かせ給ひ、御身を捨てゝ數多の生靈を救はんと思さるゝ御志の崇高なる何物をか之に比しまつらん。御一族を擧げて幼き王子に至るまで王の御志に同意を表し潔く難に殉し給へるに至りては如何に太子の御遺訓の行渡りしかを見るべきにあらずや。唯蝦夷等の横暴を其儘にして御身のみを淨くし給へるが如き憾みあれど當時の事情は詳細に知るによし無し戰ひ勝つのみを丈夫と云はんや、身を捨てゝ國を固くせば亦丈夫ならずやと宣はれし一語凜として王の風丰を偲ぶべきものあり。吾人はその採られし手段の適否は知らず、身を捨てゝ仁を行はれし大悲の發露をたゝへまつるのみ。斯くて聖德太子の御蹤は茲に至りて全く絕えたり。太子の御血の流れは悉く慈悲忍辱の精となり萬代の生靈を救はんとし給ふ。佛陀におはさずして何ぞや。吾人は繰り返して云はん、佛教全史を通じて釋尊の面影おはすもの太子の如きはあらずと。

身を捨て仁をなす

聖德太子に對する妄評の辨

世に太子の歷史を敍するものにして佛に佞す、或は佛に淫す云々と記すものあり。そも〳〵佞とは何を指せるにや、吾人　用ふる多くの場合は邪智ありて長上に阿諛し、好言令色にして仁鮮きものに用ふ。淫とは何ぞや、己れの好めるものに荒んで他を顧みず常軌を逸して弊害を釀すものに用ふ。太子の御生涯を通じて何れにか佞と云ひ、淫と稱する不穩の文字を用ふる個所ありや。絕對の眞理と思されたるものに歸依し御身を忘れて國民の福利を計らせ給ふ。假りに百步を讓り今日の理智に判して御信仰の對象に多少の非議すべき點ありとするも、又多少偏信の嫌ひおはしたりとするも、又其の結果が國の進運を多少さまたぐる所ありたりとするも、衆生のためと思されし大悲心に對しては十分の敬意を表せざるべからず。況んや太子の御信仰は大乘佛教の眞諦に徹底せられたりと佛教を知れる人の等しく認むるに於てをや。又況んや當時の世界的智識を吸收せられ、儒教にまれ、神道にまれ其の粹を採りて嫌はせ給ふ無く、人をして神儒佛三教の融合を計らせ給へりとさへ論ぜしめたるに於てをや。更に況んや教育に於て、政治に於て、外交に於て國運發展の基を開かせ給ひたる御功績は明治以前の歷史に匹儔するものなく、我國は太子に至りてはじめて完全なる國家をなせりと論ずる史家の尠なからざるに於てをや。たゞ佛教を信じられたりとの一事を以て佛に佞せり、佛に淫せりと稱するは餘りに禮を失へる語ならずや。餘りに誠意を缺ける見方ならずや。後世儒者、神道者の一部のもの佛教の何物たるを知らず、偏へに迷信なり、厭世主義なりと誤認して太子の之を信じさせ給へるを慊らず思ひ柔弱なる一紈袴者を以て遇せんとす。玉を瓦と認れるは猶恕すべし。我等百世の大恩を忘れたるに於て之を何とか云はん。太子が馬子の弑虐を寬假し給へるは後世史家の惜しむ所なり。されど其の眞相は感情によつて色彩せられたる儒者、神道者流の筆錄のみにより容易に知るべからざるものあり。書紀の如き最初の歷史に就きて當時の實際を詳細に觀察せば思ひ半ばに過ぐるものあるべし。

第三章　大化新政の前後

第一節　我國に於ける宗派の嚆矢

聖德太子は佛教の粹を御身に鍾めて之を我國に宣揚し給へるもの、何れの宗派にも屬し給へるにあらず。宗派的佛教の嚆矢とすべきは太子の薨後四年即ち推古天皇の三十三年正月元日高麗より來朝せる慧灌僧正なり。僧正高麗に生れ隋に入り嘉祥寺の吉藏太師に從ひて三論の教義を學び大いに悟る所あり、一度歸國し更に宗風を傳へんとして我國に來る。天皇勅して元興寺に居らしめ盛んに破邪顯正の道を廣說せしむ。時遇ま大旱にあひ田園皋けて枯死せんとす。慧灌乃ち勅を奉じ青衣をつけて三論を講じ至誠を凝らして祈るや大雨沛然として大塊を霑し兆民はじめて蘇色あり。慧灌功を以て僧正に任ぜらる、本邦第二の僧正なり。それより我國に止まり化導殆んど六十年、其門より福亮、慧雲、智藏、慧輪等の俊足を出し、三論宗大いに擴まる。三論に附隨して成實宗も傳來したれど獨立したるものにあらざるは既に述べたる如し。

慧灌僧正

三論宗
成實宗

第二節　大化の革新

聖德太子の御志をさながら受けつがせ給へるものは實に舒明天皇の御子中大兄皇子にておはしき。太子の御一屬の世をたらせ給ふや、蘇我氏の專横は其の極に達せり。皇子慨然匡濟の御志あり。僅かに諸臣の行動に御眼をつけさせ給ふ。曩世の偉人中臣鎌足亦王佐の資を持して救世の主を求む。兩者の會合は法興寺の蹴

中大兄皇子と鎌足

鞠を緣として相感應せり。

靴脫鞠墜足蹉跎、鞠墜猶可レ拾、社稷墜可二如何一、手捧二君軀一納二君足一、君足一踢斃二妖鹿一、臣手再植扶桑木、

乃ち皇子は鎌足と輿をともにして南淵請安に道を學ばれ途上畫策する所あり。慷慨の士石川麿、佐伯子麿等を延きて三韓入貢を機とし入鹿を大極殿に誅し蝦夷を其の第に攻めて妖雲全くはれ天日普く蒼生を照らすに至る。皇極天皇皇子の功を愛でさせ給ひ皇位を傳へんとし給ふや、皇子辭して御叔父輕皇子に讓らせ給ふ。輕皇子乃ち第三十六代の帝位を踐ませ給ひ孝德天皇と申し奉る。茲に於て皇子を立て皇太子となし、鎌足を內臣に阿部倉梯麿を左大臣、石川麿を右大臣となし政治の大改革を計らせ給ふ。皇子の主任にておはしたるは言ふまでもなし。乃ち前朝支那に留學して歸りたる僧旻、高向玄理を國の博士となして其の顧問とし唐制を參照して茲に大化の革新は斷行せられたり。天皇、皇太子を率る群臣を大槻樹の下に會し天神地祇に盟ひ給はく

大槻樹下の神祇の盟ひ

天は覆ひ地は載す。帝道唯一なり。而るに末代澆薄にして君臣序を失へり。皇天手を我れに假し暴逆を誅殄す。今より以後君に二故無く臣に二朝無けん。若し此の盟に背かば天災地變鬼誅人伐咬として日月の如けん。

聖德太子の憲法第三條と第十二條とを茲に繰り返させ給へるを見るべし。大化元年七月の勅に曰く「信義を以て天下を治むべし。」同八月國司に賜はれる勅に曰く「汝等國に就かば公民の戶籍を作り、田畝を校勘し、園池水陸の利は民と之を共にすべし。國司は其の任國にて罪を裁判すべからず、賄賂を貪るべからず。」又鐘匱を朝に設け詔して曰く、「若し訴訟あらば伴造先づ之を校勘し後之を奏せよ。尊長あらば其の者校勘して

奏せよ。伴造、尊長訴を審にせざる時は之を記して匱に納れよ。主吏は毎朝その書を出して朝に奏せよ。若し官司怠りて罪を理せず、阿黨して訴を曲ぐる事あらば鐘を撞け。天下の民をして悉く朕が意を知らしめよ。』

大化新政と聖德太子

同九月使を諸國に遣はし民の數を錄せしめ詔して曰く「歷朝子代の民を設け、御名を後代に傳へ給ふ。臣、連、國造、伴造等も亦皆私民を有して悉に之を使役し國縣の山海林野田地を割きて私地となし、調を朝に上つるや先づ自ら收めて殘餘を貢上し、又私地を百姓に賣りて年々その價を取れり、今より以後地を賣る事を得ず、又妄りに劣弱の百姓の地を兼併すべからず。」かくて大化二年正月元日朝賀の禮終るの後改新の大詔は下れり。其の詔は四項に分かる。第一項は土地人民私有の禁なり。第二項は地方區劃の改正なり。第三項は戶籍の調査及び田租の制なり。第四項は調及び庸の制なり。國初以來の封建制度は茲に改まりて郡縣の制となれり。束縛せられたる奴隷的人民は平等の權利を有する公民となれり。官職世襲の古風は廢せられて各自その能を盡すを得るに至れり。聖德太子の御志は茲に實顯せられたるなり。讀者願はくは太子の憲法と大化革新の前後に發せられたる詔勅とを照らし見られよ。

中大兄皇子と聖德太子

中大兄皇子の如何に聖德太子に私淑し給ひしかは其の生涯に涉れる御行動の凡てに就きて拜しまつるを得可し。久しく皇位を辭し太子となられて政を執らせ給へるもの、深く佛教を信じさせ給へるもの、太子の憲法に則りて之が實顯を計らせ給へるもの、支那の文物を盛んに輸入し給へるもの何れか太子に學ばせ給はざる。

佛教興隆の詔勅

大化の革新と同時に百濟大寺に於て佛教興隆の詔勅は下れり。始めて十師を任命し法頭を置きて天下の諸寺僧尼を檢察し、脫籍の寺院には總べて土地を施入せしめ、所造の寺院、營構を完うする能はざるものは天皇悉く之を助け修せしめ給ふ。白雉四年使を唐に遣はし留學生百二十一人を從はしむ。學生の半ばは僧侶なりき。鎌足の信佛定慧

鎌足亦深く佛教を信じ其の長子を僧となす、定慧と云ふ。入唐して修行を積み、父鎌足の薨後歸朝して其の墓を大和國磯城郡なる多武峰に改葬し、墓上に十三重の塔を建て塔の南に妙樂寺を營み、寺の東に殿を建てゝ鎌足の像を置けり。後世國家に大事ある毎に其の像破裂し、その墳墓鳴動すと稱し、その都度朝廷より奉幣ありき。醍醐天皇の朝こゝに社殿を建てゝ鎌足を祭り談山權現と云ふ。明治の御世に談山神社と改稱し別格官幣社に列せられ妙樂寺は廢寺となり其の堂宇は概ね廢毀せられたり。定慧の弟不比等亦厚く佛教を信じ奈良に興福寺を建て父の作りし釋迦の尊像を安置して維摩會を講じ藤原氏一門の檀那寺となせり。不比等の女安宿媛は佛教歸依者として有名なる光明皇后にておはすなり。鎌足の如何に佛道の歸依者たりしかは彼の一門の向へる跡を偲びて知るを得べし。大化の改新は實に聖德太子に濫觴し、中大兄皇子と鎌足との手腕になり、而して其の理想の核をなせるものが佛教の眞諦にありとすれば大化の改新は佛教精神の國家的表顯と見るべきものなり。佛教は非國家的なり、消極主義なりと論ずる人は斯かる生きたる事實を如何に見るにや。

不比等の信佛興福寺

大化の新政と佛教

第三節　大化以後の趨勢

孟蘭盆會

孝德天皇崩じ給ひ齊明天皇の三年七月に須彌山の像を飛鳥寺の西に作り、且つ盂蘭盆會を設け、同五年秋七月に至り群臣に勅し京內の諸寺に於て盂蘭盆經を勸講せしめて七世の父母に報恩せしめ給へり。今も七月に催さるゝ盆供の由來は是なり。(目蓮尊者參照)中興の英主天智天皇は御在位十年に過ぎざりしも前朝の皇

太子として大化革新の中堅におはせしは上に述べたる如し。滋賀の都は荒れにしも昔ながらの山櫻、幾千代の春に匂ひて大和心の表徴となる。道德を天訓に承けさせ給へる弘文天皇も御不運にして七ヶ月と申すに崩御ましまし、浮世を遠く三吉野に暫く觀念の月を澄まし給ひし大海人皇子も時運に伴はせ給ひて第四十代の天位を知ろしめし、天武天皇と稱し奉る。天皇英武にましまし前代の政治に滿足し給はず、改められし所多かりしも佛道歸依の點に至りては一層の深さを加へたり。盛んに諸寺に幸して法會を營み、佛像を禮し、使を諸國に遣りて金光明經、仁王經を說かしめ每戸に持佛堂を造り、法師を供養せしむる等、專ら宣教に盡させ給ひしかば當初上流にのみ行はれし信佛の念、漸く廣く民間に行渡るに至れり。本邦每戸の內佛は此時に起原したるなりと云ふ。持統天皇に至りては布敎師を大隅薩摩の邊陲に遣はされてあらびし隼人を天朝に服屬せしむる方便となし給ひ、天下の寺院五百四十五を數ふるに至る。文武天皇の大寶二年はじめて國每に國師(僧官)を置き、國內の僧尼を管し布敎を司らしめたりき。當時民間にあつて布敎に力を盡したる人に

天武天皇の信佛

持統堂の嚆矢佛敎漸く民間に行はる

法相宗

道昭　法師

あり。姓は船連氏、河內國丹北郡に生る。長じて飛鳥の元興寺に住し、道譽四方に高く、孝德帝の白雉四年選ばれて入唐僧となり、直ちに長安に赴きて弘福寺の玄奘三藏に謁し法相宗の眞諦を授かりて歸る。はじめ玄奘の道昭を見るや、直ちに諸徒に謂つて曰く、此の沙門は向來多くの人を度すべき人なり。汝等異域の人なりとて輕んずるなかれと。更に道昭に向つて曰く、我れ昔天竺に行きて驛路に粮絕え殆んど餓死せんとするに當り一人の沙門あり、梨子を以て我を惠む、我れ是によりて氣力を增し天竺に達するを得たりき。その沙門こそ汝の前身なりしか。宿緣空しからずして今日相逢ふ、豈舊恩を忘るべけんやと、房を同じくして懇ろに提撕せり。一日三藏、道昭に敎へて曰ふ、敎相のみを學ばずして禪の實修を爲せと、神光の門下なる慧滿禪師に就きて學ばしむ。その歸朝にのぞみ三藏が天竺より齎せる靈鑑を授く。之を以て粥を煮、水を煎じて服せしむるに病者癒えずと云ふこと無し。道昭之を持して歸るに海路遇々風濤烈しきにあひ船將さに覆らんとす。卜者ありて云ふ、これ海神の靈鑑に意ありての所爲ならんと、道昭乃ち之を海中に投じたるに風波忽ち止みて事無きを得たりと傳ふ。その眞僞を知らずと雖も玄奘三藏が祕奧をつくして道昭に傳へられたるを表はさんとする傳說と見ば足りなん。道昭歸來再び元興寺に入り一面には禪法を說き、一面には法相の敎理を談じ、更に起ちて濟世利民の策を講じたり。卽ち義井を掘りて旅人を益し、渡船を設け橋梁を架して交通の便を計り化蹟殆んど全國に徧ねし。山城宇治橋の架設の如きも和尙預かりて力ありしと云ふ。大寶二年冬十二月藥師寺の繡佛成るや道昭に詔ありて其の開眼の講師に任ぜられ大僧都の號を授けらる。我國に此の僧位あるはじめなり。大寶四年二月七十二歲を以て元興寺の禪院に寂す。遺言により其の遺骸を荼毘に附す。本邦に於ける火葬茲に初まる。超えて一年持統上皇崩御ましますや亦遺詔によりて火葬し奉れり。爾來火葬に行はせ給へる天皇三十八人と數へ奉る。道昭、忍辱の德最も高し、嘗つて弟子の一人和尙の道念を試さんと欲し、竊かに便器に孔を穿ち被褥の上に漏らし汚がす。道昭微笑して、汝人を汚がすを屢れて尿を捨てたるかと更に一語の激する無かりしと云ふ。

靈鑑を授かる

濟世利民の事業

大僧都

本邦火葬の初め

道昭忍辱の德

法相宗四回の傳來

法相宗の我國に傳はれるもの前後四回、第一傳は道昭法師、第二傳は齊明天皇の四年に智通、智達の二師入唐して傳へたるもの、第三傳は文武天皇の大寶三年智鳳、智鸞、智雄の三師、第四傳は元正天皇の靈龜二年玄昉僧正の入唐して傳へたるものなり。第一、第二の傳は之を合して南寺の傳或は元興寺の傳と云ひ、第

三傳は之を北寺の傳、或は興福寺の傳と云ふ。南寺にありては道昭、智達の下に行基菩薩あり、北寺にありては智鳳の下に義淵僧正あり、行基亦教を義淵に受く、法相宗これより盛んなり。

義淵僧正

義淵僧正、俗姓は市往氏、其の父母詳かならず。天智天皇取りて之を岡本の宮に養はせ給ふ。長じて深く三寶に歸依し、勅を拜して出家し智鳳に師事し龍門、龍蓋等の五個龍寺を開き盛んに其徒を教養す。行基、玄肪、宣教、良敏、行遠、隆尊、良辨等を稱して淵門の七上足と云ふ。學德一代に高く官僧正に至り、神龜五年十月六十餘歲にして寂す。

佛教に關する成文規定

大化の改新より近江令の制定となり、文武天皇の大寶令發布によりて成文法律の完成を見るに至る。大寶令に於て佛教及び僧尼に關する規定備はれり。卽ち治部省の被官に玄蕃寮あり、玄は僧侶の意、蕃は外蕃の義にして全國の佛寺、僧尼の名籍並びに外國に關する事を司どれり。僧尼に關する規定は特に僧尼令を設けあり、僧尼の身分、特權、職務、刑事上の特別取扱等をせられたり。

三教の融和

佛教の興隆と共に神祇を尊とび儒教を重んずる風も一層盛んになり、大寶令に於ては神祇官を以て太政官の上に班せしめ、文武天皇の大寶元年二月始めて釋典の禮を行ひて孔子及び十哲の祭りをなしたり。吉備眞備の唐より歸るに及び其の儀式完備せりと云ふ。神儒佛の三教は當時互に融和して何等乖離する處なかりしなり。

附說、役行者

神變不思議の行者として名高き役小角は大和國葛城上郡の人にして舒明天皇の御代に生る。深く佛道に歸依し、三十二歲にして家を棄て葛城山に入り、巖窟にて修行すること三十年、松果を食ひ、藤葛を着け、專ら孔雀明王の神呪を受持讀誦し終に大自在を得て鬼神を驅役し、空中を飛行せり。其門に韓國連廣足あり。

修驗道

山伏

呪術を學びて其能の及ばざるを嘗み、行者の妖術は國に害ありとして朝に訴ふ。文武天皇詔を發して之を召したれど空に騰りて捉ふる能はず。車乃ち其の母を捕へしに行者至孝にして母の苦しみを見るに忍びず、自ら出でゝ縛に就き、やがて伊豆の大島に流されたり。後赦されて京に歸り暫く各地を巡りて赤開の諸山を開き、遂に鐵鉢の中に老母を坐せしめ、之を携へて唐土に飛び渡れりと傳ふ。後年宇多天皇の御世に理源太師、行者の迹を慕ひて修驗道を興し鈴懸、結袈裟、頭巾、數珠、法螺、斧等の法器を携へて登山の儀軌を正しくし、毎年一回大和の吉野より紀州熊野まで疾走して奧駈の作法となし、有相、無相の教理を立て、佛道の功德と敬神の旨とを融合せる一派となせり。山伏と稱するもの是なり。吾人未だ其の眞相を知らず、今は唯、宗教に附隨する神祕的方面の分派として之を認め、神佛融和の一思想として之を附記し置かんのみ。

第四章　奈良朝時代

第一節　序說

佛教の隆盛

佛道頹廢の因

法海の波瀾

青丹よし奈良の都の七十年間は咲く花の匂ふが如しと歌はれけん如く文華燦然として宇内を覆ひ佛教の隆盛その極に達したりと稱せらる。しかも泰平になれて惰氣を生ずるは人情の常なり。世に萬年の春無く、榮華の蔭には惡魔の囁きあり。世を棄けて佛を禮し、三寶に歸依するを見、心に權勢を思ひ榮達に憧がるゝの徒、陽に信仰をよそほひ、佛者の假面をかぶり、陰に信者に伴ふ迷信を利用して己れの欲望を遂しうせんとする似非僧侶の輩出從つて起り佛道頹廢の因亦實に此の時代にきざしたり。されど仔細に遠觀する時は其のよりて來るに因あり、緣あり、波瀾曲折を經て織りなせる佛法界の大錦繡は豆の如き眼を一小局部のみに放して評し得べからざるものあり。後代に顯はれ來る大高德の奮然として修行の道程に上られたるもの其の頽勢を挽回せんと志されたるにあらざるは無し。物盛り過ぐれば腐朽し、腐朽せるものは肥料となりて更に新しきものを培ふ。因果轉々して變化極まり無き所に宇宙の生命あり。其の理を觀じて其の間の趣味を味ふもの是れ實に佛道の敎なり。

四禽圖に叶ひ三山鎭めをなし龜筮並び從ふ平城の地を相して元明天皇の和銅三年三月遷都あられたり。左京右京を定め九條の大路を通じ宮殿邸宅等規模壯大にして國初以來はじめて見る帝都なりき。國家の自覺を與ふる國史の編著も此の御代に成就したり。經濟界骨子の機關たる貨幣の鑄造も此の御代にはじまれり。久しくまつろはざりし薩摩隼人の入朝して王化に浴したるも此の御代なり。而して佛敎は最早純然たる日本の國敎となりぬ。養老四年に淡海公不比等の病むや天下に大赦を行ひ、四十八個寺に詔して藥師經を讀ましめたり。同六年十二月天武持統兩帝の冥福のため勅して佛像を造らしめ、七年二月沙彌滿誓を遣はして筑紫に觀音寺を建立せしめられたり。崇佛の形式に走りて寺塔の濫造おこるや、こは却りて佛を穢すなり、數寺を合して一となし莊嚴を加へて奉祀せよとの詔さへ下されたり。斯くて四十五代聖武天皇の御代に至り七寶もて嚴飾せられし宛然たる佛國土は顯出せられたり。

日本の國敎

第二節　聖武天皇

天皇興佛の事蹟

大乘經典による國土の嚴飾

奈良朝の精華は聖武天皇の御代なり。天皇の信佛の念厚くおはしたると其の御事蹟の偉大なりしとは又格別の事にして、佛敎信者の眼には觀音菩薩の化現と拜せられ、聖德太子の再來と仰がれたりき。皇后光明子亦稀に見るべき賢婦人におはし其の熱烈なりし信仰は天皇の御聖德と合して化育を六合に施させ給へり。

天皇の佛敎興隆に關する御事蹟は神龜二年九月詔を下して三千人の僧を度し、大和の諸寺に於て七日間の轉經をなし、災異を攘はしめられたるを初めとし、或は金光明經六百四十卷を寫さしめて國毎に之を頒ち、又諸國に命じて釋迦佛の像一軀、挾侍菩薩二軀を造り備へしめ、或は六齋日を定めて精進し、殺生を禁じ、或は悲田院、施藥院等を設けて天下の飢人、病人を恤み救はせ給ふ等、舉げ來ればおよびも折れなまし。されど斯の如きは信仰の君主が採れる蹤にして古來其の例に乏しからず。吾人が天皇の偉大を感得するは其の大乘敎典をさながら國土の上にうつして嚴飾し、我帝國建國の大理想を佛法の大理想と融合せしめ、佛者の

信ずる本佛と帝國臣民が萬世に通じて仰ぎ戴く天祖の御威靈とを不二ならしめ、神佛一如の觀念を與へて天下の人心を統一せんとせられたる雄大なる御手腕にあり。

國分寺建立の詔

天平十三年三月國分寺建立の詔を下されたり。

朕薄德を以て忝くも重任を承け、未だ政化を弘めず、寡兼多く慚づ。古の明王皆能く先業を修め國泰く人樂しみ災除き福至る。何の政化を修めて能くこの道に至らん。頃者年穀豐かならず疫癘頻りに至る。慙懼交々集まりひとり勞して己れを罪するのみ。是を以て廣く蒼生のために遍ねく景福を求めんとす。故に前年驛を馳せて天下の神宮を增飾し、去歳普ねく天下に令して釋迦牟尼佛尊の金像高さ一丈六尺なるもの各一舗を作り、併せて大般若經一部を寫さしむ。今春より以來秋稼に至るまで風雨序に順ひ、五穀豐穰せり。これ卽ち誠を微し願を啓く、靈脫答ふるが如し。すなはち惶み、すなはち恐れ以て自ら寧んず。案ずるに經に云ふ、若し國王に此の經王を講宣讀誦恭敬供養するものあらば我等四王常に來護し、一切の災障皆消殄せしめ、憂愁疫疾も亦除かしめ、願ふ所は心に從ひ常に歡喜を生ずと云へり。宜しく天下諸國をして各々七重塔一區を敬造し、併せて金光明最勝王經、妙法蓮華經各々十部を寫さしむべし。朕も亦別に金字の金光明最勝王經を寫し、塔毎に各一部を置かしむべし。冀ふ所は聖法の盛んなる天地と永く傳へ、擁護の恩幽明に被りて恒に滿たさん。（中略）又國毎に僧寺には封五十戸水田十町を施し、尼寺には水田十町を施し、僧寺には必らず二十僧を置き其の寺名を金光明四天王護國寺とし、尼寺には必らず十尼を置きその寺名を法華滅罪寺となさん。（下略）

斯くて國分寺は國家的事業として經營せられたり。その落成を速かならしめんために諸國に詔し正税四萬束を割き二萬束づゝを僧尼兩寺に頒ち施され、年々之を出舉し其の利息を永く造寺の用途に充てしめ給へり。

東大寺建立の詔

夫れより二年を經て天平十五年十月東大寺建立の詔は下れり。茲に良辨僧正が華嚴の教理を進講しまつりて天皇の嘉納する所となれる事實を注意し置くべし。

朕薄德を以て恭しく大位を承け、志兼濟に存し勤めて人物を撫す。率土の濱已に仁恕に霑ふと雖も而かも普天の下未だ法恩に洽ねからず、三寶の威靈を賴み乾坤相泰かに萬代の福業を修し、動植域く榮えんと欲す。粤に天平十五年歳次癸未十月十五日を以て菩薩の大願を發し盧舍那佛金銅の像一軀を造り奉り、國銅を盡して像を鑄し大山を削りて以て堂を構へ廣く法界に及ぼして朕が知證となし、遂に同じく利益を蒙り、共に菩提に致らしめん。夫れ天下の富を有つものは朕なり。天下の勢を有つものは朕なり。此の富勢を以て此の尊像を造る。事成り易くして心至り難し。但徒らに人を勞するありて能く聖を感ずる事無く或は誹謗を生じ反りて罪辜に墮ん事を恐る。是の故に智識に預かるものは懇ろに至誠を發し各介福を招かば宜しく毎日盧舍那佛を三拜すべし。自ら當に念を存しおの〳〵盧舍那佛を造るべし。若し更に人の一枝の草、一把の土を持ちて像を助け造らんと請願するものあらば恣に之を聽せ。國郡等の司、此の事に因りて百姓を侵擾し强ひて收斂せしむる勿れ。遐爾に布告して朕が意を知らしめよ。

聖旨の忖度

此の詔勅により聖旨を忖度しまつるを得べし。聖王の惠澤に浴するものは以て父母を奉じ妻子を養ひその堵に安んじて五十年の生涯を送るを得べし。されど一度人生の無常を感じ草露の如き我運命に思ひ至る時、衷心より湧き出づる悲哀の情は現實の安心のみによつて慰まるべきにあらず。無終の生命を感得し、佛陀の慈懷にいだかるゝてふ靈界の便りに接する時、まことの大安心は得らるべきなり。これ率土の濱已に仁恕に霑

ふと雖も普天の下未だ法恩に洽ねからずと勅らせ給へる以所なり。卽ち億兆の靈肉ともに救はせ給はんてふ菩薩の大願を起させ給へるなり。而して靈界の大悲心を凡夫の眼前に髣髴せしむる最良方便は崇嚴なる寺塔と妙相圓滿なる佛像の建設にあること既に述べたり。寺塔佛像ともに無生の物質によりて成れるものなれども信仰あるものゝ造作に精神の籠るべきは自然の理にして其の威容を仰ぐものゝ心に靈動をおこし微妙なる靈界の便りに接するを得るなり。卽ち一の偶像を介して感應道交する法界の妙玄に存す。されば其の寺塔はつとめて崇嚴に、佛像は妙相偉大なるべきは云ふまでもなく其の造作は至誠の結晶ならざるべからず。これ天皇が國銅を盡して盧舍那佛の像を作り大山を削りて以て堂を構ふと宣はせられし以所なり。しかも富勢の力のみにて作れるものは如何に偉大なりとも佛陀の悲心は籠るべからず。されば天下の富勢を以て此の尊像を造るは事成り易きも心至り難し、徒らに人を勞することありて聖を感ずる事なくば反りて罪辜に墮んと宣はれて、人々至誠をこらし造作すべきを諭され一枝の草、一把の土の寄進をも至誠の請をば之を嘉納し、種勢を以て百姓を侵擾し強ひて收斂するが如きは嚴しく止めさせ給へる聖旨かしこからずや。大佛の背記に銘せる貧者の一燈、富者の萬燈の譬こそ天皇の叡慮を民にさとさしめ給へるものと云ふべけれ。

貧者の一燈の理想

斯くて天皇は大佛像を近江の滋賀に造らんと思召したゝれ都を紫香樂宮に遷して玆に甲賀寺の建立となり、天皇親しく繩を引かれて天平十六年十一月模造を造り骨柱を寺内に建て給へり。此の間、僧行基は諸弟子を率ゐて衆庶を勸誘し聖旨の貫徹に力をいたしたり。然るに此地狹隘にして水陸の便惡しく人々新京の不便を訴へしかば再び奈良に還都せられ天平十七年八月東山に於て大佛の地壇を築きぬ。天皇親から御袖を以て土沙を運び佛座に加へさせ給へり。不空羂索院、後改めて金鐘寺と稱し、更に大和金光明寺となり、後に

甲賀寺

東大寺大佛建立

總國分寺となれる東大寺は卽ち是なり。天平十九年始めて大像の鑄造を興し三年、八ヶ度の改鑄を行ひて天平二十一年に至り世界的なる大佛像の建立は竣工を了したり。座像の高さ五丈三尺五寸、面の長さ一丈六尺、廣さ九尺五寸、目の長さ三尺九寸、口の長さ三尺七寸、胸の長さ一丈八尺、腹の長さ一丈三尺、臂の長さ一丈九尺掌の長さ五尺六寸其の他これに稱ふ。銅座大小五十六枚高さ一丈而して其の大佛殿の高さは實に十五丈六尺、東西二十九丈南北十七丈、巍然として空に聳ゆる大建立は千百餘年前に於ける當時の日本人をして如何に壯大の觀念をおこさしめけん。更に大山崩れ來るとも身搖ぎだにし給はざるしかも端嚴美妙にして愛憐の背をたれさせ給へる毘盧舍那大佛の尊容を仰ける人々の心の中には如何に强き信仰的印象を刻したりけん。理智の判斷のみを尊とぶ現代の人には蓋し想像し能はざるものありしなるべし。彼の弘安の役後十八年にして支那に入り國事探偵の嫌疑を受け斷頭場裏に立ちて從容さわがず電光影裡斬二春風一てふ祖元禪師の一偈を唱へ獄卒をして驚歎せしめ、海外の一孤客しかも刑餘の一比丘が一躍して文宗帝の殊遇に接し實覺眞空禪師の號を賜はりて歸朝したる鎌倉時代の高僧雪村友梅禪師は常に門生に致ふるに奈良の大佛を理想とすべき事を以てせり。其の大佛の偈に曰く

友梅禪師の大佛贊

範金十六丈爲一身。雄鎭扶桑第一尊。
徐是虛空圓滿體。人間彫刻盡二兒孫一。

星移り物變りて淳樸なる信念漸やく薄らぎ理智の批評眼のみ發達し來り、大佛は見るものにして尊とまずと川柳にさへうたはれて、さしも信仰の標的たりし毘盧舍那の大尊像も空しく古代に於ける工藝の遺物としてのみ賞觀せらるゝに至れるもの亦これ自然の趨勢なるか。

信仰の標的たりしもの工藝の遺物となる

佛德によりて黄金華咲く三寶の奴

大佛の鑄造已に成りて塗金足らざるに當り恰もよし二十一年二月陸奥守從五位上百濟王敬福始めて黄金を貢内小田郡より得て之を上りぬ。天皇の御喜びや如何なりけん。此の大倭の國は天地の開け初めしより以來黄金は人の國より献ることはあれども斯の國には無きものと思へるに今し聞食す國の内より黄金の華の咲き出でたること盧舍那佛の福はひ給ふによるなりと宣はせられ天平感寶と改元して御親ら三寶の奴と仰せ出だされしもの、神佛の感應により國民一同に慶福を頒ち得るに至れりと思され衷心より歸依遊ばされし自然の御聲と響くを覺ゆ。

僕者の嘲笑

すめらぎの御代榮えんと東なる陸奥山に黄金華咲くと大伴家持の詠じたるは蓋し國民讃歌の代表なり。後世佛教を慊らず思へる偏見なる儒者の一派が

地出二黄金一理豈無、如言二佛德一奈二其愚一、萬乘尊陛巳瞿曇術、頂禮自稱三寶奴。

等と誹り、理智一片の者皆之に雷同す。斯の如き人に向つては至誠の何物たるを語る能はず。況んや法界靈妙の實相をや。

四聖建立

かくて天平勝寶四年四月九日盛んなる開眼の大供養會を設く。天竺より渡來せる沙門菩提僊那婆羅門僧正これが導師たり。寺は聖武天皇の本願にして良辨僧正開基となり、行基菩薩勸進して婆羅門僧正導師となれゝばとて世に四聖建立の伽藍と稱したり。蓋し天皇を以て觀音の化身と信じ、良辨僧正を彌勒、行基菩薩を文殊、婆羅門僧正を普賢の化身と信じたる當時の人の感想より湧き出でたる名稱なるべし。東大寺の建立と共に大和の國分尼寺なる法華經寺を建立し以て總國分尼寺に充てさせ給へり。

東大寺と國分寺

そも〳〵東大寺に於ける毘盧舍那大佛と各國分寺に於ける丈六の釋迦佛との關係は實に華嚴の教理より出でたるなり。毘盧舍那大佛は大方廣華嚴經を說かれたる本佛にして中央の蓮臺に座し給へるもの、各國分寺の小釋迦佛は其の蓮葉中の小釋迦佛を日本全國に展開したるものなり。(華嚴經の部參照)卽ち日本全國を以て一大蓮華藏世界たらしめんとの大理想より出でたるもの聖旨まことに雄大なりと申すべし。

蓮華藏世界の大理想

伊勢内宮の神慮奉伺に就きて

神宮雜事によつて敍したる元亨釋書を案ずるに、天皇が此の大決斷を遊ばさるゝに先だち行基に勅して伊勢皇大神宮の神慮を伺はしめたり。行基乃ち内宮南門なる大杉の下に至誠を凝らして祈念する一七日、聖旨よく神慮に叶ふ旨の神託を受けて奏聞す。天皇重ねて持進右僕射橘諸兄公に勅して勢州に詣でしむ。歸り奏することゝ前の如し。其夜大神宮、天皇の御夢に入りて告げ給ふらく、日輪は是れ毘盧舍那なり、帝その意を得て營興を爲せと、日輪の相を現じて其の光赫如たり。天皇憂めて感激し志を決しさせ給へりと。此の事正史たる續日本紀に無きを以て史家の抹殺するもの多し。されど正史必ずしも遺漏なき能はず、野史雜錄に反りて眞を傳ふるものあり。此の事あまりに神祕的なるを以て常識論者のうけがはざるは勿論なれども心靈上の問題は淺薄なる常識のみにて知らるべきにあらず。當時の人は神佛の御告げてふ事をば堅く信じ居たるなり。かゝる信仰の前には一種の靈感おこり來るべきこと今日の心理學者も認め來れるにあらずや。元明天皇の御代には一僧の神托を奏するに依りて宇佐八幡宮を建立し、稱德天皇の御代には清麿をして宇佐八幡の神慮を伺はしめたる著明の事實あり。國民歸依の大本尊を國家的事業としておこさんとするに當り天祖の神慮を伺ひまつらんと思召したゝるゝは敬神の念特に厚くおはしたる天皇として當然の事と申すべし。記錄の全部をそのまゝ信ずべきにあらざれど之を透して當時の眞相を知るべきなり。思ふに天皇並びに行基等の高僧は今日一般の想像するが如き迷信的信者にてはおはさず、眞に佛教の眞諦を悟らせ給へるものなり。光明遍

照と譯する毘盧舍那佛、華嚴の教理を說かせ給へる大本尊は宇宙法界を領する大靈德にして我國を永久に守らせ給ふ天祖大照大神はまさしく其の垂跡にておはすべきなり。天皇も行基菩薩も其の御心の底には斯かる信念の潛み居れる事けだし疑ふべからず。顯意識なりしや潛在的意識なりしやは今問ふ所にあらず。斯くて私心を去り、眞心こらして神意を伺ひまつる時一種の感應おこり、或は夢の中に、或は神祕的に、神の御告げとなりて表はれ來るべきこと古今の類例擧げ盡すべからず。斯くの如くにして天皇並びに行基等の高僧の確信となり、玆に本地垂跡說の我國に廣まれる因由となれるなるべし。

佛法弘布の方便說と云ふもの

本地の意義

垂跡の意義

第三節　本地垂跡の說

佛教を知らぬ人の本地垂跡說に對する考は頗る簡單なり。佛徒が我國民の敬神の念强くして兎角佛教に對し慊焉たらざる傾きあるより、印度の佛は本體なり、日本の神々は我國の衆生を濟度せんために佛の跡を垂れたるものにして印度は本地なり、我國は垂跡の地なりてふ說を立て以て佛教弘布に資したる神佛混交の方便說なりと云ふにあり。我等も久しく左樣に信じて過去の迷信を笑ひ居たりき。佛教々理の幾分を理會せる今日より考ふれば餘りに皮相の考なりき。そも〳〵本地とは哲學上の術語もて云へば現象界に對する絕對界の謂ひなり、宗教的に云へば一切衆生を救はんとする大慈悲心の發源地なり。多くの聖者の世に出でて迷へる人を教へ導くは宇宙法界に遍滿せる本地の大悲心が人格を備へて現はれたりと見る信念より之を垂跡と云へるなり。云ひ換ふれば諸人化益のため種々に工夫して行動する佛のはからひを垂跡と云ひ、佛が本有の妙理に契合せる眞實究竟の地位を本地と云ふなり。されば印度に於ける佛菩薩と雖も已に衆生界に出でて、法

法華經の迹門と本門

信仰無き人の他觀論

佛者の方便

を說き敎へを垂れられしものは悉く垂跡の佛菩薩なり。法華經の釋迦に於て迹門と本門との類別をなせるもの實に本地垂跡說の根元なり。天月は唯一なり。池水にうつりて億萬無數の影を現ず。一切衆生を救濟せらるゝ本佛は唯一なり。類に應じて姿を現じ法を說き敎を垂るゝは迹佛なり。法華經に於て先づ迹佛の釋尊を述べ本門壽量品に於て本地の釋尊を開顯し一切經統一の要となしたり。これ法華經の經王として推重せらるる所以なり。本佛論と云へば佛敎に於て此上なき重大問題とせらるゝなり。本地垂跡說は斯の如き甚深なる根底を有するものにて一時の弘法方便說など云ふべきものにあらざるなり。多くの歷史家が本地垂跡說を以て行基菩薩にはじまると云ひ、或は弘法、傳敎兩太師を嚆矢と論じ、或は下りて平安朝の末頃までに漸次大成せられたるものと斷ず。史實の考證は史家に任せん。されど本說本來の意義より考ふる時は苟くも大乘佛敎に眞實信仰を捧ぐるものは誰人も本地垂跡の觀念をおこすべきなり。行基、弘法等の高僧が一時の方便に本說を唱へ出したりと云ふが如きは信仰に住せぬ人の他觀論のみ。宗敎の生命は信仰にあり、高僧の高僧たるは究竟の信仰に座したるによれり。我國土の安寧を護らるゝ祖神は何れも垂跡の佛にておはすとは是等高僧の堅き信仰なり。たゞ徹底せる本地の說明は佛敎に依らざるべからず、しかも一般の知識は低級なり。抽象的解釋にては溫かき本佛の大悲心を會得せしむる能はず。玆に於てか暫らく印度に說かれたる佛菩薩を本地とし我國神を垂跡の佛菩薩として說かれたるものにして之を佛者の方便と云ふ。同じ方便と稱するも異きに述べたる方便とは甚しき相違あり。前者にありては佛敎と稱する一宗派を擴めんがため巧みに附會の說をなしたりと云ふものにて我執を離れぬ邪道なり。後者の所謂佛者の方便とは悲心餘りありて機に應じ最良の手段を探りたるなり。機熟するに及んで究竟の本佛に逢着すべきなり。かゝる佛者の方便は獨り本地垂跡の說

のみならず、經典の凡てが悉くこれ本佛の大悲心を悟らしめんための方便說なり。深く說者の心裏に入るを期めずして小さき我見を楯にとり皮相の觀察のみをなすに於ては百年聖者の書と親しむとも衣裏の寶珠は終に認め得べからず。

神佛の區別忌諱

佛教傳來の當初にありては伊勢神宮の如き最も嚴に神と佛とを區別し、忌詞ありて佛を中子、經を染紙、塔をアラヽギ、法師を髮長、尼を女髮長、優婆塞を角波須、寺を瓦葺等と唱へ以て佛を擯けたりしも佛教信仰の念と敬神の念とは漸次融和し來り、元正天皇の靈龜元年に藤原武智麿が越前の氣比神社のため神宮寺を作りたるを初めとし、聖武天皇の天平十三年には最勝王經、法華經を宇佐八幡宮に納めて度者十八人を置き、

神宮寺

ついで此の宮に神宮寺を建て、稱德天皇の天平神護二年に至りては使を伊勢に遣はして丈六の佛像を大神宮に建て更に大神宮寺を建て給へり。爾來神宮寺の諸社に建てらるゝもの甚だ多く、或は菩薩號を以て神を唱へ、或は佛舍利を神前に供へ經文を神前に誦するに至る。聖武天皇の前後より神佛に對する國民の觀念の如何に變り來れるかを見るべきなり。

神佛融合

本地垂跡の思想が行基等の高僧によりて漸やく民間に萌し來り、毘盧舍那大佛の建立によりて一般の信念を醸成したりと想像するの實際に近きを覺ゆるなり。吾等は筆を改めて聖武天皇の御偉業を補佐しまつれる良辨僧正、行基菩薩の事跡を略述せん。

第四節

一、良辨僧正

我國華嚴宗の開祖として仰がるゝ良辨僧正は其の本貫詳かならず。元享釋書には姓は百濟氏、江州志賀の人とあり。本朝高僧傳には姓は淺部氏相州の人とあり。持統天皇の御代に生る。幼時母に伴はれて樹下に遊び居りしを大鷲の攫ふ所となり奈良春日の祠前に放ち去られたり。

大鷲に攫はる

遇々義淵僧正神祠に詣し收め歸りて之を養へりと傳ふ。義淵の門下にありて法相を學び出藍の譽れあり。其の正脈を宣揚すべきは順序なりしも五性各別と敎ふる所に滿足する能はず、華嚴一乘の門を窺ふに及んで之に服し嚴智師を元興寺に訪ひて敎を乞ひ更に其の指示に從ひて新羅の學生審祥大德の大安寺に住せるに就いて學ぶ。審祥大德は支那華嚴宗の始祖賢首太師に從ひて學べる人なり。はじめ良辨久しく大和添上郡なる一小院にありて研學修行を積み居たりしが其の學德聖武天皇の上聞に達し召し出されて御前に法を說くや忽ち叡慮に叶ひ造營中の羂索院を賜はり官府より粮を給して工事を督し竣工して後之を金鐘寺と改稱せり。當時は猶ほ法相を學び居たりしものゝ如し。

華嚴經の開演

天平十二年十月八日勅命を以て審祥大德を金鐘寺の道場に請し華嚴經を講ぜしむ。聖武天皇亦群臣を率ゐて聽講せられたり。これ本邦に於ける華嚴經開演のはじめなりとぞ。これより先き天平八年に唐の道行律師來朝し、初めて華嚴の章疏を傳へたりと雖も未だ講說に至らざりき。爾來華嚴の講演は永代の式となり、東大寺創立の後は本宗を以て殆んど一切の佛敎を統一したりき。大佛の草創は華嚴初講の第四年目にして扶桑略記によれば天皇の此の擧を勸めまつれるは實に良辨僧正なりしと云ふ。東大寺最初の寺司別當となり寶龜四年八十五歲を以て寂す。

東大寺最初の別當

二、行基菩薩

山鳥のほろ〳〵と鳴く聲聞けば
父かとぞ思ふ、母かとぞ思ふ

第四節　良辨僧正、行基菩薩。

誠の菩薩

父母を偲ぶの眞心が佛教報恩思想の中心より湧き出でたる此の天籟のたよりと共に行基菩薩の溫容はけだかく優しく尊とく懷かしく我等の眼前に髣髴するを覺ゆるなり。古來名僧智識の數多世に出でたりと雖も、菩薩のみは特に勝れて現し世の人とは思はれぬまでに尊とく仰がるゝもの、如何に其の德風の世に浸み渡れるかを知るべきなり。菩薩姓は高志氏、和泉國大鳥郡家原の人なり。元享釋書には百濟王の胤と云ひ、本朝高僧傳には東漢帝の裔と傳ふ。天智天皇の七年に生る。生るゝ折に胞衣を身に纏ひあり父母之を忌みて不祥の兒となし樹下に棄て置きしに一夜胞を出で何やらん物云ふ樣にてありしかば又收めて養育したりと云ふ。幼時の野遊びにも荊を布きて其の上に坐し佛の敎を說きしかば牛馬を牧する群童等周圍に集まりて之を聽き、子等を尋ねて寄り來し數多の男女の同じく法を聞きて感嘆し共に歸りを忘るゝに至る。說法了り行基高處に上りて一呼するに四散の牛馬聲に應じて集まり各々其の主に牽かれて歸りしと傳ふ。天武天皇の白鳳十一年十五歲にして出家し藥師寺にて法相宗を學び後龍門に於て義淵僧正に從ひ二十四歲の時高官寺の德光法師に就きて具足戒を受け、道昭和尙より瑜伽唯識の祕訣を授かり常に山林に處りて禪定を修し三十七歲の時自宅を以て寺となし自ら炊爨の勞に服して母を養ひ、四十歲にして母沒せしかば三年の喪を了り、それより諸國に勸化して佛法弘通をはかりたり。篤き信仰と自然の靈德とは至る所の道俗を化し途に從ふ信者千を以て數へられ菩薩一度通過すれば巷に居人なしと稱せられき。化風の餘りに盛んなりしより一面には妖僧を以て目せられ元正天皇の養老元年には布敎禁斷の勅をさへ下さるゝに至りぬ。足切られても弁氏の璧は終に其の眞價を知らる。布敎禁斷後四年と云ふに元正帝の御召しによりて宮中に入り度者二人を賜はりて退き、寺史乙麿は宅を捨てゝ菅原寺を建て菩薩を招ぎて住せしめたり。聖武天皇の御代に至りては其の御歸依、御信任、

菩薩一度通過すれば巷に居人無し

樹下の棄兒

幼時の說法

大佛建立の勸進

最早池中のものならず。大佛建立に際し聖旨を帶びて大神宮の神慮を窺ひ、四方に勸誘して寄進を集むれば喜捨忽ち積んで山を成し天皇の御偉業たちどころに成る。天平十六年には我朝にて初めてなる大僧正の僧位を勅賜せられ（爾後二百年間この事なし）同じく二十年十一月には天皇親しく菅原寺に幸して度者百二十人を賜はり、翌年正月十四日には宮中に召されて天皇、皇后、皇太后に菩薩戒を授け奉る。此時に行基大菩薩の號を勅賜せられたりと傳ふ。續日本紀によれば時人號して行基菩薩と呼べりとあり。何れにしても形式なる名稱にはあらで萬人渴仰より起れる衷心の尊稱たるは云ふまでもなし。天平八年天竺の婆羅門僧正來朝し菩薩と相見ゆるや菩薩卒然として謳つて曰く

大僧正

婆羅門僧正との問答

靈山の釋迦の御前に契りてし
眞如くちせず相見つるかな

僧正卽坐に答ふらく

伽毘羅會に共に契りし甲斐ありて
文殊の御顏今日見つるかな。

文殊の化身

菩薩を以て文殊の化身なりてふ信仰はこれより一般に懷かるゝに至りしと云ふ。事實か假託かは知らねども菩薩を以て文殊の應化と信ぜらるゝまでに仰がれたりしは疑ふべからず。當時佛敎の盛事前古に比なく、僧侶に對する尊敬その極に達したれば智識と稱せらるゝ名僧も自然に名聞の欲を生じ勢利を爭ひ俗樂に耽けるもの多かりしが菩薩は獨り高く塵界の外に出で黑きに交りて黑きに染まず、名利の巷に立ちて愈高潔なりき。大僧正の位階も、大菩薩の尊號も賜はりたれば辭しもせざれど、かゝる事には心とめたる氣色だも無く、ひ

社會的事業

たすら濟世利民に志ざし、座席暖まる暇なく、六十餘州を遍歴して法を說き、餘力あれば橋を架し路を修め、渠溝を穿ち堤塘を築き、藥草をさがし溫泉の效を敎ふる等、その社會的事業のみを以てするも優に古今を獨歩すべし。山崎、木津川、攝津難波の橋をはじめ架橋七所、狭山池、茨城池、古林溝、久米田池溝等、池溝を開く二十二個所、堤樋を作る三ヶ所、港を築く二ヶ所、堀を起す四ヶ所、布施屋を作りて鰥寡孤獨を救ふもの九ヶ所、或は猪名の荒野を開拓して百五十町の水田となし、有馬の溫泉の效を敎へて諸病を救ふ等、以上は五畿内の史跡に載する著きものゝみ。若し人口に膾炙せる全國内の遺蹟を擧げなば殆んど數ふるに遑なかるべし。人智開けず交通不便なる千百餘年の昔時にありて斯くまで社會的事業に貢獻せるもの其の直接民を利せるは云ふまでも無く、間接に與へたる精神上の敎訓蓋し計るべからざるものありしなるべし。菩薩の菩薩として仰がるるもの偶然にあらざるを知るべきなり。斯くて天平二十一年二月二日菅原寺の東南院に於て數多の弟子の悲嘆を慰めながら八十二の壽を示して圓寂す。離世として傳はれるもの二つあり。

かりそめの宿かる我ぞ今更に物な思ひそ佛とをなれ　（古事談）

法の月久しくもがなと思へどもさ夜ふけぬらし光かくして　（新勅選集）

第五節　戒壇建立、鑑眞和尚

戒壇建立の勅

孝謙天皇の天平勝寶五年十二月唐の高僧鑑眞大和尚來朝し翌年二月上奏して難波に至る。婆羅門僧正、道璿律師等之を歡迎して措かず、乃ち天皇に拜謁して齎す所の佛舍利三千粒、菩提子三斗幷びに天台の三大部をはじめ數多の經論佛像等を獻る。天皇甚だ悅ばせ給ひやがて東大寺に戒壇建立の勅を下されたり。

戒壇の義

大德和上遠く滄波を渉り來り此國に投ず、誠に朕が意に副ふ。喜慰喩ふる無し。朕此の東大寺を造り十餘年を經、戒壇を立て受戒の律を傳へんと欲す。此心を有てより日夜忘れず。今大德遠く來りて戒を傳ふ、朕が心に冥契す。自今以後授戒傳律一に大和上に任せん。

と、和尚に傳燈大師位を授け、同年四月東大寺に戒壇を建てゝ初めて授戒會を行はせ給ふ。戒壇とは佛道に歸依するものゝ身口意三業にわたりて修すべき戒律を誓ふ受戒の壇なり。授戒の際には三師七證とて戒和尚、敎授師、羯磨師の三人の敎授師と七人の證明者とを要す。其の儀式頗る嚴重にして此の戒を受けざる者は眞正の佛徒たるを得ざりしなり。次の帝淳仁天皇の天平寶字五年、筑前の觀世音寺及び下野の藥師寺に戒壇を置き東大寺と併せて本朝の三戒壇と稱したり。而して授戒の權利は奈良にありき。

本朝の三戒壇

聖德太子と戒律

佛敎の傳來と共に佛徒の守るべき戒律の伴ひ來れるは勿論なるべけれども我國佛敎の開祖たる聖德太子の宣揚し給へるは純然たる大乘佛敎にして形式に捉はれし小乘の戒律の如きは餘り重要視せざりしなり。俗衣を着け、妃を携へて國家の經營、國民の救濟に御身を捧げられたるもの、太子の御理想を顯はせりと申すべし。佛敎の眞諦を身に帶し、一切の善行を成佛の因と信じて修行する處に我等が渴仰する理想の生命は存するなり。形式煩瑣にわたる二百戒五百戒等云ふ小乘の戒律を守り涅槃の消極的方面のみを願ふが如きは、物欲に耽りて病膏肓に入れる無慚の衆生を救はんため大鐵槌を下して一切の我執貪欲を捨てよと敎へられたる釋尊當初の說法その儘を墨守せるものなり。卽ち本能的なる我等が欲情を抑へんとするには之に打勝つべき不動の精神を養はんため嚴肅なる形式的戒律の必要生じ來るなり。されど斯かる修行は一の方便のみ。其の精神を誤り解して枝葉の形式のみを墨守するに於ては獨善主義、非國家的となるを免れず。小乘佛敎の盛んなるは非國家的なり

小乘戒の精神

小乘佛敎は非國家的なり

二乘の獨善主義

大乘佛教の精粹は日本國のみに存す

大乘佛教は戒行を度外するものにあらず

なりし國家の何れも滅亡に歸したるは故ありと云ふ可し。さればこそ大乘佛教を說かるゝに及び戒律修行のみに腐心する獨善主義者を二乘と貶しいたく之を斥けられたるなれ。古來我國を稱して一向に大乘流布の國土と豫言せられしもの識をなし開山の太子、先づ御身を以て大乘の精神を發揮して後來の範を示し給へり。釋尊御出世後茫々三千載、大乘佛教の精粹を發揮し來れるもの今日世界に唯日本國のみなるを思ふ時その因緣の偶然ならざるを感ぜずんばあらざるなり。

既に我國は大乘の種なり。されど大乘とは徒らに高きを論じ戒行を度外視するの謂ひにあらず。身行修らずして心のみ正しきを得べからず、唯消極的、止惡的、獨善的なる戒律を死守して能事了れりとするものを貶するのみ。形式になづんで精神を忘るゝものを退くるのみ。もしそれ心至らず、戒行修らず、徒らに社會の崇敬を受けて私欲を擅にする似非僧侶の跋扈するに至らば其弊害の及ぶ所鮮少にあらざるべし。我國史に佛教の汚點を印したるものあるは一にかゝりて是等破戒の僧侶にありき。佛教の盛事を稱する奈良時代に反りて俗惡の僧侶の輩出したるは社會半面の眞理として、人情の弱點を知るものゝ怪しむに足らざる所なり。かゝる時に鑑眞和尚の如き大德の渡來を機とし佛教の總府たりし東大寺に戒壇を設け、嚴肅なる戒律の下に一般の僧侶を統一せんとしたるもの當然の事と云ふ可し。天武天皇の時道光律師を支那に遣して南山律を學ばしめ、聖武天皇の時唐の道璿法師來朝し奈良の大安寺にありて律部を講じたりしと雖も、古來我國律宗の第一祖としては鑑眞和尚を稱するなり。

我國律宗の祖

鑑眞和尚

鑑眞和尚は唐の揚州江陽縣の人、齊の淳于氏の後裔なり。唐の中宗皇帝の嗣聖五年に生れ十四歲の時出家し、大禪寺の智滿に就きて學び後道岸律師に從ひて菩薩戒を受け、景龍二年長安に入り弘景律師に謁し實際寺に於て具足戒を受く、時に歲二十一なり。それより長安、洛陽二京に遊びて三藏の教法を學び江淮の間を遊歷して戒律を說き、二十六歲にして法勵の疏を講じ三十一歲にして南山の疏を講じ四十歲にして羯磨疏を講ず。斯の如く四方に法を說きて寺院を建つる八十餘、一切經を寫す三部一萬一千卷、人を度する四萬人、門下の隆盛前古無比と稱せられたり。偶々我國の榮叡、普照の二師、律を求めて唐に入り和尚の盛德を聞きて之を揚州の大明寺に訪ひ我國情を述べて其の渡來を乞ふ。和尚志を決して我に渡らんと企てしも或は讒者の妨ぐるあり、或は風浪の遮るあり、五度渡海を試みて五度果さず、加ふるに老齡苦艱を嘗めて眼疾に罹り明を失ふ。されど信念に礙りたる心は鐵石の如し、終に我天平勝寶五年遣唐大使藤原清河等に伴はれて多年の宿志を貫徹せり、時に春秋六十六歲。求むる所名譽にあらず、金錢にあらず、一意佛陀の理想に向つて驀進するのみ。宗教的信念の尊ときは實に玆にあり。和尚の我國より受けたる待遇は至れり盡せりと云ふべきものありしも和尚は唯眞佛教の廣布に勗むる外餘念なく、大僧正の位階を贈られたるも辭して受けず、天平寶字七年五月六日、七十七歲を一期として結跏趺座のまゝ西向して遷化せり。

六十六歲の失明僧萬壽九排し日本に渡る

破戒僧輩出

玄肪

第六節　奈良佛教頽廢の兆

良辨僧正、行基菩薩さては鑒眞大和尚の如き高僧のみ僧籍にありたらんには佛法は彌榮えに榮え聖武天皇の御理想も名實相伴ひて實顯したりけんを、時未だ至らず、形式漸やく完備してはやくも破戒の俗僧輩出し、佛法の隆盛は國家に餘弊を與へたりてふ史實を後世に殘すに至れり。而して奈良時代墮落僧侶の標本として傳へらるゝは玄肪、道鏡の二人なり。玄肪俗姓は阿刀氏、義淵僧正の高足として知らる。元正天皇の御代勅

を奉じて入唐し智周法師に謁して法相を學び研鑽二十年、唐帝の殊遇を受け三品に準して紫袈裟を賜はりしと云へば其の才智拔群なりしこと察するに難からず。天平七年菩提仙那、吉備眞備等と共に歸朝し傳來の經論章疏五千餘卷、並びに佛像等を尙書省に献ず。爾來天皇、皇后の御歸依特に厚く、終に内道場に入りて皇后、皇太后をはじめかしこきわたりの人々に法を說くべき身となり、かくて玄肪の權勢隆々として素行漸やく批難を招き、藤原氏との抗抗おこりて廣嗣の反となり、天平十八年六月筑紫觀音寺落成式に臨み、突然奇怪の死狀を呈して終りを告ぐ。當時の眞相を忠實に調査せる人々は何れも玄肪を以て後世史家の傳ふるが如き破戒無慚のものにあらず、學識一世に高き高僧なりしも政治上の權力を得るに及び藤原氏の反感を買ひてあらぬ寃罪を受け、後世佛敎嫌の儒者一派の曲筆によりて誇大せる罪狀を傳へられたるものとなす。されど僧侶は飽くまでも佛陀の精神を肝に銘して名利の外に立ち人を導かざるべからず、其位置愈高くして其行益々尊とからざるべからず。玄肪の如き縱令後世傳ふるまゝの事實は無かりしとするも其の權勢を爭ひ、德行に缺けたる處ありしは疑ふべからざるものあり、博學の人と云はんは可なり、高僧とは云ふべからず。僧侶の僧侶として尊とぶべきは道に同化して名利の巷を脫し、迷へる衆生を濟度せんとする高く潔き精神にあり。僧侶より此の精神を差引かば何等の尊とぶべき所以を知らず。俗人の俗欲に耽くるは慾れむべし、法を說くものゝ聲利に趨るは道を汚がすなり、法をなみするなり、斷じて免るすべからず。嗚呼行基、玄肪共にこれ龍門の高足、而して一は菩薩として幾億萬の渴仰を博し、一は破戒の俗僧として千載に醜名を遺す、後世道に立ちさはるもの鑑みざるべからざるなり。更に道鏡の如きに至りては史籍に誇大の傳へありとするも至尊の寵をたのんで大臣禪師法王となり、一族に私して悉く高位に上せ、更に非望を覬覦せんとする等、佛法

を破却する獅子身中の虫と云はずして何とか評すべき。されど一面より考ふる時は國民一般の精神未だ熟せざるに理想の實顯を形式の上に求め、權勢名利に憧がるゝ凡俗の心を其儘にして早くも政敎一致を計りたる失政の產物とも見るを得べきか。

第七節　奈良時代信者の消息

斯くて奈良の時代は政敎一致の早計より國家の上に建設せる佛敎に餘弊を生じたれど信者の心を照らせる佛陀の靈光は淸く麗はしき法悅の樂しみを彼等に與へたり。中將姬の物語り、法均尼廣虫の生活の如き其の代表として見るを得可し。

一、中將姬

は鎌足の孫權佩右大臣藤原豐成卿の息女なり。容貌才智世に勝れてありしが、早く母を失ひ繼母に仕へて孝養怠らざりしも、生さぬ中なるまゝしき母の嫉みは日に增さり行き、終にあらぬ濡れ衣着せられて奥山深く捨てらるゝ身とはなりにけり。母はなほ執念くも川熊嘉藤太と呼べる野武士を語らひ密かに姬を亡きものにせんと計りぬ。利欲に目くれたる荒夷の情なくもいたいけ盛りの姬を紀伊國なる雲雀山の谷深く連れ行きて失はんとせり。姬は靜かに藤太に向ひて曰ふ、母上の斯くまで妾を惡ませ給ふも然しながら因緣のよる所ならん、今更怨むべきにあらず、唯我れ每日六卷の淨土經を讀めるを今日未だ果さねば其の終るを待ちて首打たれよと、草葉を結んで手水となし、一卷は父上の現世安樂を祈り、一卷は亡母菩提のため、一卷は自らの罪障消滅のためにと聲朗かに讀誦し了り、西に向ひて合掌し、さらばとばかり觀念の眼を閉ざして最後を

待つ。暫くたてど劍を加へぬに、などさは手間どるぞと後を顧みれば嘉藤太、劍を地に拋捨てゝ伏居たり。不覺の者かな、我れに物思ひを增さしむるな、疾く切れよと責め給へば、今はなか〳〵討奉らん心も侍らず、斯かる尊とき御心包ませ給ふ御身の何れへか刃を觸るべき。討奉りて賞祿を受くればとて百年の齡も保ち難し、後の世の報こそ實に恐ろしく候へ。願はくは御命を助け參らせ、我も此の山に隱れてかしづきまつり、身の罪業を亡ぼさんと心定めて候ふ。さりながら御繼母をたばかる手段にもと、上の衣を申請け、已が股突裂きて其の血を濺ぎ、しばし待たせ給へと姫を輿の中に忍ばせて急ぎ立歸り繼母へは姫を打ちたる旨を告げ、密かに已の妻召具して姫のもとに馳せ參り、枯木を集めて柱とし、茅を刈りて屋を覆ひ、玆に假りの住居を造りて姫を住まはせ、それより妻は澤邊に芹を摘み、夫は巷に出働き眞心込めて奉養する事三歲の久しきに及びぬ。藤太は病の篤にみまかりしも妻女の仕へは一層の厚きを加へぬ。父豐成も一旦の怒りに姫を勘當したれど、さすが恩愛の情に堪へ難く、失はれつと聞きてよりは愁歎よその見る目も哀れなりき。一日鷲をはらさんと雲雀山のわたりに遊獵し、圖らずも姫に再會し嘉藤太夫妻の厚情を悅び共に携へ歸りて人々に披露しければ繼母も良心の苛責に堪へずして身をかくしたり。斯くて姫も二八の春を迎へ金谷千樹の花も色なく、瑤池玉樓の月も恥ぢらふ姿に加へて心ばへさへ優なれば頓て后妃に立たせ給はんとの御沙汰とり〳〵なりしも姫は我命の助かれるもの偏に佛陀の力なればと愈脫俗の心を强め光仁天皇の寶龜元年大和の當麻寺に入り善心尼と號し後、妙法尼と稱へたり。その信心の功德感應して彌陀如來、觀音菩薩の來顯となり五色の纖絲もて極樂圖の浮べる曼陀羅を姫に織らしめたりてふ傳說あり。今も當麻寺に傳はりて本邦極樂圖の初めと稱せらる。

極樂圖の初め

二、廣　蟲

捨子を養育する八十三人

は和氣清麿の姉にして孝謙天皇の御信任厚く、天皇御落飾の折廣蟲も尼となり法均尼と號したり。人を救ひ養ふを以て無上の樂しみとなし、或時は惠美押勝の亂に連座して斬に當れるもの數百人を天皇に申請ひて死一等を減ぜしめ、或時は飢饉のため民間子を捨つるもの多かりしを悉く拾ひて我が養子となし其の數八十三を數ふるに至りしと云ふ。弟清麿と財を頒たず、終身共にありて爭ひたる事なく其の友愛の情に富みたる、時人を感服せしめたり。清麿の忠節も姉の感化に負ふ所多かりしと云ふ。清麿の大隅に流さるゝや法均亦備後に遷され光仁天皇の御代に至り清麿と共に召歸されたり。

中將姫は妙齡不遇の間にありて未來欣求の信仰に生き、廣蟲は佛陀の悲心を生命とし法悅の樂しみに生涯を送れり。時代は少しく移りたれど小野峰守が續命院を太宰府に建て、橘永範が救急院を相摸に創め、藤原良相が崇親院延命院を興して一族の貧者病人を救ひたる等何れも當時の前後に於ける佛道歸依者が信仰生活の一端をかたるものなりき。

光仁天皇立ちまして非望を覬覦せる道鏡は下野藥師寺の別當として貶せられたり。前代に於ける弊政は凡て改革せられたり。されど前代までの信佛の念が此時代に衰へたりと思はゞ誤れり。道鏡の不臣は信佛の罪にあらずして不信佛の罪なり。名を佛者に假れる俗物が法衣にかくれて罪惡を犯したりとて佛法を非議すべき寸分の理由も無し。光仁天皇の寶龜六年に下し給へる勅を拜しなば佛教に對する御信念の變らせ給はざりしを知るべし。

十月十三日は是れ朕が生日なり。此の辰に至る每に宜しく諸事の僧尼をして轉經行道せしむ可し。海內諸

天長節

國並に宜しく屠を斷つべし。内外百官に哺宴を賜ふこと一日、仍りて此日を名づけて天長節となす。

されど佛教界の漸次頽廢し來れるは翌ふべからざる事實なりき。朝廷の御歸依甚だ篤かりしと、一般の信仰に伴ふ迷信とを利用して奸智ある僧徒跋扈し、其の與へられたる權力は僧閥と稱する牢乎たる地盤を作り、戒律修行の如きも佛とならん爲の所願にはあらで、名を博し、位置を得んための方便となり、腐敗せる空氣漸やく人心を倦ましめ來れるもの、これを奈良佛教の終焉となす。

第五章　平安朝時代

第一節　序說

佛教の刷振

光仁天皇崩御まし〳〵て皇子山部親王位に卽かせ給ふ。第五十代桓武天皇是なり。山河襟帶自然に域をなせる平安の都に空前の大規模を以て宮城を營まれ沈滯せる奈良の政治の改革と共に腐敗し來れる佛教の振刷を計らせ給ふ。延曆二年十二月、勅して諸寺の利潤を貪り、兼併を事とするを禁じ同四年五月又勅して出家の者の其の本分に負き法旨にもどり教律を愼しまず、閭巷に出入して佛驗と誣稱し愚民を迷はすものを嚴禁し、所司に令して背法の僧を捉へ甚しきものをば國外に擯出せしめ、更に延曆十四年僧綱をして得度の法を嚴にし、猥りに出家するものを制し、各國分寺の僧を陶汰する等前後數回にわたりて僧尼を戒飾し給へり。

得度の嚴令

僧尼戒飾の詔

其の詔勅の一に宣はく

雙林西に變じ三乘東に流る、明は炬燈に譬ふべく慈は舟楫に同じ。是を以て道を弘め戒を持つ、事眞僧に資り世を濟ひ人を化す、貴きこと高僧に在り。而して年分度者例して幼童を取り頗る二經の音に習ふも未だ三乘の趣を聞せず。苟くも課役を避け纔かに緇徒を忝うし、還りて戒法を棄て頗る學業を廢す。爾れば乃ち形は道に入るに似て、行は家に在るに同じ。鄭璞嫌ひを成し、齊竿相濫す、言念途に違ふ、寔に轍を改むべし。自今已後、年分の度者は宜しく年三十五已上にして操履已に定まり智行崇む可く兼ねて正音を習ひ僧となるに堪へたる者を擇びて之に充つべし。毎歲十二月已前に僧綱所司、有業の者を擇び相對して

習ふ所の經論を簡試し、總べて大義十條を試み五已上に通ずる者を取り、狀を具して官に申せ。期に至りて度せしめよ。其の受戒の日には更に審試を加へ八已上に通ぜば戒を受くるを得せしめよ。又沙門の行は戒律を護持するにあり。苟くも斯の道に乖かば豈佛子と曰はんや。しかも今や勝業を崇ばず、或は生産を事とし、閭里に周旋し、編戸に異なる無く、衆庶之を以て輕慢し、彙敎此れに由りて凌替す。只眞淨を黷亂するのみならず、固とに亦國典に違犯す。自今已後、此の如き輩は寺に住し並びに供養を充つる事を得ざらしめよ、凡そ齋會に法筵に關せしむる勿らしめよ。三綱知りて糾さゞれば與に同罪とす、自餘の禁、宜しく令の條に依るべし。若し過を改め修行する者あらば特に還り住する事を許せ、夫の法に住する侶をして彌精進の行を篤うし、道を厭ふの徒をして慚愧の意を起さしめよ。

名僧輩出

嚴として秋霜烈日の感あるもの聖旨を忖度するに餘りあり。腐敗せる空氣を淨めんとするには新鮮の風を送らざるべからず。天皇は一面に僧侶の非違を正させ給ふと同時に他面に於て之を救濟すべき法界の偉人を求めさせ給へり。上に至誠を以て求むる人あれば下に必らず應ずる人あり。曠世の偉僧傳敎太師最澄法師は奮然として起てり、法華一乘の旗幟を翻して南都の僧侶と戰ひ王城鎭護の大寺を建てゝ終に大乘圓頓の戒壇を勅許せられ、博學高識千古を空しうする名僧弘法太師空海上人亦眞言祕密の宗風を傳へ、兩部神道習合說を唱へて神佛の融和を完成し、久しく沈滯せる敎界の惰氣茲に一掃せられて活氣橫溢せる一新時代を畫成せり。

第二節　傳敎大師

大師は俗姓三津氏、稱德天皇の神護慶雲元年八月十八日近江の滋賀に生る。其先は後漢の孝獻帝の苗裔、

日枝山嶺の修養

太師の大願

三大部の活題

大師の覺悟

應神天皇の朝に歸化せるものなりと云ふ。父の百枝は學和漢に涉り、深く佛法に歸依して常に讀經念誦し住宅を寺となして住みたり。年たけて子無きを憂ひ日枝山麓の神に祈りて大師を生みたりと傳ふ。大師十二歲にして國師大安寺の行表和尙に隨つて出家し唯識論等を學び、十五歲にして國分寺の僧闕に補せられ十八歲にして具足戒を受け、延曆四年七月十九歲にして日枝の山嶺に登り閑寂の地を求めて專心修養を計られたり。胸に潛める眞如の光りは淸澄明媚なる靈山の風光と相照らしてさながら寂光法界の人とやなりにけん、五百羅漢の修行を見、天地經緯の靈童と談られたり。乃ち大願を發して曰く、悠々たる三界、純ら苦にして安きこと無し。擾々たる四生唯だ患ひて樂しまず。牟尼の日久しく隱れて慈尊の月未だ照らさず。三災の危に近づき五濁の深きに沈む。伏して願はくは解脫の味ひ獨飮まず、安樂の果獨證せず、法界の衆生と同じく妙覺に登らん、法界の衆生と同じく妙味を服せん。と、夫れより法華、金光明、般若等の諸大乘を讀誦し、進んで起信論疏、華嚴五敎章等の書を繙かるゝに何れも天台智者大師の敎判をもて指南とせり。思へらく必らず天台の敎釋あらんと、乃ち南都に出でゝ之を求めたり。鑑眞和尙の將來せる天台の三大部は大師により玄に靈動を起し初めたり。釋尊の本懷は法華經となりて傳はり、法華經は智者大師の內觀によりて三大部の活釋となり、戒律堅固の鑑眞和尙によりて大乘有緣の日本に渡り、非儔の大德傳敎大師の心識にやどりて佛敎革新の中堅となる。宿因の催すところ法界微妙の働きあるを見るべきなり。大師の志は玄に定まり、天台の宗義を宣揚して日本一州を一佛乘に統一せんとし日頃精進苦行の靈地を七重結界して佛堂を建立し、根本中堂を造りて一乘止觀院と名づけ、一山の寺號を比江山寺と號し、永く王城の守護たらしむべく帝都の鬼門に當りて開宗を宣したり。大師この時至心を籠めて佛天の加護を祈るらく

鎮護國家の道場

阿耨多羅三藐三菩提の佛達、我たつ杣に冥加あらせ給へ。

明らけく後の佛の御代までも光傳へよ法の燈。

至誠天聞に通じ延曆十三年平安の奠都と共に勅命によりて鎮護國家の道場となり間も無く延曆寺の勅額を賜はる、寺號に年號を用ふる之を嚆矢となす。山中樹木生ひ茂り照る日の常に枝の上に懸ればとて日枝の山と呼びけるを叡慮に比する心もて比叡山と改めたりとか。延曆十七年法華十講の法會を修し七大寺の碩德十人を請じて講匠となせり。同廿一年正月國子祭酒和氣弘世の請により高尾山寺に出でゝ天台の法門を講じ同時に法華會を行へり。天皇叡慮のあまり和氣朝臣入鹿を勅使として詔を下されたり。

比叡山

法華會

昔は給孤長者、能仁(釋尊)を祇陀の苑に降し、常啼菩薩は般若を尋香の城に聞く、是を以て和信士二六の龍象を延いて一會の法莚を設くる所以。慧日光を增す、禪派流を澄し一乘の玄猷始めて區域を開き三諦の微旨聿に人天に被る像季の傳燈斯に軌躅を創む、法莚を隨喜し功德を稱嘆す。

還學生の勅命

大師の謝表

大師を得たる天皇の御喜びは申すも畏こし、斯かる英明なる天皇の知遇を辱うして法を弘むる大師の感想や如何なりけん。同年九月入唐求法の勅は下れり。

最澄闍梨久しく東山に居り既に法華の奥旨を探る、早く西海を踰え天台の教文を宣傳せよ、唯其の往還期を過すを得ず。

時に大師三十八歳、身は内供奉の重任にありき。斯の如き位置にある人にして留學を命ぜられたるは從來未だ無き所、しかも期間を一年と定めて永く彼土に止まるを許されざる所謂還學生と稱するものは前後を通じて大師唯一人のみ。以て如何に重きを當代に置かれしかを見るべし。大師謝表を奉りて曰く

沙門最澄言す、伏して勅旨を奉ず、求法の使に差し興法の道に任ぜらる。最澄非分の詔を荷うて措かん所を知る無し。但身山中に隱れて進退を知らず、才鉛刀よりも拙にして未だ菽麥を辨へず。然りと雖も尊香の誠を追うて雪嶺の信を仰ぎ微劣の心を勵まして天朝の命に答へん。悚荷の至りに任へず謹んで少納言近衛將監從五位下太朝臣入鹿に附して奉表陳謝以聞す。

智者大師の豫言

更に求法の譯語を請ふ。

沙門最澄言す、最澄聞く、秦國羅什は流沙を度りて法を求め、唐朝の玄奘は葱嶺を踰えて以て師を尋ぬ。並びに皆年數を限らず、業を得るを期となせり。是を以て方言を西域に習ひ法藏を東土に傳ふ。伏して此度の求法を計れば往還限りあり、所求の法門卷數百に逾ゆ。仍りて須く諸州を歷問し其の人に遇ふ事を得るも最澄未だ漢音に習はず、亦譯語に闇し、忽ち異俗に對ひ意緒を述べ難けん。四船の通事は使に隨つて經營せんも相別れて道を訪はんに遂に得べからず。竊かに沙彌義眞を見るに少壯穎悟にして頗る經論に涉り、早く漢音を習ひ粗ほ唐語を知る。天恩義眞を差して求法譯語と爲さば當に是れ行に之を賴むのみならず兼ねて彼をして諸の制可を學ばしむべし。輕々しく威嚴を犯し伏して戰慄を增す、謹言。

乃ち義眞和尚を同伴するの勅許を得、越えて二十三年七月遣唐使菅清公につれて唐土に渡る。斯くて大師は上陸後直ちに天台山修禪寺の座主道邃和尚を訪ひて來意を告げ教を乞ふ。和尚一見して其の法器を知り南岳大師中國に示滅して東土に現生したるかと歎賞し師資相承の底を盡して之を傳附し圓頓菩薩の三聚淨戒を授けたり。夫れより佛隴寺の行滿和尚に謁したる時和尚告げて曰く、昔し智者大師豫言して我滅後二百餘年にして妙法東國に傳はらんと云ひ遺されしが果して違はざりけりと、台教の祕書之を授けて遺す所なし。大師

大師歸朝上表

は更に越州の龍興寺に於て順曉阿闍梨より密教の附屬を受け、唐興縣の禪然禪師に參じて達磨流の禪要を傳はり延曆二十四年五月期滿ちて歸朝の途に就けり。同八月參內して表を上る。

沙門最澄言す、最澄聞く六父顯を探るも猶生滅の場に局る、百物吾を正すも未だ眞如の境に涉らず、豈隨他の權教、三乘の機門を開き、隨自の實教一乘を道場に示すに如んや。然らば則圓教は說き難し、其義を演るものは天台なり。妙法は傳入難し、其道を暢るものは聖帝なり。伏して惟んみるに陛下震を出でて圖を承け、極に登り運に膺り給ふ。東夷化に嚮ひ德を先年に歸し、北蕃來朝して正を每歲に賀す。是に於て高機の暇、一乘惟懷ふ。冀くは圓宗を得、垂れて大訓と爲さん　斯に由りて妙圓の極教聖代に應じて流傳し祕密の眞宗皇緣に感じて格り止まる。最澄使を奉じて法を求め、遠く靈蹤を台嶺越嶠に躡み、躬ら教迹を寫し、獲る所の經論疏記二百三十餘部五百卷、又金字の法華、金剛、般若等の經、智者大師の禪鎭、白角の如意等表に隨つて奉進す、誠懇戰慄の至りに堪へず、表を奉りて以聞す。

天皇宗の興隆

天皇叡感まし〳〵天台の典籍を天下に流布すべき由を勅せられ、又和氣弘世に勅し禁中の上紙もて將來せる經論七通りを淨寫せしめ南都の七大寺に下し給ふ。更に勅して道證、守邃、勤操、慈藏、慈覺等の碩德に天台の教典を學ばしむ。ついで和氣弘世をして眞言祕教未だ此方に傳はらざりしを最澄阿闍梨幸ひに此法を得たり、立て丶國師と爲す、との詔を下され、同年九月一日勅令を以て淸瀧の峰、高雄山に道場を建て都會の大壇を築きて灌頂三摩耶を執り行はせ給ふ。これ本朝に於ける灌頂のはじめなり。同月十六日禁闕に壇を建て最澄法師に勅して毘盧遮那の法を修せしめ給ふ。殿上に於て御修法の行はる丶事これ亦初めなりけり。其他或は金光明會を施行し、法華三昧堂を建て、或は法華經二千部の書寫をなし、各一基の寶塔を建て丶之

本邦灌頂の初め

を安置し、日本國中六所の塔婆を建立し、或は上表して天台宗のみならず、華嚴、律、成實等の衰へたる宗派に對して年分度者を乞ふ等その生涯に於ける功績を擧げなば書き盡くすべくもあらず。而して大師が畢生の事業として心血を濺がれたるものは實に

大師の人格

大乘圓頓戒の戒壇

を叡山に建立せんとするにありき。大師は戒壇建立のためには奮迅の勢を以て奈良の僧徒と戰ひたり。其の雄姿凜々たる佛を偲びて覇氣滿々たる快僧と評する人あり。禪、密かね學びて天台に着色したる蹤を見、油斷ならざる野心家と論ずる人あり。されどそは信仰の人を知らざる皮相の見解のみ。大師は決して亂世の英雄を以て目すべき人にあらず、至誠一貫の宗教家なり。忠君愛國の權化なり。大師にして若し覇氣に滿ちたる英雄的僧侶と云ふに止らしめばそは似非宗教家のみ。無暗に活動のみを有難がる現代式の人士には歡迎せらるべけれど徹底せる信念の下に生きんとする人の爲には紹介すべき價値だに認むる能はざるなり。吾人の見たる大師は實に佛教の眞髓に徹底しその信念の燃えて烈々たる活動となりたる人なり。桓武天皇の知遇に感激し、國家擁護の眞佛教を興起して聖旨に答へまつらんとしたる人なり。吾人が衷心敬意を表するもの唯此の點にあり。而して大師の日本に廣められたるは支那その儘の天台宗にはあらで既に述べたる如く當時支那にて盛んなりし禪、密、菩薩戒を併せ學び四宗を調和して天台に歸納せられたるものなり。其の統一したる宗教的生命を勅許によりてなれる神聖なる戒壇の下に於て興へんと志されたる所に大師の活動は生じたるなり。

四宗を調和して天臺に歸せしむ

そも〳〵戒律に二種類あり。小乘の戒律と大乘の戒律と是なり。大乘の戒律を更に權門共戒、實門不共戒卽ち大乘圓頓戒の二つに別つ。小乘戒とは解脫を專らとするものにして五戒、十戒、二百五十戒等稱し、罪

戒律の二種類
大乘戒の二種類

鑑眞和尚の齎せるは大乘權門戒なり實門戒不共

悪を犯さゞらんとする消極的戒律なること既に述べたり。大乘權門共戒はその條則の小乘戒と異ならずとするも精神に於て多大の相違あり。即ち自身を慎しむと同時に他人の利益をはかるなり。小乘戒に於ては攝律儀戒と稱する止悪の方面と攝善法戒と稱する作善の方面とを修すれども其の目的は主として自己の解脱にあり。大乘權門共戒にありては更に進んで攝衆生戒と稱する利他の方　を修するなり。即ち一切衆生と共に成佛せんとする大菩提心の上に保つ所の戒律なり。故に又稱して三聚淨の菩薩戒と云ふ。鑑眞和尚の齎せるは此の大乘權門の戒律なりき。實門不共戒とは梵網經に說かるゝ戒律を守るものにて已れを忘れて利他を計るなり。飲酒戒を守るは自利なり。人に酒を飲ませぬ樣勗むるが利他なり。梵網經にては人に酒飲ましたるものは五百生の間手無きものに生るべしと戒しめられたり。人に酒飲ますだに斯く罪深くば已れの飲みたらんには其罪更に深かるべく思はるれど、左にあらず、已れの飲酒よりも人に飲酒を勸むるが罪深しとするものは梵網經の戒意なり。即ち利他の方面に徹底して不惜身命、但愛無上道の境に達するなり。但し梵網經に說かれたる十重禁戒、四十八輕戒の條々を其の盡墨守せんは形式に捉はれ反りて大乘の精神に負くものあり。例へば輕戒第二十に於て六道の衆生は皆これ我が前世の父母なれば是を殺すは父母を殺すなりと戒しめたり。こは其の悲心の一切生類に及びたる極致を道破せるものにて大乘佛教の精神茲にあり。されど此の戒この儘を墨守すとせば如何。德川綱吉が殺生の禁を天下に令して國民の歎きとなりしは有名なる史實なり。茲に於て法華經の精神を以て梵網經を釋するなり。法華經に曰く治生産業皆是實相と、又曰く此經を善く持つものは持戒者なりと。其の心は人間生活に必要なる事業を營むは皆是れ眞實のすがたなれば人類一般の爲めには形式の戒律を破るも猶ほ持戒者たるを得るとなり。法華經を持つとは法華經の精神を身に帶する事なり。法

法華經と梵網經

大乘圓頓戒と大師の理想

華經の精神とは小我に執する心を減して大我に融するなり。身命を惜まずして道の爲に殉する心なり。梵網經の條々をば法華經の精神もて活釋し、初めて佛意に叶ふべきなり。聖德太子の御理想も全く茲に存したりしと思はる。傳敎大師は實に此の精神を一般に普及せしめんため勅許によりて大乘圓頓戒を比叡山に設け、智德その機に叶へるものを受戒せしめ更に十二年間の籠山修業を積ましめ、斯くて叡へ上げたる駿髦を國師となして各國分寺に派遣し衆生の靈を救濟すると同時に國民道德を向上せしめ以て盡忠奉公の誠をいたさんと計畫せられたるなり。されば大師の此の擧は全く大師の生命とも云ふべく、渾身の力を込めて努められたりき。些々たる宗派根性に捕はれたるにあらざることは他宗の衰滅を歎きて其の年分度者を乞はれたるにても知らるべく、後進の空海上人に禮を厚くして密部の敎へを受けられたるにても知らるべきなり。大丈夫の心事は常に皓々として日月の如し、況んや千古の高僧傳敎大師に於てをや。

大師の奮闘

大師の戒壇建立を奏上せる時は桓武天皇既に神去りまして嵯峨天皇の弘仁九年なりき。天皇の大師に對する御信任は桓武天皇にも讓らせ給はざりき。しかも南都の僧徒の妨げありて行きなやみとなりたり。大師は顯戒論三卷を作りて彼等の異議を縱橫に破折し一語の應ふべき餘地無からしめたれど終に其の目的を達する能はざりき。以て南都の僧侶の如何に勢力を振ひありしかを知るべきなり。弘仁十三年二月宸書を以て傳燈大法師位を賜はり同六月四日病のため比叡山中道院に於て圓寂す、春秋五十六。同月十一日初七日の日に當り右大臣藤原冬嗣をして圓頓戒壇建立勅許の詔を叡山に下されたり、叡慮を動かしまつれる程を見るべし。滅後二十四年淸和天皇の貞觀八年七月十七日傳敎大師の號を勅賜せられたり、之を本朝に於ける大師號のはじめとす。

戒壇建立の勅許

本朝大師號の鼻祖

第三節　弘法大師

傳教太師の生誕より七年遲れて光仁天皇の寶龜五年六月十五日讃岐國屏風浦に於て弘法大師の生誕あり。父は佐伯田公、母は阿刀氏、幼名を眞魚と名づけたれど奇瑞の事多かりしより貴物と呼ばれたり。超倫の資風に卿黨の稱する處となり十二歲にして外舅阿刀宿禰大足卿に從ひ論語孝經等の文を學び十五歲の時上京して大學に入り直講味酒淨成に就きて毛詩、左傳、尙書をはじめ博く經史を修め岡田博士に從ひて再び左氏春秋を學び、又勤操律師に就きて佛學を學びたり。太師自ら「雪螢を猶怠るに抗しき繩錐の勤めざるに怒る」と云はれし如く精を勵まして天性の玉質を琢磨したれば學業の進歩亦格別にして孔老の學早くも其の要を捉へ、佛陀の教への更に幽玄なるに服し十八歲にして三教指歸の述作をなし孔老釋の三教何れも世を利し人を救ふに於て一致すれども儒道の二教は其の旨淺くして人生の根底に徹せず、世の眞相を覺るに及んで人倫の大道自ら開け索なくして五常行はれ、斷ずる無くして忠孝に負くもの無からん。一切の聖說悉く佛道に羅して活用すべき旨を說破したり。爾來佛門に歸入せんとの志を堅くし、或時は阿州大瀧の嶽に上りて求聞持の修行をなし、或時は土州室戸の崎にて悉地成就の大精進を修し、悠々たる高峰の白雲に人生の歸趣を觀じ、蓼々たる脚下の怒濤に宇宙の眞義を聽けり。その室戸にて修行の折の述懷に曰く、

三教指歸

勵精修行

法性の室戸（無漏にかけたり）と聞けど我住めば
有爲の波風立たぬ日ぞ無き。

斯くて一着の麻衣に玄冬の素雪を凌ぎ、穀漿を斷ちて三伏の暑熱に堪へ、四國中國近畿より東海道を歷遊して樹下石上の苦行を積み二十歲にして泉州槇尾山の勤操僧都につき沙彌戒を受けて出家となり超えて延曆十四年東大寺戒壇にて具足戒を受け比丘となる。はじめ無空と稱し教海、如空と改め後に空海と云ふ。

段階上り極めんとして更に段階生じ、一個の疑團氷解し盡して更に新しき疑問起り來る、層々として極まり無きは法界の教へなり。大師一日佛前に祈念すらく「我れ佛法に從ひ常に求めて要を尋ぬ、三乘、十二部經心神疑ひありて未だ決せず、唯願はくは三世十方の諸佛我れに不二を示し給へ」と、至誠感應して靈夢を蒙り大和高市郡久米道場の東塔の下に大日經のあるを知り尋ね求めて東大寺の南隅に一小堂を構へ潛心研鑽をつみたれど「一部緘を解きて普く見るに衆情滯りあり」終に疑雲は晴れやらず、茲に入唐留學の志を起し勤操師の執奏によりて勅許を得、延曆二十三年五月遣唐使藤原葛野麿に從ひて唐に渡りぬ。大師時に三十一歲。爾來諸方の碩德を歷訪し最後に支那密敎の祖不空三藏の高弟惠果阿闍梨に靑龍寺に於て謁す。阿闍梨は大師を一見し微笑して曰く、我汝の來るを待つこと久しと、金胎兩部の祕法より一切の密敎底を盡して傳へられたり。大師はじめて有漏の穢身の其のまゝに盧舍那佛なりてふ自覺に達して歡喜云ふべくも無く、更に壹貞和尙より悉曇を傳はり、韓方明に書方を學び五筆和尙の名と共に種々なる奇跡をのこして大同元年八月歸朝せり。

支那に留學

密敎の將來

密敎は既に述べたる如く傳敎大師も之を將來したりと雖もそは專ら天台の釋の下に統一せるものなり。大日經を所依とせる純密敎は弘法太師によりて傳はれるなり。大師後年辨顯密二敎論、十住心論、祕藏寶鑰、卽身成佛義等の諸書を著はして顯敎は凡夫並びに地上の菩薩のために說かれしものにて其旨淺く、密敎は如來內證智の境界なれば其の旨遙かに深く等覺の菩薩も其室に入る能はずと論じ、更に進んで顯密の義は重々

密教の極説

無數なれば淺を以て深に望めば深は密、淺は顯にて外道の經書にも祕藏の名あり、小乘の教も外道に對すれば密なり、一乘の教を小乘に對すれば亦密なり。茲に所謂密とは究竟最極法身の自境を指すものにて應化所說の陀羅尼門の如きは祕と名づくるも法身の說に比すれば權にして實ならずと喝破し、夫れより大日經の住心品を所依とし十住心を論じて各宗を批判し、祕密莊嚴心に住する眞言の教への量勝最尊なることを述べられたり。

第一異生羝羊心
第二愚童持齋心

十　住　心

とは、第一は異生羝羊心と稱し愚昧なる凡夫の因果を辨へず、善惡を知らず、唯眼前の情欲にのみ支配せらるゝこと彼の羝羊の如きものを云ひ、第二は愚童持齋心と稱し、愚童ながらも些か貪瞋の毒を解し、人に施して樂しみを感ずる持齋の美を思ふ心にて種子内に藁じ善心萠芽の程度なり。羝羊自性無し、人何ぞ常に惡ならん、緣に遇へば則ち庸愚も大道を庶幾ふ。教へに順ずる時は凡夫も賢聖に齊しからんと思ふ。茲に至りて愚童も亦愚ならず、五常漸やく習ひ十善鑽仰す、しかも未だ出世間の因果を知らず。

第三嬰童無畏心

第三は嬰童無畏心と稱し外道發心して天上界の樂しみを願ひ虔誠に戒を持して歸依を求む、俗界に於ける厄縛を脫がれて無畏の境に達するも未だ涅槃の樂しみを知らず、彼の大聖に比すれば畢竟嬰童の分齋に過ぎず、以上の三住心は世間的にして未だ煩惱の巷に彷徨ふ有漏の住心なり。これより出世間的なる無漏の住心を說く。

第四唯蘊無我心

第四の唯蘊無我心と稱するは我空法有の小乘教なる所謂聲聞の住心なり。唯蘊とは五蘊の法のみは三世常恒に存すてふ意なり。

第五拔業因種心

第五の拔業因種心と稱するは十二因緣の觀を修して過去の業障無明の種子を拔きたるものにて第四心に殘れる法執をも拔取れる所謂緣覺の住心なり。

第六他緣大乘心

第六他緣大乘心に至り高く聲、緣を超えて自執の塵を洗ひ他利の行をなす、卽ち菩薩の用心なり。されど此の住心にありては未だ心原に至らず、心外の迷を遮して祕藏の宝は未だ開かず、權大乘法相宗の分位なり。

第七覺心不生心

第七覺心不生心は三論宗に於ける住心なり、已に法の本無生を悟れば心體自如にして身心を見ず、寂滅平等究竟眞實の智に住して退失無からしむ、諸の戲論を絕つて寂滅無爲なり。されど淸淨本覺は無始より來る修行を觀ず、他力を得るにあらず、性德圓滿し、本智具足せり、四句を出でゝ亦五邊を離れたり、自然の言も自然なる能はず、淸淨の心も淸淨なること能はず、絕離絕離せり。

第八一道無爲心

斯の如きの本處は無明の邊域にして明の分位に非ず。第八、一道無爲心は天台法華の住心なり、一念三千の妙理に依つて法爾自然の實相を觀じ、空假の二邊に卽して中道を證す、諸の顯教に於てはこれ究竟の理智法身なれども眞言門に望むれば卽ち初門なり、一法界心は百非にあらず千是を背けり、中にあらず、中にあらざれば天を背けり、天を背きぬれば演水の談足斷つて止り、審慮の量手亡じて住す、斯くの如きの一心は無明の邊域にして明の分位にあらず。

第九極無自性住心

第九、極無自性住心は華嚴の住心なり。極は至極の義、顯教の空理の極に達し空性無性の空觀に入る時密佛の驚覺に遇ひ第八住心は未極にして自性無しと知り第十の住心に入らんとする顯の最極、密の初門なり、これ亦無明の邊域にして明の分位にあらず。

第十祕密莊嚴心

第十、祕密莊嚴心こそ眞言密教の住心にして此の心に住する時はじめて其の明かなること滿月の光りの虛空に遍して分別する所無きが如し。顯教の大果は歸する處空理のみ、菩薩と雖も未だ心城を開顯せず。密教に至り實理を觀する時祕藏の心城こゝに開かれ塵數の諸尊森羅として安住し一切衆生具有の萬德妙用歷然として缺くる無く一切の諸相みなこれ覺王の境界なるを見るに至らん。

と、無礙の才筆を以て縱橫に論議せり。加之大師の身は既に三地を證し、水想觀に入れば漾々として水を

卽身成佛の實證

湛へしめ、火想定に入れば赫々たる威炎をあげしむ。卽身成佛の顯證を勅問せられては清涼殿上に光明耀如たる毘盧舍那如來と現じ、雨を祈れば雨を降らし、病を禱れば病を癒やす。其の論ずる所と實證する所と一致して密敎の弘法を計りたれば朝野靡然として之に向ひ、傳敎大師の滅度後は殆んど宗界獨占の有樣なりき。

天下の歷遊

大師は又機會を利用して民間弘傳に怠らず、天下を歷遊し種々方便を廻ぐらして衆生を導きたれば智あるも智なきも世に大師の名を知らぬ者なく、大師と云へば弘法に限るが如く千載の今日猶その德を慕はるゝもの大師の人格手腕の絕倫なりしこと想見するにあまりあり。

四國靈場

大師歸朝後しばらく筑紫の觀音寺に寓し、翌大同二年勅を受けて和泉の槇尾山に轉じ、四年初めて京都に入り密敎弘布の詔を受く。弘仁六年卿里四國に歸り、島の周圍に連なれる名山勝地を撰び見惑に擬へる八十八の寺塔を五里に一個寺、十里に二個寺と建て並べ所謂四國靈場なるものを開かれたり。同七年、朝に奏して

高野山

紀州高野山を開き寺宇を建てゝ金剛峯寺と稱し密敎修行の大本山となせり。八葉の嶺の嵐は無明の眠を醒し、一條の淵流は煩惱の垢を洗ひ、一度此地を蹈むものは三惡道の苦を遁れ、彌勒三會の曉に逢ふと傳へらる。大師唐土より歸らんとする折、密敎流布相應の地あらば之を點ぜよと三鈷をとり日本に向ひて投げたるもの此山の松の梢に懸れりてふ奇蹟をはじめ、高野の神の導きありしとか、二匹の靈犬先達したりとか種々なる傳說は一層此の山をして神祕的なる靈場たらしめたり。

祕密灌頂

大同十二年平城天皇に祕密灌頂を授け奉りぬ。帝王の祕密灌頂こゝに始まる。同十四年藤原良房を勅使として洛陽の東寺を賜はりたり。此地は舊鴻臚館にて來朝の外客を待饗せし處、後に寺となして東寺、西寺と稱せり。蓋し南都の東大寺、西大寺に準せるなり。（西寺は南都の守敏僧都に賜はれり）大師乃ち灌頂院を東

東寺、西寺

寺に建て、唐の青龍寺に習ひて眞言密敎相傳の根本道場と定め勅旨によりて金光明四天王敎王護國寺と號したり。後に眞言密部を東密と稱へたるもの此の東寺の名に因めるなり。

大師の事跡として更に特筆すべきは

兩部神道

國土の事相を言へば敎理より觀ずの開宗にあり。そも〳〵我國に於ける神佛調和の淵源は旣に述べたる如く聖德太子に萠芽し、行基菩薩に至りて一歩を進め、弘法大師に至りて完成せるものと云ふべし。大師の所說は普通の本地垂跡說にはあらで徹底せる眞言の敎理より流露し來れる自然の斷案なりき。元來眞言の敎理は事相を本として理を觀ずるものなること已に述べたり。而して我國の神國なりてふ觀念は國初以來國民を支配し來れるものにて、其の如何なる敎へを奉ずるものにても日本國民てふ自覺ある者の此の信念に座せぬはあらざりき。大師の如き靈界の偉人にありては更に其の信念の强烈なるものありしや明かなり。此の國土觀なる事相の上を眞言の敎理に照らすとき兩部神道の生れ來るもの偶然にあらざるを知るべきなり。卽ち眞言宗の本尊は大日如來にして之が金剛界の智法身佛と胎藏界の理法身佛と兩部に分れ、理智の二法身冥合して無量無邊なる佛陀の活動作用を顯ずるなり。之を我が神國の事相の上にながむれば天照大神は大日如來なり。內外の兩宮は理智胎金の兩部なり。數多の神靈は其の冥合によりてなれる無量無邊の佛陀の活動作用なり。かくて大日本國は大日如來の本國なり。最早垂跡の地にあらずして本地なり。神は佛の垂跡にあらずして神卽ち佛なり。

神卽ち佛

卽事而眞、事卽理てふ眞言の敎理は玆に至りて甚だ力あり。兩部神道說を牽强なりとか方便なりとか稱するは未だ眞言の敎理を知らず、太師の信仰を知らざるものなり。大師曰く神道の傳を受けざるものは佛法の奧義を悟らざるもの

なりと、又その心を詠める國風に曰く

有りと云ふあるが中にもとりわけて
　　神道ならで成佛はなし。

神道灌頂

こは大師の自筆として吉田家に存在すと云ふ。大師は實に弘仁二年二月天皇と共に神祇官大中臣智治麿に就きて神道灌頂を受けられたるなりき。

綜藝種智院

大師は又教育の普及と佛道の弘布とに資せんがため天長五年京都九條の地をトし綜藝種智院を設立したり。嵯峨天皇教育に御心を注がれしより當時數多の私學校は設けられたりき。藤原氏に勸學院あり、在原氏に奬學院あり、恒貞親王の淳和院、橘氏の學館院和氣氏の弘文院等蘭菊の美を競ふ有樣なりしも是等は何れも其の氏族の子弟のみの教育所に充てられたるものにして一門の繁榮發達を目的とせる貴族主義のものなりき。獨り大師の種智院のみは平等主義にて氏族を問はず、上下を論ぜず、三教均しく敎へ世間出世間兼ね學ばしめたる平民主義大學校なりき。諸藝綜べ學び佛智を以て種とするが其の精神にてありけらし。

最後に大師の餘德として擧ぐべきは

いろは歌

の作成にあり。平假名の起原に就きては古來種々なる異論もあれどいろは歌をば大師の作として通り來れり。しかも異說無きにあらず、慧心僧都の作なりと云ふもの稍有力なる反對說なり。これとて確證あるにあらず、唯いろは歌の如き悲觀的消極的思想は大師にふさはしからず、慧心僧都の作とする方眞に近しと云ふに過ぎず。いろは歌は有名なる涅槃經の四句の偈

いろは歌

一期の無常と刹那の無常

諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂

と云へるを國字の字母を連ねて今樣に作れるものなる事人の知る所なり。いろは歌が悲觀的思想なりと云ふことは佛教の根本思想が悲觀的なりと云ふに同じ。果して然りや、乞ふ少しく之を解說し見ん。枝葉に涉るが如きも史實を敍しながら思へる儘を語らんとするが本書の目的なり。そも〳〵諸行無常とは世の一切の現象が變移して暫くも止らぬを云へるなり。無常に二種あり、一期の無常と刹那の無常と之なり。人生五十と稱するも決して定まれるにあらず、生れて直ちに死するあり、一年にして死するあり、二十、三十にして死するあり。今日にして明日を計るべからず、朝に夕を知るべからず。ひとり人のみならず一切の萬物凡て始めあるもの終りある習ひにて宿緣盡くれば無常に歸す、之を一期の無常と云ふ。更に觀ずるに我等の四肢五體を始めとし、世にありとしあるもの悉く刹那〳〵に變易遷流せざるなし。我等の心亦然り、起りしと思へば忽ち滅し、滅したりと思へば忽然として生じ、玆にありと思へば彼れにあり、其の無常迅速なるは電光石火も啻ならず、之を稱して刹那の無常と云ふ。是生滅法とは斯の如く諸行の無常なるが是れ生滅世界の眞相なりとの義なり。衆生此の理を知らず、小さき我に執らはれて、富貴の者は富貴をたのみ、力あるものは力を賴み、健康のものは健康を賴みて世は常に斯くあるものぞと傲り思ふ間もなく、富貴去り、力衰へ、健康害なはれて儘ならぬ境遇に立つに當り、樂觀は忽ち悲觀と變りさしもゆゝしく振舞ひけん昨日の猛者も今日は世を敢果なみ人を怨む弱者となる。昨日の樂觀も今日の悲觀も共に世相を達觀せざる顚倒の迷見にして、此の迷見こそ所謂生死苦樂の根本にてあるなれ。生滅々已とは生死の境を超越するを云ふ。世相の表面になづまずして其の眞諦に達したる境界なり。小我に執着する煩惱の滅し盡きたるとき諸行無常の世相そのまゝに

佛教の肝心は四句の偈にあり

して常住の理り顯はれ汲めども盡きぬ眞如の法泉を味はふに至るべし。此の境に達すれば富みたるものは富みたるまゝに貧しきものは貧しきまゝに貴賤强弱を論ぜず、浮世の變遷そのまゝに何時も變らぬ樂しみに滿たさるゝを得べきなり。之を稱して寂滅爲樂と云ふ。寂滅とは小我に執する煩惱の寂滅なり。我を忘れて君國を思ふ人は自己の生死を眼中に置かず、眼中に生死無ければ己に生死の境を離れたるにあらずや。寂滅は決して非活動なる死滅を意味するにあらざるは上來屢々述べたることなり。要するに佛道の肝心は此の四句の偈に云ひ盡せりと云ふべし。人その表面の氣分のみを味はひて悲觀的なり、消極的なり等論ずるのみ。いろは歌は此の四句の偈を巧みに活釋せり。

色は匂へど散りぬるを、我世誰ぞ常ならむ、
諸行無常、是生滅法の意譯之に加ふるものあらざるべし、而して
有爲の奥山今日超えて、淺き夢見じ醉ひもせず、

と云ふに及んで生滅々已、寂滅爲樂の眞義澄刺として活躍し來るを覺ゆ。有漏の淺智にて世相の表面になづみ、小我に執着して貪瞋痴慢の毒霧深く立ち覆ひたる有爲の奥山を、法燈高く照らして今日超え見れば常住の月清く澄みて世はさながらの寂光土なり。無漏の深智の既に開けては淺き世間の夢をも見ず、無明の酒に醉ひもせず、徹底せる自覺玆におこり、人生の眞意義玆に顯はれ來る。斯の如くにして初めて何等逡巡痴疑する無く正義人道に向つて驀進するを得べきなり。消極的に見ゆる寂滅爲樂の句もしかく活釋して生氣旺溢し來るにあらずや。青は藍より出でて藍より青し、いろは歌は四句の偶より出でて更に適切なるものあり。而して更に仔細に觀察する時はその用意の周到なる驚くべきものあるを發見すべし。

いろはにほへと。　ちりぬるをわか。
よたれそつねな。　らむうゐのおく。
やまけふこえて。　あさきゆめみし。
ゑひもせす。

とがなくて死す

其の七文字毎の終りの字母と最後の字母とを連ぬればとがなくて死すとなる。罪惡より免がるとは消極的無爲に了るを云ふにあらず、我等人生最上の善事にして成佛の法此の外に無し。罪惡より全く免れて死するは責任のある所之を盡さゞるは罪惡なり。臣子としては臣子の本分あり、國民としては國民の本分あり。その本分を盡さゞるもの皆罪惡なり。自覺したる人間が其の責任を感じ全生命を擧げて之を遂行し仆れて後止む、斯くて初めてとがなくて死すと稱するを得べきなり。赤穗義士の誠忠を脚色せるものにいろは文庫と名づくるあり。それは文字の數の四十七に當れるのみならず、とがなくて死すてふ隱語に諷意をとれりと云ふ。とがなくて死すと云ふが消極的無爲を意味するものならば赤穗義士にはふさはしからず。吾人は責任を自覺して之を遂行したりてふ積極的に解釋して其の適當せるを覺ゆるなり。字母をみながら取り連ね重複なからしめて意味ある文句を作るだに容易ならざるを、まして佛道の肝心なる四句の偈を優美なる今樣に作りなし、しかも斯くまで用意の縱を示すもの豈尋常の手腕ならんや。吾人は之を古今に求めて弘法大師の作となすの最も當れるを覺ゆるなり。

いろは文庫

宮中眞言院

天長二年高雄山神護寺を勅賜せられ同五年大僧都に任ぜらる。承和元年上奏して宮中に眞言院を置くべき勅許を得、玉體安穩、國家泰平を祈る所謂正月後七日（正月元日より七日までを前七日と云ひ八日より十四

日までを後七日と云ふ）の御修法を行ふ恒例を開き、同二年三月廿一日金剛峰寺に於て結跏趺座、毘盧の印を結びたるまゝ泊然入寂す、歳六十二。滅後八十六年醍醐天皇の延喜二十一年五月廿六日弘法大師の勅諡を賜はれり。大師の血族中より數多の高僧を出せるは注目に値す。大師門下の顔回と稱せられたる智泉法師の母は大師の姉にして三井寺の開山智證大師の母は大師の妹なり。大師の直弟は大師が十大弟子の隨一なる眞雅僧正にして第二の弟は高野山第二世眞然大德の嚴父なり。

大師の血族

高岳親王

大師の事蹟に附屬して漏らすべからざるは眞如法親王の逸事なり。親王在俗の御名は高岳親王と申し平城天皇第三の皇子にて嵯峨天皇の皇太子に立たせ給ひしが弘仁の亂に連累して廢黜の厄に遭はせ給ひ、深く無常を觀じて桑門に入り大師の教化を受けさせ給へり。親王大師の威德にうたれて

かくばかりだらま（法）を知れる君なれば
たゝぎやた（如來）までになり上りけり。

と讃歎し、大師は

云ふならく奈落の底に落ちぬれば
刹利（王族）も毘舍（賤民）も隔てやはある

と和し佛法に氏族なき事をさとし給ひぬ。親王繪畫に熟し給ひて大師の影像を畫き大師親しく點眼したりと傳ふるもの今に高野山に祕藏すと云ふ。大師入滅後二十六年を經清和天皇の貞觀三年唐に入りて法を求め留まること二十年、更に勇を皷して佛跡巡拜の大願を發し齡八十に垂んとして入竺の壯圖を企て給ふ。不幸、遮羅の東北なる羅越國にて遷化し給へりと雖も千歳惰夫を起たしむる勇猛不退の御行蹟尊とからずや。

入竺の壯圖

これ併しながら懋ゆる信仰の力なり。本邦人にして印度に渡れるは親王を以て嚆矢となす。

第四節　兩大師滅後の趨勢

佛教の隆盛

桓武天皇以後の聖天子何れも篤き佛道の信者におはさゞるは無く、代々の賢臣相ついで崇佛の念を有したれば佛徒の勢力は加速度的に增し來れり。しかも其の勢力に伴ひて正しき信仰次第に薄らぎ信者は佛に侯して一身一家の繁榮のみを祈り、甚しきは己れの慾望を逞しうせんため對者の呪咀調伏を佛に祈願する等云ふ惡風盛んに行はれ、僧侶は正法護持を看板にして已れの權勢を張る事のみを勗め終には刀槍を採りて貪瞋痴慢の修羅場に猛り狂ふてふ不思議の現象を呈出し、奈良佛教に幾層を駕したる醜體を演ずるに至れるは何故ぞ。聖德太子は法華經を中心として大化革新の源を開き、奈良朝に入り毘盧舍那大佛中心となりて佛教漸やく惰氣を生じ、傳教大師法華經によりて國教を統一せんとし生氣旺溢し來れるを滅後密教の勢威に壓せられて新禱佛教の變體となり、頽廢救ふべからざるに至れるも亦不思議にあらずや。しかも斯くの如くにして末法鬪爭の時代を釀成し像法の時代は寺塔佛像建設盛んなり、次に白法隱沒して鬪爭堅固の時代に遷るてふ大集經に說かれたる佛陀の豫讖適中し來るも更に大いに不思議にあらずや。桓武天皇王政刷新の御偉業は嵯峨天皇に至りて其の盛を極め、淳和、仁明を經、文德、清和の天皇に至りて藤原氏は右大臣冬嗣、攝政良房の權勢漸やく强く、陽成、光孝より宇多天皇に及んで關白基經の橫暴となり、夫れより後は天皇は虛器を擁し、官位は藤氏一門の虛榮を裝る道具となり、政治は權臣の玩弄に任せ、天下の事又云ふに忍びざらんとす。而して佛教亦其の軌を一にし、戒壇は權勢爭奪の目標となり、寺院道場は迷信助長の巢窟と化するに至りぬ。

迷信の助長

不思議の因緣

像法時代鬪爭時代

王佛二法相關の歷史

正法亡れて政綱衰へたるか。政治亡れて正法行はれざるか。共に影となり姿となりて消長し來れる王佛二法相關の歴史、見來れば一種の感興禁ずる能はざるものあり。

第五節　天臺宗の極盛　並びに其の末流

義眞和尚　叡山座主　慈覺大師　新密　東密　護持院

戒壇勅許を受けたる叡山は日本に於ける大乘佛教の宗家となれり。義眞和尚、傳教の後を承けて延曆寺の住職となり特に天台一宗の儒者てふ勅を賜はりて叡山座主の起原となる。義眞寂後圓澄その後を襲ひ慈覺大師圓仁第三世の座主となるに及んで台宗の盛その極に達す、座主の公稱は圓仁にはじまれり。圓仁姓は壬生氏、延曆十三年下野國都賀郡に生る。幼にして父を失ひ兄に從ひて經史を學ぶ。天性聰敏、最も佛典を喜び十三の時卿里大慈寺の僧廣智を介して叡山に登り傳教大師の指導を受く。傳教嘗つて聰明の少年十人を選びて止觀を習學せしめしに其の成就したるもの圓仁唯一人のみなりしかば爾來止觀の講を謂ふものには圓仁をして講演傳授せしめたりと云ふ、以て其の非凡の器を察すべし。承和五年留學僧となりて支那に渡り、天台の奥義より、當時支那にて隆盛を極め居たる眞言密部の祕法を授かり、前後十年の研鑽を經て承和十四年歸朝し、特に上奏して灌頂を行ひ、文德天皇卽位の際、更に新密法により皇帝本命の道場を建立し熾盛光法を修して寶祚無疆を祈り奉る。之を總持院と號す。仁壽元年支那五台山なる念佛三昧の法を移して常行三昧を修せしめ宮中に仁王會を修して御前講師を勤め、同四年天台座主に任ぜられ滿廷の崇敬を博したり。文德、清和の二帝、淳和仁明の兩太后皆圓仁によりて菩薩大戒を受け給ふ。圓仁の門下秀才林の如し。中に就いて安慧、慧亮、慈叡、安然、相應、遍照等最も顯はる。遍照は良峰安世の子にして俗稱は宗貞、仁明帝の信任を受け官藏人頭に至りしが帝の崩後哀慕に堪へずして叡山に登り圓仁の門に投じて僧正に累進し、元慶寺を創して其の座主となる。乙女の姿しばし止めよの歌詠と共に六歌仙の一人として花山僧正の名を擅にしたるは此人なり。安然は該博の識を藏して五大院に屏居し名聲を競はず、五大院の先德と推尊せられたり。阿覺大師と稱するは之なり。相應は不動別儀護摩法をうけ修練最も應現ありと稱せらる。不動寺を建立し等身の不動尊を刻みて玆に安置し建立大師又南山大師の稱を受く。斯くて圓仁は叡山大成の名を博し清和天皇の貞觀六年正月　十一歲を以て寂す。同八年七月慈覺大師の號を勅賜せられたり。

花山僧正　阿覺大師　密教の隆盛　台密　東密　理同事勝　智證大師

圓仁の最も力を致したるは密教にありしが如し。蓋し密教は其の修法莊嚴にして曼陀羅諸尊の形象彩色絢爛として官能を刺戟し、尊とげなる密語を唱へ印を結べば眼前に一種の靈動を起すと云ふ神祕的のものにて人を引附くる力甚だ強く、弘法大師世に出でて以來朝野を擧げて之に向ひたれば圓仁亦深く其の奥祕を極め、弘法も未だ知らざる新密を傳へたりと稱して其の門戸を大にし、台密の名は眞言の東密を凌駕せんずる勢を示すに至れり。天台宗の生命は法華一乘の下に一切を統一するにあること勿論なれど密部のみ特に盛んなるに及んでは終に密部の教典を殆んど法華と同格にまで引き上せ、智證大師に至りて理は相同じきも事相に於て密部の方勝れりと稱し、教相に於ては天台の釋を用ひながら事實に於て立派なる密教となり了れり。圓仁寂後安慧ついで第四の座主となり、續いて智證大師圓珍第五の座主となる。圓珍俗姓は和氣氏、讃岐の人弘法大師の外姪なり。十五の時叡山に上り義眞和尚に師事し仁壽三年入唐し前後六年の留學を了へて四百餘部一千餘卷の祕書を齎し文德天皇の天安二年歸朝す。清和天皇の貞觀元年江州大友氏の請により三井園城寺に遷り同八年奏して天台の別院となし命ぜられてその別當となる。同十年勅許を得て三井寺を傳法灌頂の道場と

なす。此年六月圓珍天台座主に任ぜられ在職廿四年間朝野の信仰を博して寛平三年十月入滅す、年七十八。醍醐天皇の延長五年智證大師の勅賜あり。圓珍の滅後その法孫相ついで叡山の座主となり前後七十年間山内の勢力を占む。既に述べたる如く慈覺大師は叡山の大成者と稱せられたるも其の法孫は藤原忠平の建てたる法性寺、遍正の興せる元慶寺の如き山外の寺院に於て其の餘力を保つのみ、爵屈せる憤懣の情は智證門下を敵視するに至り、茲に慈覺、智證二門の爭鬪を見るに至る。慈覺の流を山門派と稱し、智證の後を寺門派と云ふ。

山門派、寺門派の爭

慈惠僧正兵力を以て佛法を守る

山門派に慈惠僧正良源起るに及び、末世は兵力にあらずんば佛法を護り難し、との主義の下に一世の怪腕を振ひ、村上天皇の康保三年延暦寺の座主となるや叡山僧徒の膂力を以て祇園社を叡山の附屬となし、更に智證の門下を山門より退けんとす。偶々圓融天皇の御代勅により園城寺の長吏餘慶僧正が法性寺の座主となるや、慈覺の徒、禁闕に之を訴へて曰く法性寺創立以來慈覺門下常に此の任を受けて相承九代に及ぶ、今遽かに智證門徒に替へられしは其意を得難しと、更に百六十名の徒黨を作りて攝政頼忠の家に嗷訴す。天皇甚だ怒らせ給ひ忠平の法性寺を創むる必ずしも慈覺の一門に附したるにあらず、當時慈覺門下に智德兼備の人多かりしため數代座主を累ねたるのみ。今餘慶衆望ありて之に任ずる、何の不可かあるべき。今回の擧動甚だ僧徒の所行に背くと、詔して百六十人の封職を止め給ふ。之より兩門の軋轢日に烈しく智證の徒漸次山を下りて分散す。時に座主良源其徒を使嗾し智證派の千手院を焚き餘慶等を殺さんとすとの流言しきりなりしかば朝廷驚きて警戒する所あり、僧正乃ち上表して其の無根を證したりと雖も其の寺門派を壓迫せんとの强き覺悟を有ちたりしは覆ふべくもあらず。良源は斯の如く敵に對して鋭鋒峻烈を極めたりと雖も非凡の資は能く人を服せしめたる如し。少壯にして南都の碩學と法論を交へ見事に說破して俊才を稱せられ、或時は凡

疫病神を指頭に彈く

元三大師

身成佛の相を示し不動明王の姿を顯じたりと云ひ、或時は疫病神を指頭に彈きて我像を揭げん處には如何なる病魔も入る事なしと誓ひ千載その驗しありと稱せらる。永寛三年正月三日入滅せるを以て世に元三大師と唱へ天海の慈眼大師と併せて天台の兩大師と云ふ。豐臣秀吉が藤吉郎の昔、信長に從ひて山門を攻めし時、馬より下り甲を脫ぎ手を洗ひて大師の像を拜したりと云ふ、以て其の英姿永く人心に刻まれしを知るべし。されば圓融天皇も常に我國の唐に勝れる一例として僧に良源ありと宣はせられ行基以來二百三十年間嘗つて無かりし大僧正の位階を贈られたり。良源嘗つて發したる誓願の一に曰く

我れ十二三ばかりより菩提心を發すと雖も老母在すが程、朝夕の孝養により論場に臨みては詞を爭ひ智を鬪ふ、事に觸れつゝ科を犯すこと數多なり。外は街名に似たりと雖も內は弘法の思を專らとす、願はくは諸佛頂質を擁護して交戰決議の輩、永く三毒を離れしめ給へ。

良源の人心を歸服せしめたるもの內面斯くの如き佛者の悲心を懷ければなるべし。良源の門下二千を號す。

良源門下の四傑

中にも源信、尋禪、覺運、覺超を四傑と云ひ最も顯はる。徒然草にて人に知らるゝ書寫山の性空上人も、多武峰の增賀聖も皆此の門より出でたるなり。良源の寂後尋禪後を襲ぎ、尋禪の辭職後詔して餘慶を延暦寺の座主たらしむ。慈覺の徒數百名勅使を遮り途に宣命を奪つて曰く智證の徒座主とならば講堂を開くべからずと、餘慶はかくて三ヶ月にして職を辭せり。兩門の疾視は益々其度を加へ來り正暦四年には慈覺の徒大與して智證門下の僧房を燒き、寺門派一千餘名を山上より擯出す。後朱雀天皇の長暦三年寺門派の明尊僧正天台座主となるや、山門の徒三千餘人攝政頼通の第に嗷訴す。頼通乃ち平直方等をして弓箭を以て退けんとし一大修羅場を顯出せり。餘慶が座主の任を受けてより寺門派の座主となる八回に及ぶも在職皆數月に過ぎず。かく

戒壇建立の爭ひ

犬猿啻ならざる間となりては寺門の徒、山内に於て戒を受けらるべくもあらず。乃ち奏請して園城寺に戒壇を設けんとす。しかも山門の妨げありて果す能はず、止むを得ずして南都東大寺に戒を受くるに至る。されど東大寺は圓頓の戒壇にあらざれば寺門派の之に安んずる能はざりしは勿論にて爾來戒壇建立を以て最も主なる目的となしたりき。

賴豪阿闍梨

賴豪阿闍梨が白河天皇の勅を受け中宮の安產を祈りて驗しあるや、一切の恩賞に代へて戒壇建立の勅許を乞ひしも天皇叡山を憚りて許させ給はざりしかば賴豪怒り絕食して死し怨靈鼠となりて叡山の經堂を荒したりと傳へらるゝもの寺門派に漲れる一般の消息を語るものと云ふべし。斯くて永保元年四月には三井の僧兵數百名、日吉祭使を抑留して山門の祭りを妨げ、叡山怒りて數千の僧兵を遣はし園城寺を攻めて其の堂宇を燒けり。三井の僧兵又相率ゐて山門を圍み報復を計るや山兵之を退けて再び園城寺を襲ひ前後燒く處の神社、寺塔、僧房、經藏凡て二千四百余所、所藏の經論二萬三千四百卷、火を免かれしは僅かに三百卷、財物珍寶は擅に剽掠之を延曆寺に運致す。船は十三隻、沈むを以て度とし、馬は六十匹、僵るゝを以て限りとせしとぞ。山門寺門の相爭ふに當り南都の諸大寺亦互に寺田を爭ひて兵を交へ、中にも興福寺は藤原氏の氏寺なるを以て最も橫暴を極めたり。斯くて

僧兵

と稱する世にも不思議の名稱ある有情が王政武門に遷る過渡期に顯出して世を亂したり。鳥羽天皇の永久元年、僧圖勢の延曆寺より入りて清水寺の別當に補せられんとするや、興福寺の衆徒五千人洛に入り勸學院に至り嗷訴して曰ふ、清水寺は興福寺の別院にして古來本寺の僧侶別當に任ぜらるゝを例とす、改補の宣を蒙るに非ずんば寺に歸らずと、留まること三日、白河法皇止むを得ず圖勢を止め、僧都永緣を以て代らしむ。

神輿

叡山亦其の所置を怒り僧徒並びに日吉の神人等二千人、祇園の神輿を舁きて京都に亂入し、興福寺は七大寺の僧徒と相謀して之に應じ茲に南都北嶺の葛藤を見るに至る。和解の宣旨を下さるゝも聽かず、洛中爭亂の巷たらんとせしかば法皇乃ち忠盛、爲義等源平の諸將をして之を鎭めしめたり。爾來僧徒の意に滿たざる事あれば數千の僧兵黨をなして嗷訴するを常とせり。而して官兵の之を止むるあれば興福寺にありては春日の神木榊を、山門にありては日吉の神輿を擁して之に抗し、名づけて榊振り、及び御輿振りと云へり。蓋し此の神輿神木は甚だ神靈あるものとして尊とまれ、其の京都に入る時は天皇の尊と雖も庭上に下りて敬意を表せらるゝ程なれば況んや一般の臣民に於ては行幸を拜すると同樣の禮を盡し、之に對して敬意を失したるものは大不敬の罪を以て罰しられたるものなり。されば神輿神木の動座の如きは容易に行ふべからざるものなるや云ふまでもなき事なるを彼等は之を以て我意を徹さんための守本尊となして神威を濟すに至れるなり。彼等の此の輿に對しては朝廷も非常に迷惑せられ、非を理に枉げて其の乞を容れられたるもの一再にして止らず。「いみじき非道の事も山階寺（興福寺）に係りぬれば又兎も角も人物いはず、山階道理と附けて措きつ」と大鏡の記者も書き遺し、剛健におはしゝ白河法皇も天下意の如くならざるもの三つあり、加茂川の水と雙六の采と山法師となりと歎じさせ給へり。當時山とし云へば比叡山の事なりき。斯くて不比等等が藤原氏の前途を祝福して建てたる興福寺は反りて藤氏の累となり、國家鎭護の大道場として傳敎大師の心血を濺がれたる叡山は國家禍亂の助けをなす、げにも世は末法に近づけりてふ觀念は篤信の人心深く刻まるゝに至りぬ。

神木

榊振り、御輿振り

山階道理

雙六の采

山門、寺門の爭ひは兩統權勢上の爭ひなりき。敎學の上に於ても智證大師は密部の方に一段の重きを加へたる如く他の方面にも多少脚色の異なるものありし樣なれど如上の爭鬪を來す程の事にあらず。敎學上

天臺の分派

慧心流、本覺の法門

檀那流、始覺の法門

を生じたるは山門派慈恵僧正の高足源信僧都の慧心流と、同じく覺運僧都の檀那流となり。慧心流は其の觀法の用心として色を去り心を觀じ、心内の六識を去りて八識を觀じ、八識内の諸心を去りて元初の一念を觀じ、元初の一念に就き其相を去り其性卽ち眞如を觀ぜよと敎ふ。直ちに佛陀の果界を頓悟せしめて然る後に其の因卽ち修行に及ぼす、果より因に向ふ本覺の法門なり。檀那流にありては八識所觀を許さず。元初の一念を對境とせず。現實の六識を對境とし以て三諦圓融の實相觀をなさしめんとする修行の因より佛陀の果界に向はんとする始覺の法門なり。はしめ傳敎大師は道邃より本覺の法門を傳はり、行滿より始覺の法門を承け兩者を打ちて一團となし始覺、本覺不二一體として後代に傳へしを慧心、檀那の二僧都に至りて再び分れたるなりと云ふ。爾來更に分派を生じ、慧心に四流、檀那に四流合せて八派となり、寺門派又二つに分れたり。臺密の事相の上にも六流或は十三流等の名稱を附し、相承の、口訣のと種々やかましく傳へたるらしけれど我等の知るべき必要もなく煩はしければ其名も漏らしつ。

第六節　密敎の隆盛　並びに眞言宗の分派

平安時代の代表佛敎

祈禱佛敎

已に述べたる如く密敎は平安時代の代表佛敎と見るべきまでに隆盛を極めたり。臺山、野山は云ふまでも無し、奈良の寺院より諸國の各國分寺等、寺と云ふ寺に於て息災增益の加持祈禱の修せられざるはなかりき。勿論奈良朝までの佛敎も一種の祈禱佛敎にして轉經、修法、造像、寫經等の功德により一身一家の幸福より國家の安穩を祈るを目的としたりしなり。されど是等何れも完備せる儀式あるにあらず、經に敎ふるまゝ唯佛德を讃し、その效驗を祈りたるに過ぎず。然るを密敎にありては幽遠なる理論に根底を置ける祕密儀軌により整然たる修壇法、祈禱法あり、祈禱の種類に應ずる本尊あり、密語、密印等何れも神祕莊嚴にして靈驗の顯著なるものありしかば海内靡然として此の風に化せられたるなり。雨を降らすも、病氣を癒やすも、人を斃すも、世子を設けんとするも一に祈禱の利益を仰がざるもの無きに至りぬ。藤原兼家が兄兼通を呪詛したりと云ふもの、伊周が叔父道兼を呪詛し更に太元法を修して東三條大后を呪咀しまつれりと云ふもの、平將門の反するに當り叡山講堂に於て不動安鎭の法を修し之を降伏したりと云ふもの、菅原道眞が天皇を呪咀したりとの讒奏に遭ひて配流せられたりと云ふもの何れも當時の歷史上著明の事蹟として人に知らるゝ所なり。

益信　聖寶　眞言修驗道

密部の本家と云ふべき眞言宗は弘法大師滅後その高足實慧僧都、眞濟僧正、眞雅僧正等相次いで東寺の長者となり實慧の門より出でたる宗叡僧正は又臺敎を義眞和尙に學びて臺密の色を帶び、眞言の正統を傳へたる眞雅僧正の法脈と相並びて分派の淵源をなし、眞雅の門より眞然僧正、源仁僧都を出す。源仁は又宗叡の流をも汲みたる人にして其の門より益信、聖寶の二英傑を出す。益信は一方宗叡僧正に師事して東臺兩密の混合色を明かにし、聖寶は眞雅、眞然にも師事し、更に役の小角の遺風を慕ひて眞言修驗道を興し、茲に益信、聖寶二僧正の間には鮮明に色彩を異にする二大分流を生じたり。益信は宇多天皇の御歸依特に篤く仁和寺の開創となり、親しく三歸五戒を授け奉る。天皇讓位の後至尊の御身を以て益信の附法弟子とならせ給ひ仁和寺に御室を造營して如法に修行遊ばされ法名を空理と呼ばせ給へり。聖寶好んで名山靈地を跋涉し、役の行者の後榛塞して行路無かりし金峰山をふみ開きて山守、道案内を山上に置き、渡船を吉野川に設くる等後代

の修練者並びに行人を使益する所甚多し。貞觀の末醍醐の山中に一寺を草創し修行の道場となして留住す、醍醐寺是なり。益信は滅後五百年、後花園天皇の御代に東覺大師の諡號を賜はり、聖寶は滅後八百年、東山天皇に至りて理源大師の諡號を賜はる。益信の法脈は寛朝大僧正(宇多法皇の皇孫)に至り唐澤の遍照寺を開きて隆盛を極め、聖寶の法脈は仁海僧正に至り醍醐寺のほとり小野の里に一寺を開き、兩部の曼陀羅を安置し曼陀羅寺と號して玆に留まり請雨修法に於て靈驗特に顯著なりとて雨僧正の名と共に其の門榮えたり。これより益信の後を受けたる事相を唐澤流と號し、聖寶の後を小野流と號す。後世、分流更に分流を生じて十二流三十六派を稱するに至る。以上は事相卽ち祈禱の形式上の分流なり。其の教相に分派を生じたるは興教大師覺鑁上人を祖となす。

唐澤流
小野派

八歳の立志談

覺鑁上人

は肥前鹿島の人、堀河天皇の嘉保二年六月生る。父は伊佐平治兼元と呼び大宰少貳純朝の裔にして武勇を以て四隣に聞ゆ。覺鑁八歳の時國司其の家に臨むことありしに父之を遇して慇懃を極めしかば、父を以て天下の豪貴と信じたる覺鑁の幼き眼には異樣に映じけん卒然其の兄に問うて曰く、彼れ何者なれば斯く我が父を輕んずるぞ。兄答へて一國を領する國司なる旨をさとす。覺鑁又問うて曰く國司に勝れるものありや、兄答ふらく一天四海を知ろし召さるゝ天子なり。更に又問ふ、天皇に勝れるものありや。答へて云ふ、佛陀なり。至尊も猶膝を屈して敬はる。佛陀の上は如何、曰く、無し、天上天下最上最尊なり。覺鑁改めて問ふ、我等曷めて佛陀たる事を得べきか、兄告げて曰く一意向上して退轉する無くんば至り得べしと。覺鑁是より佛陀を以て理想となし十歳にして父を失ふや、愈出家の志を堅くし十三にして上京し仁和寺に入りて寛助僧正に謁し定尊律師に就きて修學す。十四歳にして南都に出で興福寺にて性相の學を究め東大寺にて華嚴の教旨を學び更に三論の宗意を受く。十七歳にして沙彌戒を受け正覺坊覺鑁と稱す。十八歳にして印契を傳はり十九歳にして金胎兩部の大法を受け、二十歳にして東大寺の戒壇にて具足戒を受け、次いで高野山に登り千日の間離言說の三昧に住し求聞持の密軌を修し、二十三歳山を下り、二十七歳仁和寺に於て傳法灌頂阿闍梨の職位につく。上人求聞持の法を修する前後八ヶ度に及ぶも悉地現前せざるを憾み、廿八歳の時再び高野山に上り一百日の修法をなすに及び初めて悉地を成就し天上天下唯我獨尊の境域に入る。八歳立志の願望玆に達するを得たるなり。上人顧みて故山の悲母を偲び恩愛の情禁じ難く、父母孝養集三卷を作りて之を送り寒恩入無爲の釋子の孝養、人を感動せしむるものありしと云ふ。三十二歳の時紀州根來山に大伽藍建立の志を起し、先づ右手の莊に一祠を營立し日本國中大小の神明一千餘社を請じて鎭護となす。傍に僧坊を構へて神宮寺と名づく、これ根來寺の權輿なり。後鳥羽上皇深く上人に歸依せられ其の乞を許して傳法院並びに密厳院を高野山に建て數多の寺領を附して上人を座主に任ず。上人の德望一世に高かりしため金剛峰寺は傳法院のために壓せらるゝ傾きあり。金剛峰寺の徒悅ばず、漸やく確執を生ず。長承三年上皇の詔によりて金剛峰寺の座主職を兼補せらるゝや峰寺の衆徒の反感一層甚しかりしかば軈がて座主職を退き密厳院に籠りて修法に餘念なかりしも衆徒の偏執益々高じ弘法大師の法敵とさけび數百名武器を擁して傳法密厳の兩院に亂入す。兩院の徒亦之に應ぜんとす。上人之を慰撫して根來山に逃る。これより兩派隔然として城壁を設くるに至れり。康治二年十二月上人四十九歳を一期として根來山圓明寺に入滅す。それより一百五十年を經て根來の學頭頼瑜僧正に至り傳法密厳の兩院を全く根來山に遷し眞言新義派の本山となす。之に對して高野山の派を古義派と

根來寺

新義派
古義派

稱す。元祿三年興敎大師の勅賜を受く。新義派は法身如來加持門に下りて說法し給ふと說くをもて加持說とも云ひ、古義派は法身如來が本地身のまゝ說法し給ふと說くをもて本地說又は自證說と名づく。但しこは覺鑁上人當時の說にあらず、其の流れをくめる賴瑜上人が斷然として加持說を採りたるより新古の二派劃然として分るゝに至りしなりと云ふ。

第七節　淨土門の興起

佛道修行の大本山は僧兵を擁して權勢の爭奪に日も亦足らず、天下は擧けて現世利益の祈禱に屬心し沙上の榮華に憧がるゝに至り佛陀の靈光は再び雲に覆はれたり。一心三觀の峰の月も理論の蔭につらつく幻となり、卽身成佛の事相觀も今は昔の夢となりぬ。些末の義にかゝはりて徒らに宗派を分ち祕事祕法等稱する呪文の如きものを後生大事に捧持して安心決定の大事を忘る。かゝる僧侶も時代の思潮に伴ひて相當の信用と敬意とを拂はれたりき。されど誠の安心を求むる人に對しては終に何等の滿足を與ふる能はざりしなり。斯くさみだれし闇の空にも雲間の星は折ふしに見えけり。天慶年間空也上人先づ起ちて彌陀の名號稱へつゝ京都の市中を巡化せり。悟れる人は風姿自ら他を化する力あり。乞食姿の上人も何時しか市聖或は彌陀聖と尊稱せられて歸依する人漸やく多きを加へ來りぬ。延曆寺阿闍梨傳燈大法師位千觀供奉召されて宮中に修法を行ひての歸るさ空也上人の途々念佛し來るに逢ふ。千觀その尊とさに打たれて出離の要道を上人に問ふ。空也答へてそは公自らの知り給ふ所、下司の沙彌僧何をか知り申さんと、走りて去らんとす、千觀强ひて引き止め懇懃に更に之を尋ぬ。空也答へて「如何にも身を捨てゝ後にこそ」と敎ふ。千觀深く其の言に感じやがて攝州箕尾山に隱遁し唱名念佛に行をすまし、或は馬夫となりて往來の人を惠みつゝ時人を勸化したりと云ふ。堂々たる叡山の大阿闍梨が市井の一黑衣に出家の道を尋ぬるとは如何にも不思議の現象なれども此れ實に當時の眞相を語るものなり。位階を貪り、現世の榮達を求むる外に徹底せる何等の安心をも有たざりしは修法の靈驗あらたかなりと稱せられし當時の所謂高僧の眞面目なりき。斯かる間にも至心に道を求めたる千觀の擧動敬服に餘りありと云ふべし。

末に泥みて本を忘る

市聖

叡山の大阿闍梨が市聖の道を乞食の空也に尋ぬ

空也上人

名は光勝、姓氏審かならず、尾張の國分寺に剃髮し自ら稱して空也と云ふ。天下を遍歷し名山靈區到らざる無く、其の過ぐる所或は道路を修し、橋梁を架し、池井を穿つ等、民を利せしこと數ふべからず。常に念佛を唱ふるをもて人皆空也の穿れる池井をば阿彌陀井、阿彌陀池と名づけて今に昔の跡を留む。其の信仰、其の德行、幾萬の人を化したりや知るべからず。嘗つて途に賊難に遭ひし老人の觀念して念佛を唱へしに、こは空也上人にやおはすらんとて賊ども倉皇逃げ去りしてふ逸話あり。以て其の渴仰せられし一般を知るべきなり。

阿彌陀池

空也の德望

そも〳〵彌陀の念佛の我國に興りしは何時頃よりなりけん確說無けれど聖德太子も西方を願ひたりと云ひ、皇極、孝德の御代には無量壽經の宮講あり、行基菩薩亦念佛を高唱せりと云へば淨土往生の思想は疾くより興りしものゝ如し。されど後世淨土門興隆の起原を求むれば天臺の常行三昧にあり。傳敎大師叡山を創する時、山堂に四種三昧堂を建てゝ實修すべきことを奬勵したり。四種三昧とは常行三昧、常座三昧、半行半座三昧、非行非座三昧なり。これ天臺大師が摩訶止觀に於て說示せられたる佛敎實踐修行法なり。常行

本朝念佛の起原

四種三昧

三昧とは九十日の間飲食便利を除くの外一心に彌陀佛を稱念する行を云ふ。天臺の宗意は念佛往生を目的とするにあらざること勿論なれども修行の方便として行はせたるなり。しかも高尚なる理觀により徹底して安心決定するは容易の事にあらざれば情の方面に移して彌陀の念佛に自己の安心を求むる人漸やく加はり來れる如し。さきに述べたる元三大師の如きは著く其の色を顯はし來り、其の門より出でたる慧心僧都に至り大いに之を發揮したり。空也上人も天暦二年に叡山に上りて、戒を受けたれば天臺の流れを汲めりと云ふべし。されば上人の念佛も彌陀の本願を頼みとし、充分なる修行を積んで素懐を達せんとする自力を帶びたるものなることは上人が極樂に夢遊せる時詠じたりと云ふ次の國風にても知るを得べきなり。

自力帶びたる念佛

極樂は遙けき程と聞きしかど
つとめて到る處なりけり

慧心僧都は天臺の奥を極めて慧心流の祖と仰がるゝ高僧なれども自力門にて眞實の安心を得るに至らず、淨土門に歸せんとして又疑ふ所あり。乃ち空也上人を尋ね問うて曰く、我れ極樂淨土を願ふ志甚だ深し、往生遂げられ申すべきや。空也答へて曰く、我は無智の者なるを如何で左樣の事を斷はり侍らんや。但し智者の申侍りし事を聞いて之を案ずるになどかは生ぜざらん。其故は人六行觀を修して上界の定を得んと思ふ時、觀念の力にて次第に進み終に非想非々想にまで至るべしと云ふ。極樂を願ふも同じ事なり。智慧德行なくとも穢土を厭ひ淨土を欣ぶ心切ならば爭でか往生を遂げざらん。と、僧都は理り究り侍るとて涙を流し合掌して歸り爾來信心堅固の念佛者となり往生要集本末六卷を草稿し、又定に入りて眼前に見たる十界の相を畫工に畫かしむ、これ十界の圖の權輿にて今も江州坂本來迎寺に什寶となりて傳はれりと云ふ。往生要集は支那に傳はりて宋帝の叡覽に入り日本小釋迦如來と稱讃せられ僧都の畫像を望まれ塔廟を建立して敬はれしと傳ふ。

慧心僧都空也上人に往生の道を尋ぬ

往生要集十界の圖

慧心僧都

姓は卜部氏、和州當麻の人なり。父は正親、母は清原氏、僧より美玉を授かると夢みて懐妊し、天慶五年僧都を生む。僧都七歳にして父を喪ひ早くも出家の志をおこせり。九歳の時奇しき夢を見る。高尾寺の經藏に入りしに數多の鏡あり。大なるあり、小なるあり、明かなるあり、曇れるあり。一僧來りて僧都に鏡をとり與ふ、見れば小にして而かも曇れるものなり。僧都は大にして明なるを欲する旨を告ぐれば只持歸り横川にて磨けよと云はれしと見て夢覺めたり。僧都その由母に告ぐれば母の曰く、鏡は智慧なり、その明かなるは磨くに及ばず、今汝は幼にして智慧無し、鏡の小にして曇れるが如し。學問修行して智慧を磨かば大にして明なるを得ん、と。僧都聞いて之を喜ぶ。十歳にして叡山に登り良源僧正に師事す。母別れに臨み、「汝山に登らば謹んで上人に事へ修學して空しく光陰を送るなかれ、他日學問成就して其の名聞ゆるに及ばゞ我れより汝を召すべきなり、然らざれば是を永別と思ふ可し。父母の未來を救ふものかゝりて汝の力にあり、恩を捨て無爲に入るは眞實報恩の爲なりとか、汝それ勉めよ」と告げて勵ます。僧都十三歳にして剃髮し戒を受けて法諱を源信と號す。母の訓言身に浸みて切磋の功を勵みたれば學業の進歩驚くばかりにて村上天皇の天曆十年十五歳の時勅によりて八講師の中に入り機辯泉の湧く如く秀才の名宮中に轟けり。天皇叡感ましゝ勅して布帛を賜はり賞し給ふ。僧都嬉しさに堪へず、恩賜の布帛に手簡を添へて母に送り喜ばせんとす。間も無く母の返書あり、御身を出家となしたるは名聞の爲にはあらずかし、偏に父の菩提を吊ひ母が生死の愛

靈夢によりて發憤

母の訓戒

母の激勵

河を渡る船筏とも頼むべき智識となしたく思へばなり。天眷の栄は母の志にあらず、希ふ所は名利を捨つること増賀上人の如くして父母を救はんことにこそ。噫我れ老いたり、生きて此事を見んこと又難からんか、と。僧都之を見て背に汗し、爾来益々奮勵、清素の行を篤うし天祿年中横川なる慧心院に屏居して修行に餘念なかりけり。斯くて春秋幾度か繰返し、今や不動の信念を獲得したれば母に見えんとの情しきりにて折ふしにそを乞ひたれど母は更に許されず。僧都思へらく我も初老を越えたれば若し先だちて死にもせば後悔すとも及ぶまじ、許させ給はずとも如何で今生に一度逢ひまつらでやは、と乃ち旅裝を整へて出發す、時に永觀元年九月にて僧都四十二歳の時なりき。偶ま途中母の使の書を齎せるに逢ふ。疾重ければはや來給へとの便りなりけり。僧都驚いて宙を飛び夜に入りて臨終に迫れる母に見ゆるを得たり。母喜び泣いて曰く、何れの日か師を呼んで相見んと思へり、今正しく望み叶ひて思ひ置くこと無しと云ふ。僧都乃ち念佛の功德より淨土の莊嚴を具さに說き磬を鳴らして唱首となり念佛すれば母公喜んで之に唱和する三百遍、身心安祥として眠るが如くに往生す。僧都泣いて曰く、我をして行を研かしめたるものは母なり、母をして終りをよくせしめたるものは我なり、是母、是子共に宿世の善友なり。と、時人傳へ聞きて歎賞せざるものなし。僧都は爾後三十餘年間、行學自ら修むると共に數多の人を化し、內外敬慕の中心となり後一條天皇の寛仁元年六月七十六歳を一期として往生の素懷を遂げたり。其の自讚自讚とて有名なる左の橫川法語を見れば僧都が信仰の內部を窺ふを得可し。

母の臨終

橫川法語

先づ三惡道を離れて人間に生るゝ事おほきなる悅びなり。身は卑しくとも畜生に劣らんや。家は貧しくとも餓鬼に勝るべし。心に思ふこと叶はずとも地獄の苦に較ぶべからず。世の住み憂きは厭ふ便りなり。この故に人間に生れたることを悅ぶ可し。信心淺けれども本願深き故に賴めば必ず往生す。念佛ものうけれども唱ふれば定て來迎に預かる。功德莫大なる故に本願に逢ふことを悅ぶべし。又云く妄念はもとより凡夫の地體なり。妄念の外に別に心は無きなり。臨終の時までは一向妄念の凡夫にてあるべきぞと心得て念佛すれば來迎にあづかりて蓮台に參ずる時こそ妄念を醒して悟りの心とはなれ。妄念の中より申出したる念佛は濁りにしまぬ蓮の如くにて決定往生疑ひあるべからず。

又國風あり。

羨まし如何なる空の月なれば
　心のまゝに西へ行くらむ。

夏衣偏へに西を思ふかな
　うらなく彌陀を賴む身なれば。

空也上人、惠心僧都等が堅固なる信仰の感化を受けて他力信仰の念佛の聲漸やく盛んになり來りたれど、未だ之に依る宗派の獨立せるもの無かりしが、大原の良忍上人

融通念佛

を稱ふるに及んで玆に念佛に依る一宗開かれたり。

良忍は尾張國智多郡富田の人、父は藤原秦氏と稱し知多全郡を領して富田殿の稱あり。母は熱田社頭の息女なり。後三條天皇の延久四年元旦に生る。幼名は晉德丸、十二歳にして叡山に上り良賀僧都に就きて出家し、十五歳の時師命により三井寺の禪仁律師に從ひて大乘戒をうけ二十一歳の時仁和寺の永意阿闍梨の室に

入りて兩部の灌頂を受け顯密兩宗の教學に渉り遂に推されて一山の講師となりしも未だ決定せる安心を得るに至らざるを悲しみ、東塔西谷無動寺の不動尊に一千日の參詣をなして深く感ずる所あり、二十三歲の時講師を辭して大原山の奥深く遁れ住み、只管彌陀の淨土を慕ひ念佛讀經に余念なく、身も世も共に忘れ果てたる有樣なりき。

遁れてもえこそ許さぬ世の憂さを
　　厭ひ來て棲む大原の奥。
誰人かよも尋ね來ん鳥だにも
　　聲せで深き谷に入る身は。

大原の來迎寺

これ上人が當時の述懷なりき。されど其の高き人格を慕ひて訪ひ來る人の次第に多くなり、終に此地に來迎、淨蓮華の二寺を創建し丈餘の彌陀佛を安置して人里遠き大原山も善男善女の足跡隙なき巷と化しぬ。良忍一夜三昧の中に在りて親しく阿彌陀如來を拜し、速疾往生の正因は念佛にあることを示誨せられ、併せて次の偈を授かれりと云ふ。

一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、
　　十界一念、　融通念佛、　億百萬遍、　功德圓滿、

阿彌陀直授の法門

これ融通念佛宗の起原にして彌陀直授の法門と稱するなり。上人再び鞍馬寺なる毘沙門天の夢告を受け天治元年六月九日京都に出でて開宗せり。鳥羽上皇深く上人に歸依せられ祕藏の鏡面を喜捨して叩き鐘とし、且つ融通念佛勸進帳を製し親しく宸筆を染められて

聲明

敬白、貴賤男女を勸めて此念佛の名帳に入奉りて共に彼國に往生せしめんと乞ふ勸進帳、南無阿彌陀佛、と題し上人に賜はる。上人これより化緣のために身を盡し崇德天皇の長承元年二月大原來迎院に於て往生す、年六十一。上人は特に聲明に長けられ唱詠の聲則かに風韻高く、その念佛を聞く人、隨喜の涙に咽ばざるは無かりしと云ふ。後世我國に於て聲明を談ずる人皆上人を宗と仰ぐ。

事理融通
事々融通

已に述べたる如く融通念佛は阿彌陀直示の法門と稱するものにて他の淨土門と全く其趣を異にせり。華嚴經と法華經とを正依の經として淨土の三部經を傍依となし、其の教理の如きは殆んど華嚴に則り、恰も華嚴を念佛門にうつして修行するの觀あり。卽ち融通に事理融通と事々融通との二種あり。事理融通とは眞如の理體と念佛の事相と融通するを云ひ、事々融通とは一個人の念佛は衆人に融通し衆人の念佛は一個人に融通し、互に融通無礙なる事、燈々相照らし、鏡々相映ずるが如し。繰返して云へば我一人の稱名念佛の功德は他の千萬人の念佛の功德に融通し、他の千萬人の念佛の功德は已一人の念佛と融通して功德圓滿する故短日月の稱名念佛にも無邊の功德備はりて速疾往生を遂ぐべしとなり。本宗の他力往生とは此の意味に於て云ふものにて彌陀の本願にたよる所の他力にはあらざるなり。本宗は第六世法明上人に至りて教理を完成し、第四十五世大通聲者融觀の時殆んど亡びんとしたる宗勢を再興したれば開山の良忍上人と併せて開祖、中興、再興の三祖と稱す。

神佛冥助の信仰

第八節　平安時代信者の消息

平安時代の人々は悉く正しき意味に於ける佛道の信者なりとは思はれねど三世因果の觀念と、神佛冥助の

信仰とは一般に普及せられたるものゝ如し。世を果敢なみて未來に憧がれ、祈禱を過信して妖僧に欺かれ、佛に佞して福利を求めんとするが如き、當時の人智の程度に於て免れ難き弊害の伴ひしは事實なれど、亦一面には神佛冥助の信仰に偉大なる靈力を發揮し、或は之により邪見を飜して正道に歸し、因果の理に感じて非行を改め、佛德に感じて悲心を起し、逆境に所して人生の歸趣を誤らざりし實例尠なからず。今その著しき二三を擧げん。

觀音の信仰

其一、田村麿

身長五尺八寸、胸厚一尺二寸、鬚髯針金の如く、眼は蒼鷹の如し、體重重くすれば二百十斤、輕くすれば六十四斤、怒つて睨めば猛獸もひれ伏し、笑つて眉を舒れば稚子も懷く。後世武人の典型として百世に仰がるゝ田村將軍も信仰の觀念は極めて篤き人なりき。桓武天皇の勅を奉じて奥州に蝦夷を討ずるや、深く觀音菩薩の冥助を祈り、更に僧延鎭をして逆賊降伏の法を修せしむ。既にして賊將高丸を斃すや其の居達谷窟に九間四面の精舍を建立し、膽澤郡に八幡宮を建てゝ帶ぶる所の弓箭馬鞭を納め、更に歸りて山城國音羽の郷に清水寺を造立し、觀音を安置して延鎭を開祖たらしめたり。有名なる清水觀音と申すは是なり。

清水觀音

其二、藤原伊勢人

延曆年間、大中大夫藤原伊勢人佛道に歸依し、觀音を信ずること殊に深し。嘗つて靈夢に三鈷杵に似たる靈山の五色の雲靉靆たるあり、玆に佛寺を營造せば利益無量ならんとの神告を得て覺む。乃ち平素寵愛せる白馬に鞍置きて佛天に祈願を込め、その行く處に任せて夢告の地を尋ぬ。川を渡り谷を超えて、とある山腹の茅草の中に至りて馬止まる。四邊を覽るに宛も夢中の勝地なり。伊勢人喜んで徘徊する中適々草茅中より一の毘沙門天の像を得たり。思へらく、我れ多年觀音を信ず、之を拜置せんと冀ひしに多門天の像を得たるは所願未だ果さゞるにやと、疑心決せざりしが其夜の夢に觀音、多聞その名異なりと雖も本來同體なることを感得す。伊勢人疑團忽ち氷解し、やがて鬣若をそこに營みて毘沙門天を安置し、鞍置ける馬に因みて鞍馬山寺と號したりとか。迷信と云へば夫れまでなれど當時の人の信仰の內容を語るものと見るを得可し。

鞍馬山寺

其三、菅原道眞

學問の神として仰がるゝ菅公は儒者にして信佛の念殊に篤き人なりき。母は觀音の信者にして其の卒する時、道眞に遺言して曰く、汝幼より多病なり、觀音像を造りて祈願すべし、と。父是善亦信佛の志深し、その退隱せんとするや道眞に命じて曰く

父母の信仰

法華大乘、汝に寄せて報恩せんとす。當に共に隨喜す可し。唯念ふに懸車已に迫り、死門前にあり。須く明年を待ちて田舍に歸る可し。歸去の次、將に妙理を聽んとす。妙理已り、將に因緣を結ばんとす。因緣已らば余に後累無けん。

此の母と此の父とに養育せられたる道眞は生涯を通じて靈的生活を送りたり。詩文を作りては無心の草木を感ぜしめ、國司となりては治民の親となつかる。聖帝の値遇に感激し身を忘れて大政を奬理し、一朝讒に遭ひて貶せらるゝや從容として難に殉ひ、一度は、君柵となりて留めよと哀訴したれども其の及ばざるを見ては又怨むる所無く、一桑一落是春秋と達觀す。既にして謫所に至るや「反魂何の遺恨ぞ辛酸是れ宿緣」と諦め佛を念じて神心を養へり。

謫居の慰安

人慚地獄幽冥理、我泣天涯放逐辜、佛號遙聞知不聞、發心北向只南無。

病追衰老到、愁鍾謫居來、此賊逃無處、觀音念一遍。

是等謫居の作を見る時、人情として堪え難き懊惱の闇の中に一道の靈光を認めて慰安せる狀歴々として見ゆるを覺えずや。道眞より此の信佛の念を取り去れりとせば如何。昨日まで一國の大臣として君の寵遇、世の覺え類なかりしもの、罪無くして大罪の汚名を蒙り、耳順に垂んとして妻子と生き別れ、天涯の孤客となりて仇なせるものゝ漫るを見る、眞に人生の慘事に遭遇せる身の、天を怨み世をかこち悶死せずんば止まざるべし。天拜山を祈りて憤死し、その靈雷となりて紫震殿上になり響き讒者をとり殺したりなど云ふ傳說の擴まれるも普通の人情の生みなせる自然的脚色とも云ふべきなり。恩賜の御衣を捧持して毎日餘香を拜したる靈的生活の反面は信仰の流露と見るべきにあらずや。

孝子に導かれて發心

菩薩來迎の圖

其四、源　滿　仲

滿仲は人も知る勇敢なる武將なり。事無き時は遊獵して只管殺生を樂しみとせり。其の子の僧となれるあり、源賢と云ふ。師の慧心僧都の力により父の非行を諫めんとす。僧都乃ち道友覺運、院源等と連れて滿仲の邸に赴き、共に佛道の大要を說き聞かす、滿仲涙を流して先非を悔ひ、卽座に發心して祝髮し、法名を滿慶と號し法華三昧院を多田に建て堅固なる信者となりて晩年を送りたり。

其五、平　維　茂

信州戸隱山に妖賊を退治して勇名を天下に馳せたる餘五將軍維茂も慧心僧都に謁してより深き佛道の信者となり、其の病んでみまからんとするや使を以て僧都を招ぎしも僧都事ありて行く能はず菩薩來迎の圖を取り出して使に持歸らしむ、維茂喜んで像を拜し、合掌のまゝ逝去せり。

耳納堂

醫中の觀音

勇者の十德

其六、源頼義、義家

鎭守府將軍となりて陸奥を治め、阿部頼時父子を誅して武名高かりし頼義も亦熱心なる信佛家なりき。前九年の役了りて京に歸るや、一宇を建てゝ討つ所の敵の耳一萬五千を納め耳納堂と號して其の冥福を祈りたり。六十三歲にして入道し信海と號し念佛修行に餘念無く七十九歲にして死す。其の死に臨み左右を顧みて曰く、我れ生涯多くの罪を造りたれど頃年大勇猛心をおこして佛に歸せり、成佛疑ふべからずと。其の子義家、八幡太郎と號して古今名將の鑑たる事誰も知る處なり。而して其の髮中には常に觀音の小像を安置したりと云ふ。常に勇者の十德を擧げて將士を戒しめたり。一に敵を欺かず、二に詞渺なし、三に他の非を談らず、四に日夜隔てなく用心す、五に陣中不淨ならず、六に勝負を好まず、七に神佛をよく敬ふ、八に禮義を尊とぶ、九に弓箭を嗜む、十に眼小さく底に沈む。此の十德は皇家武將最上の寶なりと。其の死せんとするに當り俄かに剃髮して法名を信了と號し、云つて曰く、我れ生涯を顧みるに佛緣に遠きことのみにて作善少なし、一定地獄の罪人と變ゆ、せめて出家して後生の便りにせんと。

其七、恒　貞　親　王

仁明天皇の朝立ちて皇太子とならせ給ひ賢明の聞え高かりしも藤原氏に姻戚おはさゞりしため終に承和の變に座して廢され給へり。親王之より深く佛道に歸依し給ひ、薙髮して名を恒寂と改められ持戒精進して妃嬪を近づけ給はず、寫經の傍ら書を學び琵琶を弄ばれ安らかに世を送らせ給ふ。基經が陽成天皇退位の折、源融等と共に推戴の志を陳べまつりしに「內經に王位を去りて佛道に志すものあるも未だ沙門を謝して世榮を貪ほれるものあるを見ず、是れ邪緣なり」と宣ひて之を退けられたり。

第六章　王朝、武門政權推移時代

第一節　序論

藤原氏天下の政權を握りて二百年、花の都は彌榮えに榮えたり。櫻かざして大宮人は詩歌管絃に暇なし。久しく續ける泰平の餘澤は名門の一族を悉く女性化せしめたり。されば彼等の心にうつりたる佛陀の姿も顏麗はしく眉目細長く襲襲柔かに、高雅なれども氣魄なく、柔和纖弱婦女子の如くなりしは繪畫彫刻の上に顯はれて千載の下にその面影を留む。斯くて舞臺は旋回し、我世とほこりし望月の影漸やく傾くや、虛榮の爭奪は腕力に訴へられ外面如菩薩の內心曝露して保元平治の大亂となり、榮辱忽ち位置を交換し世は武人の天下となりぬ。しかも武門の統領平相國、時の勢を辨へずして只管榮華を盡したる其の藤波の形を學び兜頭一度廻らして平氏と稱する貴族となり、一天四海に威を振ひ、入る日を返す猛勢も僅か二十年にして蛭が島なる流人の一呼に西海のみなわと消えて盛者必衰の理りを如法に示す。有爲轉變の激甚なる此際の如きはあらざるべし。久しく沈滯せる佛敎は茲に新しき活動を起したり。蓋し世相は悉くこれ佛法なり。世相に應じて法を說き正道に導きて衆生を安んぜんとするもの此れ佛の敎へなり。而して泰平久しく續けば人々現在の安きに馴れて究竟の道を求むる情强からず。求むる心强からざれば眞道顯はれ來らず。恰も大なる鐘の如きか。打たざれば鳴らず、僅かに打てば僅かに鳴り、大いに打てば大いに鳴る。鐘鳴は有るが如く無きが如し。徒らに鐘を眺めて鐘鳴なきを議するの非なるが如く、求むる心なくして佛法を議する亦非なり。佛法は依然として萬古變らざるも求むる人無ければ佛法無きに等し。盛衰榮枯の迅速を目前に視て人生の敢果なきをつくづく感じたる王朝末期の人々が衷心より究竟の安心を求めたりけんは想像に難からず、佛法の活躍し來れるもの怪しむに足らざるなり。此の時に當りて諸行無常の世を去り常住安樂の淨土に行くは唯彌陀の本願を頼むにありと、一切の智識をふり捨てゝ純他力なる純未來的の淨土門を開きたる法然上人は世に出でたり。

有爲轉變の激甚

鐘鳴の譬

第二節　法然上人

法然上人、姓は漆間氏、美作國久米郡稻岡の人なり。其母秦氏剃刀を呑むと夢みて上人を姙めりと云ふ。長承二年四月七日に生る。幼名勢至丸と呼び頴悟人の稱する所となる。偶々父時國北面の武士明石定明の恨を買ひ夜襲を受けて僵さるゝや、當時九歲の勢至丸直ちに小弓を取りて之に向ひ一矢を敵の眉間に報いたり。父が臨終の遺言により茲に出家の志を起し、十三歲にして叡山に上り西塔北谷寺の阿闍梨源光大德に師事し、名を善信圓明と改めたり。はじめ上人の源光に來り謁するや、源光その相を異とし、今宵の中に覺えてよと云ふ。上人は次いで師の命により功德院なる皇圓阿闍梨に就きて學び聰明の資、早くも一山の明玉を以て稱せられたり。されど叡山は最早や道念修行の場所にあらずして僧侶の位階を贏ち得んための登龍門なりき。圓顱者の勢利を爭ふ巷なりき。名利を捨て眞個の安心を求めんと出家し來れる上人は再び叡山を隱遁せんとの念を起したり。終に師席を辭して久安六年九月十八歲にして西塔黑谷なる叡空上人の門に入りぬ。叡空上人は融通念佛の祖良忍上人の弟子なり。遁世し來れりと云

九歲にして父の仇を報ゆ

叡山の研學

黑谷に遁世

ふ上人に對し卒然問うて曰く、御身が遁世したりと云ふは過去の心か、現在の心か、そも〳〵未來の心なるか。過去の心は去りて無し、現在の心は不住なり、未來の心は未だ來らず。上人言下に答へて曰く、何れの心も遁世せず、無始已來今世流當來之所在煩惱流轉流浪面々者衆生有苦顯罪心と云へる文の心に引かれて參りたりと〻叡空涙を流して喜び御房ははや流轉遷滅の法門落居せられたり、法然具足と覺のれば今日より法然房と稱し、先師源光の源と我叡空の空とを取りて源空と名乘られよと云ふ。これより法然房源空と改められたり。爾來研鑽修業年を重ね內外の典籍普く見究めたれども猶意に滿たぬ處あり。更に他宗の門を窺はんと廿五歳にして南都に遊び法相、三論、華嚴より八宗の教義悉く學び智慧第一の法然房てふ名は廣く同學者間に喧傳せらるゝに至りぬ。しかも眞實究竟の大安心は終に來らざりけり。偶々惠心僧都の往生要集を讀みて深く感ずる所あり、更に黑谷の報恩藏に入り周く一切經を閲すること五遍、善導が觀經疏第四卷に一心專念彌陀名號、行住座臥不問時節、久近念々不捨者、是名正定之業、順彼佛願故といへる文の下より出離生死、頓證佛果の道は彌陀の名號に限れりと覺り、茲に習學二十三年獨學十二年の自力修行を拋棄して愚痴第一の法然房となり純他力の信仰門に入りにけり。本願による念佛法門の獨立こそなけれ、念佛して往生を期する他力の教へは空也、良忍、惠心等の各高德が已に之を稱道し居たれば上人の之を耳にせられしも久しきものなりけん。されど當時年少氣鋭の俊秀たりし上人の眼には愚夫愚婦の有難がる單純なる信仰の如何にも淺薄にうつりけん。甚深の教理に徹底して大安心を獲得せんと志ざゝれしならん。斯くて研究に研究を重ね、深きより更に深きに入り、理智の判釋は遙かに進みたれど、眞實不動の安心に達せざるを怨み、飜りて易行門を窺ふに及び、我れと同じ徑路を辿れる人の告白に共鳴を感じたる刹那忽然として佛陀の靈光に接したるなるべし。こは元より吾人の忖度に過ぎざれども、求め求めて、求め盡し、終に理智を超越せる大靈接觸の自覺を得られし所に宗教的偉人たる上人の面目は存するなり。上人の決して先輩の說を盲信して直ちに隨喜するが如き人にあらざる事は、上人の言葉に

凡は後學捉るべしと云ひて學生は必ずしも先達なればと云ふ事は無きなり。彼の如來滅後五百年に五百の羅漢集まりて婆娑論を作りしに九百年に世親出でて俱舍論を造りて先きの義を破し給ひき。義の是非を論ずることは强ちに上古にも恐るまじきものぞ

とあるに照らしても明かなり。安元元年春四十三にして黑谷を出で吉水に移りて大いに淨土の一門を宣揚したれば、豫て聞えある智惠の法然房が智惠を捨てゝ極樂往生の易行門を開きたりとの評判高く、忽ちにして洛の內外を風靡し承安四年には宮中に招がれて後白河法皇に菩薩戒を授け奉る。上人の智惠を捨てたりとは大信の前に小智を棄却したるのみ、人の盲を開く爲には蘊蓄せる才學を縱橫に發揮せられたり。文治二年八月大原勝林院に於て天台の座主顯眞僧都、高野山の明遍僧都、笠置寺の解脫上人以下五十餘人の碩學と聖道、淨土の法義を論ずるや、上人の舌鋒精鋭、論旨鑿然、一代の學匠悉く說破せられて顏色無く、萬善の妙體は六字の名號に卽し、恒沙の功德は念佛口稱の一行に備はると喝破せられて局を結びたり。顯眞、明遍の如きは終に上人の門下に歸して念佛三昧の人となれり。

上人嘗つて東大寺再建の大勸進たるべき詔を受けしも名利を厭ひて之を辭し、弟子俊乘房重源をして任に當らしむ。已にして再建成り大供養會を行ふや、重源喜びに堪へず日本一の大善根と思ふ旨を上人に語れば、斯かる功德は二三遍の念佛には劣るものぞとさとす。之を傳へ聞ける南都の僧等甚だ怒り、其の理由を詰問

智慧第一の法然房

愚痴第一の法然房

上人の見識

淨土門の宣揚

勝林院の法問

東大寺再建の功德も二三遍の念佛に劣る

して確證無くんは追拂ふ可しと議し定範僧都をして之を糺さしむ。上人笑つて華嚴經の佛地品の卷くり擴け十丈金色像六萬五千體、十度造供養不如稱彌陀とあるを指し示し、更に妙塔勝心經の南無阿彌陀佛一念功德勝於一百三十五洹河沙、成滿金塔者とあるを開かせて歴々たる文證に彼等を屈服せしめたり。鑄佛造塔を以て唯一の功德と心得たる當時、朝野を擧げての大營造、大供養に對し斯くも大膽に云ひ切りたるもの豈大信念に座したるものにあらずしてよくせんや。

選擇集

道を求むるに忠實にして我執を離れたる高僧の中には自己の宗派を振り棄てゝ上人の敎へに歸したるもの尠なからず。修羅の巷を往來して我執を離れたる高僧の中には自己の宗派を振り棄てゝ上人の敎へに歸したるもの尠なからず。修羅の巷を往來して浮世を敢果なめる源平の武人、榮華の夢より醒め出でたる殿上人等に至りては勁風に靡く草木の如く上人の門に集まりて常安樂の未來の淨土を欣求せり。平重衡、平維盛、熊谷次郎、津戸三郎、さては九條の關白等その代表として見るべきなり。建久八年關白九條兼實の乞により淨土宗の肝心、選擇集を著はせり。其の中の要文に曰く、

布施、持戒乃至孝養父母等の諸行を選び捨てゝ專稱佛號を選び取る、故に選擇と云ふなり。

佛の名號の功德は餘の一切の功德に勝れたり。故に劣れるを捨てゝ勝れるを取りて以て本願となし給ふか。

又念佛は修し易く諸行は修し難し、念佛は易きが故に一切に通じ諸行は難きが故に諸機に通ぜず。然らば則ち一切衆生をして平等に住生せしめんがために難を捨て易を取りて本願となすか。

當に知るべし、生死の家には疑を以て所止となし、涅槃の城には信を以て能入となす。

能く逆罪を滅する事は餘行の堪へざる所なり。唯念佛の力のみありて能く重罪を滅するに堪へたり。故に極惡最下の人のために而かも極善最上の法を說き給ふ。

當に知るべし、隨他の前には暫く定散の門を開くと雖も隨自の後には還つて定散の門を閉づ、一たび開きて以後永く閉ぢざるは唯これ念佛の一門なり。彌陀の本願、釋尊の付屬、意こゝにあり。

速かに生死を離れんと思はゞ、二種の勝法の中、且く聖道門を閣きて選んで淨土門に入れ、淨土門に入らんと欲はゞ正雜二行の中に且く諸の雜行を拋ちて正行に歸すべし。正行を修せんと欲はゞ正助二行の中、猶助業を傍にして選んで正定を專らにすべし。正定の業と云ふは卽ちこれ佛名を稱するなり、名を稱すれば必らず生ずることを得、佛の本願に依るが故に。

選擇集を破せんとしたる人々

園城寺の大僧正公胤、選擇集を破せんとして淨土決疑抄を著はし之を難ず。たま〳〵順德院の御召に應じて兩人相會する機あり。談論數刻、公胤屈服して歸り決疑抄を燒いて曰く、本日の參院に二つの德を得たり。淨土の眞義を知りたる一なり、從來の辯めるを改めたる二なりと。栂尾の高德明惠上人、亦摧邪論並びに莊嚴記を著はして選擇集を破せんとしたるも終に其の目的を達する能はざりき。當時上人の權威天下獨步なりしを想見すべきにあらずや。

南都北嶺の反對

道理に於て勝つも權勢の前に屈するは衆生界の習ひなり。南都北嶺の僧徒連署して上奏し、朝命によりて聖道門を捨閉閣抛せよと誹りたる罪を糺し以て念佛門を禁遏せんとす。上人乃ち諸宗誹謗の旨にあらざるよしの起證文を作りて僅がに事無きを得たり。偶々後鳥羽院熊野山に臨幸ありし折、上人の內徒、從蓮、安樂のともがら東山鹿谷にて別時の念佛をはじめ聽衆數多發心するものありし中に御所の御留守の女房も雜りて出家せり。還幸の後あし樣に讒する人のありしかば逆鱗に觸れて遂に六條河原に於て安樂等死罪に行はれたり。叡山南都の大衆等再び機を得て訴訟に及びしかば終に累を上人に及ぼし、土佐國へ流刑の宣旨を蒙れり。

安樂房等の死罪土佐へ流刑

時に承元元年四月にて上人は七十五歳の老齢なりき。流罪の法により其名も藤井元彦と改め白髪の上に打烏帽子して配所に下りぬ。弟子は悲しみて袖にすがり、歸依の老幼途に慟哭せり。上人は從容として是等を慰めて曰く、流刑は更に怨みとすべからず、齢は已に八旬に迫りぬ、たとへ師弟同じ都に住むとも娑婆の離別は近きにあるべく、よしや山河を隔つとも淨土の再會は疑ふべからず。厭ふと雖も存するは人の身なり、惜むと雖も死するは人の命なり、何ぞ必ずしも處によらんや。其の上念佛の興行、洛陽にては年久しきゆゑ邊鄙におもむきて田夫野人を勸めんこと年來の本意なりしも時至らずして素意未だ果さざりき。今事の緣によりて年來の本意を遂んこと頗る朝恩とも申すべし。此法の弘通は人止めんとすとも法更に止まるべからず、と。弟子の西阿彌陀佛、師の身を案ずるあまり、念佛停止の宣旨なれば縱はに念佛をば唱へさせ給ふなと嘆願するや、我れ死罪に所せらるゝとも此事言はずばあるべからず、と弱者の信仰を激勵せられたり。斯くて配所の月を眺むる十月ばかりにして勅免の沙汰あり、暫く播州勝尾寺に滯在し數多の道俗を濟度して建暦元年十一月はじめて入洛し大谷の房を住所と定めたり。前大僧正慈圓勅を奉じて房の修覆を營めりと云ふ。上人の入洛と聞きし日は貴賤の道俗男女滿ち〳〵て七條を東に大谷まで透間もなく、あるは馬を乘り捨て輿より轉び落ちて上人の輿の轅にとりつき歡びの涙を流すもの幾百と云ふ數を知らざりしと云ふ。如何に渴仰せられたりやを見るべし。翌くる建暦二年正月廿五日春秋八十歳を一期とし安祥として往生せり。末期に臨みて法蓮房尋ね申す樣、古來の先德皆その遺跡あり、上人のみ未だ精舍一宇の建立も無し、御入滅の後に何處を御遺跡といたすべきや、上人答ふらく、念佛の興行は愚老一期の勸化なり。されば念佛を修せん所は貴賤を論ぜず、漁人がとまやの住居まで皆これ予が遺跡なるべしと。元祿十年圓光大師の勅諡ありてより五十年毎に三度追號ありて圓光東漸惠成弘覺大師と稱するに至る。

人止めんとするも法更に止まるべからず

勅免

念佛を修する處皆予が遺跡なり

第三節　淨土宗門の肝心

彌陀の第十八願

淨土門の起原、梗概は支那佛教の所にて略述し置きたる如く淨土の三部經と天親菩薩の往生淨土論とを正依の經論とし阿彌陀佛の本願を信じて之に歸依せんとするものなり。而して其の四十八願は第十八願なる設し我れ佛たるを得んに、十方の衆生、至心に信樂し我國(淨土)に生れんと欲して乃至十念（一聲二聲乃至十聲の小數念佛にてもの意）するものあらんに若し生れしむる能はずんば正覺を取るまじ。唯だ五逆と正法を誹謗するものは除くの中に籠れりとし、末世に及び自力機根の失せたる一切の衆生を救濟せんとする大悲心よりなれる本願にして極惡の凡夫を對機とする最上の教法なりとするなり。

極惡凡夫を對機とす

不肖の子ほど可憐さ勝るは普通の人情にもあり、賢こき子ならば自己の力にて獨立も出來べきなれども、不肖の子はやゝもすれば禍の淵に墜ちんとす。子を思ふ親の心は同一なるも、過またんとする者に對して起るが悲心の本來なれば不肖の子に對して可憐さ勝り來るは當然なり。其の悲心を擴大して最廣深の極致に至れるものが佛陀の悲心なり。されば極惡深重の者ほど不愍さ勝り、是等劣機の者を救はんため如何なる人にも修し易き口稱念佛往生の誓願をかけられたるなりと云ふもの本宗の肝心なり。されば惡人、愚人を救濟するが本來の目的なれども、悲心廣大なれば自力修行の機に叶へるものも至心に賴むときは同じ救ひの船に乘せらるゝなり。法然上人が親鸞上人に物語られしとて有名なる「善人尙以て往生す、如何に況んや惡人をや」

善人尙以て往生す

てふ嘆異抄の警句も此の心もて見るときは何等の不思議も無きことなり。されど如何なる罪造れる者も一樣に救はんと初めより許さば法を侮どる者の出で來んとて五逆の者と正法誹謗の者とをば除くよと第十八願にも斷はられたり。しかも既に罪を犯したるものをば如何かすべき。觀無量壽經に至りて斯かる罪人も悔悟して至心に本願を念ぜば平等不練擇なるべしと攝し玆に如何なる者も彌陀の本願に漏るゝもの無きに至りぬ。

信者の守るべき要義三心

本宗に於て信者の守るべき要義を三つに別てり。一に安心、二に起業、三に作業これなり。安心とは決定せる心なり、別ちて至誠心、深心、回向發願心の三心となす。至誠心もて虛僞を退け、深心もて疑心を退け、回向心もて不回向心を退くるなり。回向心とは吾等の爲したる一切の善根、功德を擧けて往生の素因となすべく念ずる心なり。吾人些かの善事をなすも早く其の報を得んと求むるが普通の人情なれども、回向心にありては報酬を眼前に求むるが如きは望む所にあらず、世の爲め、人のため力を致したるもの皆回ぐらして往生の素因に向けんと念ずるなり。斯の如く三心具足して彌陀の本願を信じ安心決定せば、父母に孝養師長に奉仕等の世間事より、續經、念佛、禮拜、供養等の諸行を營むべきなり、之を起業と云ふ。起業に正雜二行を別つ。彌陀の本願に依るを正行とし、他を雜行とす。正行の中にて口稱念佛を往生の正因となし他を助因となす。而して安心起業を絶えず相續するために修むるものを作業と云ふ。作業に四種あり、四修を名づく。

四修

一を恭敬修と名づく、憍慢の心を退くるなり。二を無餘修と云ふ、純一にして餘念なき心を修むるなり。三を無間修と云ふ、間斷無しに修する努力なり。四を長時修と云ふ、終命を期して不退の修行をなすなり。斯の如く次第を立つと雖も畢竟西方極樂淨土におはする阿彌陀如來の本願を信じて日々夜々信仰の心を斷たず念々稱名常懺悔をなす中に三心四修は收まると說くなり。法然上人最後の遺戒たる一枚起請文に曰く、

一枚起請文

もろこし我朝にもろ〳〵の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず、又學問をして念の心を悟りて申す念佛にもあらず、唯往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申せば疑ひなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候はず。但し三心四修など申す事の候は皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ中に龍り候なり。此の外に奧深きことを存ぜば二尊の御あはれみにはづれ本願に漏れ候べし。念佛を信ぜん人は縱令一代の法をよく〳〵學すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智の輩に同じくして智者の振舞ひせず、唯一向に念佛すべし。

淨土の法門は此中に云ひ盡されたりと云ふべし。

我國に於ける淨土門の源は叡山の常行三昧に因すること已に述べたる如くなれど、其の正統の法脈は龍樹、世親、曇鸞、道綽、善導、法然と次第するが本宗古來の傳へなり。上人の寂後、宗義の解釋に多少の見解を異にするものありて鎭西流（聖光上人の流）、西山流（證空上人の流）、長樂寺流（隆寛律師の流）、九品寺流（覺明上人の流）、一念義流（成覺上人の流）、等の五流の異義を生じたりと雖も畢竟するに言論の上の枝葉のみ。何れの宗旨を問はず言論徒らに盛んにして分派に分派を生ずるは學說上の進歩と見るべきも宗敎的には退歩するが如し。淨土宗の眞義は法然上人の言行の中より求むべきなり。

五流の異義

淨土宗の眞義

第四節　源平時代信者の消息

其一、源爲義

保元の亂に院の御味方をなし軍破れて降を乞ひ、其の子義朝が恩賞に替へてもと歎願せしも朝議之を許さ

す、反りて義朝の手により誅を加へよとの命は下りぬ。爲義怨むる氣色もなく「諸佛衆生を念ふも、衆生は佛を念はず。父母常に子を念ふも、子は父母を念はず、と經にも說かれたれば親の樣には子の思はぬ習ひ、義朝一人の罪にあらず、」とて念佛百遍ばかり申し、臨終正念佛、見彌陀來迎、往生安樂國と唱へ從容として首斬られたり。

千本の卒都婆

其二、平判官康賴父子

鹿谷山莊に於ける平家討滅の密議はしなく漏れて硫黃が島に流竄せられし康賴は、都の戀しさと老母を憶ふ情とに堪へずして千本の卒都婆を作り頭に阿字を書き裏に

薩摩潟沖の小島に我ありと、親には告げよ八重の鹽風。

思ひやれ、暫しと思ふ旅だにも尙故郷は戀しきものを。

の二首を彫り、故郷におはする母に見せしめ給へと祈誓を凝らして波に投じぬ。偶々判官に緣りありける僧、嚴島に詣でて康賴の無事を祀り、日くれて月の出潮に濱邊をさすらひしに浪に流るゝ藻屑の中に卒都婆やうのもの見ゆ、怪しみて取り上げ見れば上なる二首の歌ありて康賴法師と彫り附けたり。僧憐れにも有難く覺えて早速都に持ち歸り老母をはじめ判官の妻子にも見せしかば人々落涙せざるは無し。此の事叡聞にも達し、驚て判官歸洛のよすがともなりにけり。康賴の嫡子左衞門康基、父の宥免を祈らんとて淸水寺に百日の參籠をなし日々法華經信解品を讀誦せり。殊更に信解品を選みたるは賢こき長者の生子を見失ひ跡を同居の塵にとどめて再び親子相見たりてふ例話の此の品にあればなりけり。彼は三千の塵點、子を失ひて父悲しみ、此は三年の春秋、父を流されて子悼む。衷心哀慕の情は千里に通へり。硫黃島なる康賴の夢に海上遙かより白

法華經信解品

帆かけたる船一艘走り來る、近附くを見れば嫡子康基乘り居たり、船の帆には妙法蓮華經信解品と鮮かに記しあり。嬉しくて呼ばんとせしに夢覺めぬ。其の後間も無く宥免の御沙汰あり、父子の再會は終に事實となりにけり。

熊野權現へ祈願を籠む

其三、平重盛

忠孝の模範として天下に賞美せらるゝ重盛は文武兩道の達人にして極めたる佛道の歸依者なりき。父淸盛横暴にして君恩を忘れ、一門悉く榮華に慣れて因果覿面に廻り來るべきを知らず、日に〳〵我意の振舞ひ募り行くを見、憂愁の情に堪へやらず、誠を極めて其の救濟を計りたるも大勢の趨く處、人力の及ばざるを覺り、熊野權現に父の改心を祈り、若し宿因の致すところ神力にも叶はずば重盛が命を先づ召させ給へとの願を飽めたり。しかも父の暴逆、一門の跋扈次第に增して重盛の身には病を得るに至る。思へらく、神佛終に平家を見離し給へるか、重盛の身は既に捧げたれば偏へに神慮に任せまつらん。醫藥の如き人爲的治療は加ふまじと覺悟し、其の居室に四十八體の瑠璃光佛を祀り一體每に一燈を捧げ、四十八人の少女に供養せしめて

燈籠大臣

心の闇の深きをば燈籠の火こそ照らすなれ。彌陀の誓を憑む身は照らさぬ所なかりけり。

と謳はしめ、塵世をよそにして未來の淨土を憧憬し、燈籠大臣の名を取りて四十三歲を一期とし、彌陀の念佛と共に溘焉として簀を更へぬ。世には重盛の因果を迷信して積極的の行動を採らず、自ら死を祈りて未來を欣求せる消極的、女性的なりしを責むるものあり。此は當時の情勢を知らず、人の至情に通ぜざる見解のみ。重盛は決して女性的、退嬰主義の人にあらざりしなり。平治の亂に信賴、義朝主上を押籠めて暴威を京

重盛の辨

師に振ふや、清盛熊野參詣の途にあり、其の敵すべからざるを恐れ四國に走りて軍勢を調へんとす。重盛時に二十三、朝家の大事を聞き、其の職にありながら延引するは臣道にあらず、機を失はゞ反りて朝敵の汚名を蒙らんと父を諫めて引き返し、疾風の勢を以て奮戰し、終に大局を輓廻せり。其の待賢門に向つて戰ふや、處は平安城なり、年號は平治なり、我等は平氏なりと呼はつて士氣を皷舞し、自ら陣頭に立ちて猛將惡源太義平と轡を並べて一騎打の血戰をなしたる武者ぶりは智あり勇あり、古今の名將に比して遜色を見ず。後年清盛の大義を辨へずして院參を企つるや、心地觀經なる佛道の四恩を說きて諫言し、朝恩の極まり無きを述べて無道の父に涙を催さしむ。忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、重盛の進退茲に極まれり、唯速かに重盛が頭をはねられよと切諫したる至誠の凝りて固まれる忠言は千載の下、人を感奮せしむるにあらずや。しかも猶清盛の再擧を恐れ、法皇の宣旨と稱して兵を集め、驕慢無類の入道をして惶惑、憐れみを乞はしむるに至りては重盛亦權道に通ぜる人と云ふべし。重盛にして飽くまで權道を用ひて憚らざる人ならしめば或は入道を退けて平家の末運を一時振はしむるを得たりやも知るべからず、しかも重盛の人格に對する信用は終に望むべからず。重盛が「我れ權謀を以て父の過ちを救はんとし、反りて其の心を傷ましむ、人子の道にあらざるを敢てなすに至れる悲しさよ」と流涕したる所に人心を感動せしむるものあり。重盛の飽くまで臣子の分を守りたるもの或は平家衰亡の時日を速かならしめたるものあらん。しかも後世幾億萬の人心を刺激して止まざる精神的價値に比して其の優劣何れぞや。若し夫れ重盛が自ら死を斬り絕食して死したりと云ふが如きに至りては妄の甚しきものなり。重盛にして眞實死を求めたりとせば刀を採りて自刄せんのみ、何を苦しみて神に祈らん。匹夫も猶自殺を能くす、況んや重盛の大勇に於てをや。重盛の死を祈れりと云ふは身命を賭して父の改心を佛天に願へるなり。至誠の人をば至誠のみ能く之を解するを得べし。

重盛の孫に源智上人(備中守師盛の子)あり。法然上人の法脈を次ける高德にして上人最後の遺誡なる一枚起請文を授與せられたるは此の人なり。文曆年中大谷の房舍の破却せられたるを再建し、始めて華頂山智恩院と號せり。

其四、平重衡、平維盛、平忠度

三位中將重衡、攝津一の谷の戰にて源氏の手に生捕らるゝや法然上人に相見ん事を乞ふ。義經その情を憐れんで上人を招ぎ重衡に遭はしむ。重衡悅んで其の敎化を仰いで曰く、生來榮華にほこりて身を修むるをなさず。世亂れて後は茲かしこに戰ひ、人を失ひ身を助けんとのみはかり惡念無間に遮つて一分の善業を積むこと無し。就中東大寺をはじめ南都炎上せしめたる事、たとへ上の命と云ひながら數多の伽藍滅亡に及べること、大將つとめし重衡が罪にして、一門多き中に我等一人、捕はれて京田舍に耻をさらすこと、因果の到來今更に思ひ合せて候。さるにても未來の苦果の恐ろしく、せめて上人の敎へに浴し罪業の一部を亡ぼしたく茲に見參を乞ひ參らせしなりと。上人あはれに覺し、實にも御一門の榮華は傍若無人にておはしたりき。盛者必衰の理り、思ひ當らせ給へるなるべし。されど懺悔滅罪の功德は三世の諸佛も隨喜し給ふ、就中彌陀の本願は鴻大にして一念の稱名に重罪を許させ給ふ。されば今より他力本願に歸命して專心に念佛唱へさせ給へ、來迎に預りて安樂往生疑ふべからずと、剃刀とりて中將の頂に當つること三度、出家に准へて戒を授く、重衡悅びあまりて泣き伏しけり。斯くて安心決定したれば最後の樣も一しほうるはしかりきとなん。

重衡の嫡子維盛も四國八島の館を忍び出で、同じく上人の敎化に浴し出離の要道を授かりたり。さゞなみ

や滋賀の都の一詠に風流韻事を歌はれし薩摩守忠度亦法然上人に歸依して生死の問題を究めたり。嘗つて武人の信仰を質せるに對し上人の敎へられたる一首に曰く

南無阿彌陀ぶつと切り込む太刀先に
敵も味方も西方へ行く。

是等は著しき二三の實例に過ぎざれど亡び行く平家の一門は何れも彌陀本願の誓の船に救はれて其の最後を華やかならしめたり。平家の末路の詩化せられたるもの決して文人の筆のみにてはあらざりき。

其五、祇王、祇女、佛の前

祇王、祇女の姉妹は天下無雙の舞妃てふ稱あり。容姿亦類無かりしかば太政入道の寵を受け、榮耀人の羨む所なりしが、佛の前と稱する更に立勝れる舞妃の入道に見えてより姉妹の上に秋風たちて捨てられしかば

萠出づるも枯るゝも同じ野邊の草
何れか秋に逢はであるべき

と一首の歌を障子にしるして宿に下りぬ。暫しありて入道の召に應じて參じたるに、佛の前は入道の側に侍りて寵にほこれる有樣なり。二人は一段下れるに據ゑ置かれ、佛のために一さし舞へよと命ぜらる。口惜しけれど詮なくて祇王は斯くぞ歌ひける。

佛も昔は凡夫なり、我等も終には佛なり、
三身佛性俱せる身の、隔つる心のうたてさよ。

入道も憐れに聞きて驕て暇賜はりぬ。二人はつく〴〵世の盛衰の果敢無きを感じ母と共に髮をおろして尼となり嵯峨の奥なる往生院に庵室を結び朝暮の念佛に他事も無かりけり。佛の前もかくと聞きて我等も同じ運命にあはん身の何時までかくて人の憎みを買ふべしやと、潛かに逃れて二人を尋ね志を陳べて亦尼となり四人相睦みて未來の淨土を欣求せり。時に　王は廿一、祇女は十九、母は四十七、佛の前は十七なりしと。

惡人の發心

其六、天野四郎

河内國の人なり。力强く心剛にて惡黨の張本となり、財ありと聞きて犯さゞる無ければ人異名して耳四郎と呼べり。或時法然上人の徒弟信空の宿所なる姉小路白河二階の房へ潛び入り、椽下に蟄みて人の寢靜まるを待居たり。折しも法然上人招ぎを受けて法談の最中なりしが惇々法を說きて、人々得難き人界に生を受け、逢ひ難き佛道に接しながら出離の要道を求めずして眼前の欲に迷はされ三惡道に墮落して無量永劫苦しまんこと如何に悲しき事ならずや、と諭さるゝを聞くともなしに聞ける四郎は身に沁み〴〵て堪へ難く、椽の下より這ひ出でゝ上人の御前に平伏し具さに身の罪業を懺悔して正法に歸したき旨を述べければ上人いたく悅ばれ、彌陀の本願は惡人攝取にあれば何しに捨て給ふべき、歸命して念佛を申すに於ては往生決定疑ふべからずと諭されたり。爾來四郎は發心して世にも稀なる道心者となり、腰刀さへ捨てゝ用ひざりけり。時に丹波の住人に篠原範長と呼べるあり。嘗つて天野のために賴みとしたる一族のものを討たれ遺恨やる方なくてありしが斯くと聞きて四郎が縱令發心したりとて許すべきにあらずと、謀りて四郎を我家に賺し招ぎ只管酒を勸めて醉ひ臥したるを討たんとす。範長時分をはかり長刀抜き持ちて宵に着せたる衣引きのけ樣子を見るに四郎の息音は念佛の聲なり。怪しみて紙燭ともし見れば阿彌陀如來の御姿なり、更に注視すれば四郎なり。範長歎息して刀を投げ捨て、有難や、かゝる惡人すら堅固なる信念に座すれば斯樣の不思議あり。我何時まで

か執念く其の舊惡を責んやと、乃ち四郎を起して懺悔をなし、ともに熱心なる信者となりにけり。

其七、佐藤憲清と遠藤盛遠

左兵衛尉憲清は鳥羽院に仕へたる北面の武士にて文武兩道に譽れ高かりしが一日親しき同族の友佐藤憲康を尋ねしに昨日途々談らひし人の、此の曉にみまかれりとて十九になれる妻、七十になれる老母の、亡き友の枕邊に仆れて泣き居たり。憲清茲に無常を觀じ屢々致仕を乞ひしも許されざりしかば終に志を決し殿を辭して家に歸り四歳になる我子の嬉々として迎へたるを猛然床下に蹴落して煩惱の絆を斷ち飄然去りて嵯峨に至り剃髪して法名を圓位と云ひ後に西行と號したり、時に二十三歳の青春尚ほ淺き時なりき。當時の感想あり。

露の玉消ゆれば又もあるものを
　　頼みもなきは我身なりけり。

家人源秀政亦從つて剃髪し西住と號して西行に伴へりと云ふ。西行は爾來七十三歳にて世を辭するまで五十年、心を空の澄みたるに比し、身を行雲の行くに任せて天下を周遊し自然を友として詩想の湧出を擅にせり。其の詠み捨てたるを集めて山家集と云ふ。今、世に知られたる二三を擧ぐれば

鈴鹿山を越ゆるとて
鈴鹿山浮世をよそに振り捨てゝ
　　如何になり行く我身なるらん。

小夜の中山を越ゆるとて
年たけて又越ゆべしと思ひきや
　　命なりけり小夜の中山。

富士を見て
風に靡く富士の煙の空に消えて
　　行方も知らぬ我が思ひかな。

足柄の嶮を越え、薄暮澤邊の鳴とぶを見て
心無き身にも哀れは知られけり
　　鳴立つ澤の秋の夕暮。

伊勢の大廟に詣でゝ
何事のおはしますかは知らねども
　　忝なさになみだこぼれて。

松山に崇德上皇の跡を訪ひて
よしや君むかしの玉の床とても
　　かゝらん後は何にかはせん。

西行と富士山

其の脫塵の風格後世及ぶなしと稱せらる。僧となりて更に一句の法を說かず、濟世利民の知られたるものも無し。一面より見れば社會に何等の用なき人なり。しかも永く人口に膾炙せられて其の高風に化せらるゝもの多きを見るとき、芙蓉の峰の秀然として東海の天に聳え何等の道を說かずして大和心の表徵と仰がるゝ所以を聯想せざるを得ざるなり。富士見西行の世にもてはやさるゝもの亦故あるかな。吾人は佛道の詩化せる

ものを西行に於て見る。

願はくは花の下にて春死なん
その着更衣の望月のころ

希望空しからずして建久九年二月十六日泊然として花下に寂す。銀猫を褒美に賜ひし當時の知己頼朝は其の齢年にあとを追ひたり。

遠藤盛遠は渡邊黨なる盛光の一男にて北面の下臈なりき。生るゝ時に母は難産して死し、三歳の時父に別る。十八歳の時同族源渡の妻袈裟御前に懸想し、夫の身がはりとなりて命を墮しゝ女の赤心に無明の夢覺め茲に發心して文覺と名乗り、生れながらの勇猛心を佛道修行にふりむけて或時は那智の大瀧にうたれ、或時は葛城、愛宕の高峰に斷食し、名ある靈蹟尋ねざる無く、雖行として修せざるなし。斯くて不動の智を養ひ、高尾の邊に住居しありしが神護寺の堂舍荒れたるを歎き、そが修繕の奉加勸進を思ひ立ち、先づ院の御所に參じたるに折ふし管絃の御催しにて奏聞に便り無かりしかば例の氣質を發揮して無禮の擧動あり、一度は許されしも度々に及びしかば伊豆に配流の御沙汰を蒙る。頼朝に謀反すゝめたりと傳へらるゝも此折の事なりき。文覺は飽くまで俠骨を失はざる僧なり、生涯の行動弱を助け强を挫くにあらざるは無し。頼朝を助けて平家討滅を計りし彼は平家の嫡統六代を救へり。西行の世事を顧みず風流三昧に世渡ると聞き彼に逢はゞ頭を挫かんずと常に罵りありしがたま〳〵西行の彼が庵室を訪づるゝや一見舊知の如く終夜物語りて歡待措かざりき。彼が門弟その平常の言行に相違するを詰りしに西行は文覺に打たるべき人物ならず、文覺こそ反りて彼に打たるべきものなりけれ。聞き及びしとは雲泥の違ひある高僧よと答へたりとなん。西行、文覺ともは

西行と文覺

佛道の鑑なしたる當時の名物、十分研究に値するものあれどそは他日に讓らん。

其八、源　頼　朝

十三歳にして平治の亂あり。父兄は殺され諸弟は離散し一族郎黨悉く亡ぼされて敵の情に九死を免がれ、十四歳にして流竄せられ天涯によるべなき孤客となる。宗教的情操の油然として起り來るべきは自然の數なり。果して彼は熱心なる佛道歸依者にして又敬神の念極めて篤かりき。囚にありながら父の手向に卒都婆を作りて獄卒を泣かしたり。三十四歳にして旗揚けするまで二十年の間は日々怠らず千百遍の念佛をなし、父祖をはじめ鎌田がために廻向せり。治承四年八月十七日初めて兵を擧げ八牧判官を斬りし翌日伊豆山の法眞比丘尼と呼べるを招ぎ「我れ昨日までは日々に讀經念佛して父祖の吊らひ大願成就の祈りをなしたれど今より後は兵馬倥偬の間に身を所すれば思はざるに懈怠に及ばんを恐る。御身これより我に代りて行ひ奥れよ」と依頼せり。その戰場に臨むや手に念珠を放たず、誓の中には觀音の小像を戴けりと云ふ。石橋山の戰に倉卒の際とり落したる念珠をば飯田家義拾ひとり危險を犯して追ひ及び頼朝に渡したりてふ逸話は吾妻鏡に特筆しあり。ひとり頼朝のみならず當時の人の如何に信仰の念の純一なりしかを見るべし。斯くて傲る平家を打亡ぼして天下一統の大業を創するや、敬神、信佛の態度は一層色彩を鮮明にしたり。多くの寺社を修繕延立し數多の喜捨をなすのみならず、政治上より至大の聲援を與へたり。中にも鎌倉八幡の建立と東大寺再建とに力を盡したゝは著明の事蹟として人の知る處なり。平氏の末路に當りては東大寺の燒討をはじめ數多の神田寺戸を奪ふこと尠なからず大いに世望を失ひ其の滅亡をもて神佛の冥罰となすもの多かりき。從つて頼朝の是等の擧も畢竟人望に副はんための政略に過ぎずと論ずる史家もあれど頼朝の幼時よりの境遇と其の行爲と

手に念珠を放たず

敬神、信佛の態度

より見る時は純全たる信仰より出でたるものなること明かなり。その父母に對する追善より恩に報ゆる念慮の盛んなりしもの佛道報恩の敎へを守りしものと見るべきもの尠なからず。唯範頼義經等に對する薄恩は何故なりしぞ、情義の人として傳はるべき筈の頼朝が終に殘忍酷薄の人として世に知らる、惜しむべきかな。

平家末路の人々の信仰と頼朝の信仰とを比較して面白き對稱を見る。彼は現世の希望より離れて純全たる未來欣求の信仰なりき。是は亡き人の追善と大望成就の祈願なりき。彼は世を辭せんとする人なり、是は世に出でんとする人なり。彼は單へに彌陀の本願をたのみたり、是は念佛によりて故人を吊ひ、觀音を念じて武運長久を祈りたり。滅ぶる平家と興る源氏と其の信仰の對象異なるもの興味深き問題ならずや。

念佛滅罪を聞きて泣く

其九、熊谷直實

盤東一の弓取りとして世にもてはやされし直實は須磨の浦曲に無官の太夫を打ちしより無常を觀じて發心せりとは人に知らるゝ詩的史話なり。心剛なる反面には優しき情の潜むものなり。彼は半世の生活に幾多の生類を功名の犠牲となしたるを深く悲しみありしが後年領地の爭ひより邪智ある人の漫るを憤り卽座に遁世して黑谷の法然房に馳せ參じ後生の助かるべき敎を乞ふ。上人靜かに他力信仰の要道を說き聞かせ念佛の一行にて如何なる罪業も消滅すべしと敎ふるや、直實聲立てゝよゝと泣けり。上人其の故を尋ぬれば、これまで積みし殺生の罪をば如何なる難行を修してか滅し得んと思ひたるを、さるやさしき修行にて助け給はる如來の情、あまりに忝け無くて、と曰ひながら弊切りて蓮生と名のり、一向專修の道者となり爾來西方にうしろを向けし事無かりしと傳ふ。その述懷に曰く、

浄土にも剛の者とや沙汰すらん

西に向ひて後見せねば。

弓箭を捨てずして往生する道

其十、甘糟忠綱

忠綱法然上人に謁して「弓箭の家業も捨てず、往生の素意をも遂ぐる道あらば敎へ給はれ」と云ふに上人答へて曰く、彌陀の本願は機の善惡、行の多少、身の淨不淨、時處所緣の一切を嫌はざれば、死の緣にはよらず、罪人は罪人ながらに名號を唱へて往生す、これ本願の不思議なり。弓箭の家に生れたる人、たとひ軍陣に戰ひ命を失ふとも念佛せば本願に乘じて來迎に預からんこと努め疑ふべからずと。忠綱爾來戰場に出づる毎に勇を奮ひ愈々太刀折れ馬仆るゝに及び合掌して念佛を唱へながら從容身を敵に任せたり。

第七章　鎌倉時代

第一節　序說

佛教界面目の變化

賴朝覇府を鎌倉に開きて政體の大變化と共に政治の中心點遷易し、佛教界の面目亦漸次改まり來りぬ。王朝末期より稍復興し來れる律宗は此の時代に於て大いに活躍し、法然の淨土宗は一歩を進めて親鸞の淨土眞宗となり、眞言密部亦例によりて盛んなりしと雖も、鎌倉時代の最大特色は禪宗の勃興にあり。一時の變體にもせよ一新　元兹に開かれて武人執政の時代となり、四民皆く其の堵に安んずるを得るに至りぬ。時代に相應すべく色づき來るは自然の數にして王朝末期の未來的、消極的なるに比し、著るしく現世的、積極的になり來れる傾向あり。鎌倉武人の特質は剛健にあり、簡易にあり、節操にあり。律宗の復活も兹に意味あり、淨土眞宗の開宗も亦意味あり、而して禪宗の隆盛を來せるは更に大いに意味あるを見るべきなり。佛教が實際生活と密接なる交渉を來せるもの此の時代を以て最も著しとなす。しかも王朝衰へて武臣跋扈するも人怪しまず、佛教多岐に分れて其の正統を知るによし無きも佛徒之を糺さんとせず、唯自已の安心福利を求むるのみを以て能事了れりとし、信仰の對象の如何を問はず、福利を授くる者には謹んで仕へ、一旦の恩義に報ゆるのみを以て節義の要道と信じ、叛臣に忠を盡して皇恩に戻るを悟らざりき。日蓮上人が法華一乘の旗さしかざし四個の格言を高唱して大義名分の爲めに不惜身命の大活躍をせられたるもの實に此の時代にありき。

實範上人
解脫上人
大悲、興正二菩薩自誓自受
戒壇の再興
良觀上人
俊芿律師

第二節　律宗の復興

學究と寵爭と祈禱とを生命として戒律宗の如きは殆んど忘れられんとしたる平安末期に當り中川の實範上人あり、深く律道の頽廢を悲しみ、中川の勝地に成身院を創して盛んに法筵を張る。其後に解脫上人あり、南都大衆の腐敗を憤り笠置に退隱して自ら淨うせり。其の法孫に大悲興正の二菩薩あり、同志の人圓晴、有嚴と四人相結びて東大寺に自誓自受し、尋いで白四羯摩の別受法を興す。蓋し當時律風全く地を拂つて受戒の儀式を完うすべき僧侶さへも無かりしなり。大悲諱は覺盛、後年後醍醐天皇より菩薩の諡號を賜はり、興正諱は叡尊、後伏見天皇より亦菩薩號を追諡せられたり。兩菩薩の徒弟萬を以て數ふるに至り數百年來殆んど湮滅せる鑑眞の律風再び世に振ひ、東大寺の戒壇院も下野藥師寺の戒壇院も其の法孫によりて再興せられたり。興正の門下にて最も傑出したるは良觀房忍性なり。弘長年間北條長時の需に應じて鎌倉の極樂寺に住し大に慈善の事業を興し二十年間六萬人を救助し世に藥師如來の權化と仰がれたり。

鑑眞所傳以外直ちに宋朝より四分律を傳來したるものあり、北京律の開祖俊芿律師之なり、之に對して前者を南京律と云ふ。俊芿律師は仁安元年肥後に生れ、七歳にして佛書に親しみ、十歳にして法華を讀む、十八歳にして落髮し十九歳にして觀音寺に具足戒を受けき。一日歎じて曰く三學の中戒は是れ根本なり、之を持する堅固ならずして豈佛儀あらんやと、笈を負ひて洛に上り南北二京に往來して名僧智識を訪ひたれども意に滿たざる所あり、終に入宋弘法を志ざし建久十年彼土に渡り十一年の留學を了へて建暦元年歸朝せり。その將來する所の書籍律部三百二十七卷、天臺章疏七百十六卷、華嚴章疏百七十五卷、儒書二百五十六卷、

雑書四百六十三卷、凡て二千一百余卷に及ぶ。榮西禪師、律師の歸朝を聞き馳せて博多に至り早く京師に入らん事を勸めて歡待甚厚きものありき。時に榮西再度入宋して歸朝後殆んど二十年を經たり。爾來律師の道譽四方に聞え、北條泰時の請によりて鎌倉に入り菩薩戒を授く、足將軍亦就いて戒を受けたり。建保六年中原信房之を洛東仙遊寺に延く、こは藤原緒嗣の建つる所にして、律師の奏により再興して泉湧寺と云ふ。豪律の講席茲に開かれ種々なる奇跡を傳へたり。一百日間眠を絶ちて平然たる如き、死者を祈りて蘇生せしめたるが如き、人を驚かしたるもの二三にして止まらず、宋書の中にも師を以て古之聖僧之儔乎と賞したるものありと云ふ。嘉祿三年六十二歳にて入滅す。後年後小松天皇の御代に大興正法國師の諡號を賜はり、明治十六年更に月輪大師の號を賜はれり。師が末期の句に曰く

泉湧寺

法界一念謂二之空一、一念法界謂二之假一、念界融絶謂二之中一、絶念了當超二佛地一

第三節　親鸞上人と淨土眞宗

法然上人の淨土門は彌陀の第十八願を主として口稱念佛を往生の正因となしたる事既に述べたる所なれど、その

彌陀の第十九願

設我れ佛を得たらんに十方の衆生菩提心を發し、諸の功德を修し至心に發願して我國に生れんと欲し、壽終る時に臨んで大衆のために圍繞せられて其の人の前に現ぜずんば正覺をとらじ

と云へる第十九願と

彌陀の第二十願

設我れ佛を得たらんに十方の衆生我が名號を聞きて念を我國に係け諸の德本を植ゑ至心に回向して我國に生れんと欲し果し遂げずんば正覺をとらじ

と云へる第二十願とをも助因として之れが修行をも勸めたるなり。卽ち至心に彌陀の本願を信じて口稱念佛をなすが正行たること勿論なれども世事に所する善行をも擧げて往生の素因となし我等の生涯を通じて極樂往生の因業を修し、臨終に彌陀の來迎に預かりて西方の淨土に生るゝを究竟の目的とするなり。法然の門より出でたる親鸞上人は百尺の竿頭更に一歩を進め、口稱念佛も乃至如何なる善行も我等凡夫の修するものは決して往生の因とならず、唯彌陀の本願を信ずる一念の信にて往生は成立するものなりと喝破せり。無限の大に對しては有限にして如何に大なる數量も棄却せらるゝ如く彌陀の本願は絶對無限なれば相對的なる我等の行爲は之を加ふるも一分を增さず、之を減ずるも一分を減ぜず、唯我等の一切を擧げて彌陀の本願に沒入する時その大慈大悲の佛力に攝取せられて往生の素懷を遂ぐるとなすなり。歎異抄に上人の信仰を述べて曰く、

絶對他力

彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて往生をば遂ぐるなりと信じて念佛申さんと思ひたつ心の起る時卽ち攝取不捨の利益にあづけしめ給ふなり。彌陀の本願には老少善惡の人を選ばれず、唯信心を要とすと知るべし。其の故は罪惡深重煩惱熾盛の衆生を助けんがための願にてまします、然れば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさる善なき故に、惡をも恐るべからず、彌陀の本願を妨ぐる程の惡なき故に

他力廻向

と、我等の小善小行を廻向して往生の素因となさず、彌陀の絶對無限なる因力果力を廻ぐらして本願を信ずる我等に向けらるゝとなす。換言すれば我等成佛の因は彌陀佛既に行じ給へり、我等至心に之を信ずる時に彌陀と一體になり其の功德を領するを得べしとするなり、名づけて他力廻向と云ふ。されば平生に於て往

平常業成

生は定まり必ずしも臨終を待ちて彌陀の來迎を待つに及ばざるなり。之を平常業成と云ふ。

超世の悲願聞きしより、我等は生死の凡夫かは、
有漏の穢身は變らねど、心は淨土に住み遊ぶ。

往相廻向と還相廻向

とは上人が信者の心を歌はれしなり。他力の廻向に往相廻向と還相廻向との二種あり。前者は我等が信心により淨土に往生する相狀に就きての廻向なり。後者は往生廻向によりて安養國に佛果を成就したる後に其の佛果の大威力により忽ち穢土に歸り來り一切有緣の衆生を濟度するを云ふ。此の二種の廻向は悉く彌陀の願力にて成就し給へれば我等が至心に信ずる南無阿彌陀佛の果號の中に具足せりとなす。既に他力の廻向なり、我等の自力は終に何等の功德とならず。歎異鈔に

父母の爲に念佛したること無し

親鸞は父母の孝養のためとて一遍にても念佛申したる事未だ候はず。その故は一切の有情は皆以て世々生々の父母兄弟なり、いづれも〳〵此の順次生に佛になりて助け候ふべきなり。我力にて勵む善にても候はゞこそ念佛を廻向して父母をも助け候はめ。唯自力を捨てゝいそぎ淨土の悟りを開きなば六道四生の間、何れの業苦に沈めりとも神通方便をもて先づ有緣を度すべきなり。

とあるも此の心に外ならず。

信者の生涯は報恩事業

念佛も善行も往生の因にあらずとせば本宗の信者は生涯を通じて何を行ずべきか、曰く報恩。我等は既に彌陀の本願を信ずる事によりて往生の安心は決定せり。貧しきに當り十金の惠みに浴するも猶ほ感謝すべし。況んや無量劫に涉りて修するも成じ難き佛果を一念の信に引き替へて與へらる、何物を以てか之に報ゆるを得ん。我等は唯彌陀の名號を唱へて之を感謝し、正業を勵みて彌陀の御心に叶はんことを勤めんのみと。卽ち口稱念佛は助け給への念佛にあらずして有難しと申す念佛なり。其の善行をいそしむは報果を求むるにあらずして報恩のための行ひなり。生涯の所作は悉くこれ報恩の事業なり、感謝の事業なり。淨土宗にありては往生が生涯の目的なり。本宗にありては報恩が生涯の目的なり。彼は未來主義なり、是は現實主義なり。

淨土宗と眞宗との相違點

親鸞上人は其の傳記極めて明瞭を缺き一部の考證學者よりは其の實在せりやさへ疑はるゝ程なり。されど致行信證、淨土文類鈔、愚禿鈔等をはじめとし數多の特色あり、權威ある著作と、天下を風靡する程の歸向の中心となりたるもの架空の人物とは如何にしても思はれず。但し存命の當時はさまで世の注意を引かず、淨土宗の一派位に目せられたるものが後世追々その教義の闡明せらるゝに從ひ次第に大を加へ終に蔚然たる大宗教家として仰がるゝに至れるものならんか。

傳によれば上人、姓は藤原氏、大織官鎌足十八世の孫、父は皇太后宮大進有範なり。高倉天皇の承安三年四月生る。四歲にして父を喪ひ八歲にして母を失ふ。九歲にして叡山なる青蓮院に入り當時の高僧慈鎭和尙に從ひて少納言範宴と號す。其の伯父範綱に伴はれて和尙に謁し、明日にも得度の式を行はんと云ふを聞き

少納言範宴

明日ありと思ふ心の仇櫻
夜は嵐の吹かぬものかは

と詠みて人を驚かしたりとは有名なる傳說なり。爾來天台の敎學より各宗の法門悉く窺ひたれども究竟の安心を得る能はず。心深く聖德太子を信じ磯長なる太子の廟に祈願を込めたり。傳ふる所によれば上人十九の秋の一夜、太子夢中に顯はれて

夢中の受偈

我三尊化二塵沙界一、　日域大乘相應地、

善信

藤原兼實

有妻の僧

越後の配流

諦聽々々我教命、　汝命根應二十餘歲一、
命終速入二淸淨土一、　善信々々眞菩薩、

なる六句の偈を授けたり。上人夢さめて汝命根應十餘歲の一句に深く心を惱まし、早く出離の要道を悟らんと益々研鑽を重ぬること更に十年、學慧愈進みて信愈定まらず、慧信僧都の昔を偲びて二十九歲の春、叡山を去りて黑谷なる法然上人を尋ね、初めて絕對他力の淨土門に歸し、茲に新らしき信仰生活に入るに及んで十年以前の太子の夢告を了解したりとかや。法然上人の命により道綽と源空との偏名をとりて綽空と名のりしが後、太子夢告の句に因みて善信と號し三年の月日を黑谷に送れり。一日法然に歸依したる前關白藤原兼實、吉水を訪れて「他力本願の敎を疑ひ申すには候はねども淨行の智識におはする上人の念佛と在俗にて無戒なる我等の申す念佛と其の功德に於て如何なる差異の候ふや」と尋ねしに、法然微笑して彌陀の本願は平等の撰取なれば何等の優劣なしと答ふ。兼實「然らば御門下中篤信の人を擇ばれて我等に賜はるまじきや、我等の末女玉日に配して在俗同樣の生活をなさしめ、念佛往生の法は僧俗男女凡聖の隔てなき事を末世の信者に示したし」と乞ふ。法然上人道理至極せりとて早速人選の上、善信に其旨を命じたり。善信一應は迷惑して辭したれども師命と申し、且つは自ら深く感ずる所もありて其の旨を了し、三十一歲にして十八歲なる玉日姬を娶り、斯くて禁令をも憚らず、戒法をも畏れず、公然式を擧げて有妻の僧となり佛敎史上空前の記錄を作りたるなり、とは普通の傳記による梗概なり。

法然上人の安樂房等が罪に連座して土佐に流さるゝや、肉食妻帶の禁を破れる上人は山門の憤りも一層甚しく、死罪に行はるべしとの事なりしも申しなだむる人あり、名を藤井善信と改めて越後國に配流せらる。

非俗非僧の愚禿親鸞

敎行信證

高田專修寺

法然上人と親鸞上人

時に上人三十五歲の時なりき。斯かる機會を弘法の方便となすは覺者が常に執る態度なり。謫居五年、些か憾むる色なく數多の道俗を化して建曆元年十一月赦免に遭ひたるも都に歸らず、釋門に入りて佛子となれゝば俗にはあらねど肉食妻帶は僧侶の行爲にあらず。殊に勅勘以來頭も剃らねば姿は禿なりとて爾來非俗非僧なる愚禿釋親鸞と名乘り東北諸州を巡化すること二十餘年、來るものは拒まず、去るものは追はず、從容たる態度をもて道を弘めたり。中にも常陸の稻田に止まる事十年、數多の異信者を信服せしめ、元仁元年、敎行信證六卷を著はし、はじめて淨土眞宗の立脚地を明かにせり。時に上人五十二歲の時なりき。嘉祿元年下野の高田に專修寺を建立して玆に住し、貞元元年六十歲の時、高足眞佛上人に其の住持職を讓りて京師に歸らんとし相州足柄江津に至り信者の乞によりて滯在すること七年、それより美濃近江の諸州を過ぎて嘉禎元年八月漸く洛に入る。上人の流罪より玆に至る實に二十八年の月日を經たりき。爾後京に止まる二十餘年、專ら述作を事とし、弘長二年十一月富小路なる善法院に於て九十歲の高齡を示し、安祥として西方淨土に旅立たれたり。

法然上人は自ら淨土宗の開立を宣言せられたれど、他力門の成立に關しては筆に言葉に極力努められたれど、其の自ら所する態度は抑遜主義にして、自力門は高けれども我等の器にあらず、我等は唯彌陀の大悲に救はれんのみと愚痴の法然、十惡の法然を以て稱したり。親鸞上人は開祖を以て自ら處られず、飽くまで法然上人の宗義宣揚を計ると云はれたり。其の宗名の如きも開宗の意にあらず、淨土宗の眞義の意味にて見解を異にする他の淨土門に對したるのみ。されば

親鸞に於ては唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしとよき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細無きな

り。念佛はまことに淨土に生るゝ種にてや侍るらん、又地獄に墮つる業にてや侍るらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされ參らせて念佛して地獄に墮ちたりとも更に後悔すべからず候。その故は自餘の行を勵みて佛になるべかりける身が念佛を申して地獄に墮ちて候はゞこそ懺され奉りてと云ふ後悔も候はめ。何れの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定住家ぞかし。彌陀の本願まことにおはしまさば釋尊の說敎虛言なるべからず、佛說まことにおはしまさば善導の御釋虛言し給ふべからず、善導の御釋まことならば法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば親鸞が申し又以て空しかるべからず候ふか。詮ずる所愚身が信心におきてはかくの如し。此の上は念佛をとりて信じ奉らんとも、又捨てんとも面々の御計らひなり。（歎異鈔）

聖德太子を理想とす

御鸞上人の見識

とのべて其の絕對他力の信仰を告白せられ、又

親鸞は弟子一人も持たず候。その故は我がはからひにて人に念佛を申させ候はゞこそ弟子にても候はめ、偏に彌陀の御催しに預かりて念佛申候人を我弟子と申すこと極めたる荒涼のことなり。

と述べくまでも御同朋御同行を以て人に臨まれたり。斯の如く抑遜する點に於て法然上人と異なる所なけれども其の自力他力の判釋に至りては一代の諸經悉く他力へ導く方便にして淨土門の敎こそ佛陀出世の本懷なれと論じ、聖道自力の門は權敎なりと積極的に喝破せり。言ひ換ふれば佛敎の極致は絕對の信仰にあり、その理を解し自ら修行して成佛せんとするが如きは凡夫のよくする處にあらず、釋尊が種々なる修行の道を說かれたるも其の機に對する方便のみ。要は佛陀の大悲を信じ我等の一切を擧げて之に歸入するを勸むるが釋尊の御本意なりと見たるものこれ親鸞上人の見識なり。而して上人の理想として仰がれしは聖德太子なりき。その和讚の一句に曰く

和國の敎主聖德皇、廣大恩德謝し難し、
一心に歸命し奉り、奉讚不退ならしめよ。

上人の滅後、門葉遺弟相聚りて之を大谷に葬り文永九年更に墓を大谷西麓の地に移して廟を建立するに當り龜山天皇より久遠實成阿彌陀本願寺の號を賜はれり。本宗亦數多の分派を出せり。初め高田派と大谷本願寺派との二つなりしが後年更に分派を生じ越前の門徒派も分立して眞宗の十派を稱するに至る。本宗は一向に彌陀の本願に歸すると云ふより一向宗とも稱せられ、又他の寺院の如く寺祿を有することなく檀徒の信施によりて維持せらるゝ故に門徒宗とも稱せられたり。

本願寺高田派と大谷派

一向宗

門徒宗

第四節　禪宗の興起

本朝禪宗の起原

禪宗の我國に傳はれる歷史としては孝德天皇の御代に道昭が法相の傳來と共に神光の門下なる慧滿につき禪宗を受け來れりと稱し、又唐僧道璿が天平八年に渡來して修禪の事を傳へたりと稱するも一宗として發達を見るに至らず。傳敎大師が道璿の徒行表より北宗禪を授かり更に入唐して翛然和尙より南宗禪の附法を受けたるもの實に後世發達せる禪宗の起原と見るを得べく爾來叡山にありては絕えず禪書の研究、禪の修行等も行はれたりき。されど元より天台の下に統一せられたれば一宗として傳はれるにあらず。承安の初叡山の覺阿、宋に航し佛海禪師より臨濟禪を傳はりて歸り宮中に召され禪の宗義を問はるゝや法衣の袖より一管の笛を取り出して吹き一語の答へ無かりしと云ふもの頗る禪の面目を發揮したるに似たり。後攝津三寶寺の能忍

覺阿

能忍

渡航を待つこと十四年

四十八歳にして再度の渡宋

臨濟禪の傳

禪師の至孝

忍盛んに禪を唱導し、師承なきを怨み發悟せる所を記錄し文治五年弟子を宋に遣はし育王山の佛照禪師より證明を受け、自ら日本達磨宗と稱して弘通したるも其の後絶えて傳はらず、今日に傳はれる禪宗の開立は榮西禪師にありとす。

榮西禪師

は備中國吉備津宮の祠官賀陽氏の子なり。期に滿たずして生れ父母に幸あらずとの迷信より捨子の厄に遭はんとせり。十一歳にして安養寺の靜心と稱するに師事し、十四歳にして落髮し叡山の戒壇に上る。生來矮少にして人の嘲笑を蒙り百日間求聞持の法を修して身長を延ばしたりてふ逸話あり。常に、虞舜は赤縣に王たり、晏嬰は齊に相たれども其の丈高きを聞かずとて嘲者に報いたりと云ふ。叡山に於て研學年あり。禪要を尋ねんとて入宋の志を起し、仁安三年四月二十八歳にして宋に渡りしも事により半歳ならずして重源和尚等と共に歸朝し、再び渡宋を計りしも其の機を得ず、安元元年肥前今津なる誓願寺に錫を留めて研究の傍、宋への渡航を待つもの實に十四年の久しきに及べりと云ふ。禪師の熱心を窺ふべきにあらずや。蓋し當時支那との交通極めて疎にして安元元年より文治三年に至る十四ヶ年間、彼我の交通僅かに三回に過ぎざりしとの事なり。文治三年に禪師が宋に再渡したりしは初老を過ぐる八歳の折なりき。斯くて在宋五年、天台山なる虛菴禪師に就きて臨濟禪の奧祕を傳へられ達磨以下五十三世嫡承系連の圖を授かりて建久二年故國に歸る。天台山は天台宗の歷史を有する山なれど當時は禪宗の壓迫を受け居たりしなり。

禪師は至孝の人なりき。異國の空に故國の母を偲びて詠める國風あり。續古今集の羇旅部に載せらる。

もろこしの梢もさびし日の本の

柞の紅葉散りやしぬらん。

禪師の奮闘

興禪護國論

歸朝後誓く筑紫に留まり大に道俗を化して數多の寺を建つ、博多の聖福寺、肥前の智慧光寺等著明なり。叡山の徒之を聞きて甚憤り榮西は台宗の學僧として恣に禪宗を弘通するは宗門に背反せるなりと、上奏して達磨宗停止の宣旨を見るに至る。禪師乃ち上京して禪宗は決して新來の宗にあらず、傳敎大師以來叡山に傳はれるものなり。禪宗若し非ならば傳敎も亦非、傳敎非ならば台敎立たず、台敎立たずんば台徒豈我を拒まんやと辯明大いに勗めしも叡山の勢力には抗する能はざりき。出家大綱並びに興禪護國論は當時の訾難に對する辯駁として著はしたるもの、前者に於て出家の本分を示し暗に台徒の破戒迷執を拱し、後者に於て興禪は護國の精神なることを述べたり。しかも京師にありては事の非なるを知り正治元年五十九歳にして錫を鎌倉に移しぬ。時の將軍頼家並びに母政子、深く禪師の學德に服し忽ちにして一般の歸敬を受くるに至り正治二年には導師と仰がれて故將軍頼朝の一週忌追福供養を行ふに至る。次いで政子の本願により壽福寺を建立して禪師を開山第一祖となす。超えて建仁二年將軍頼家の祈願により京都鴨川畔に建仁寺を造營し同じく禪師を以て開山第一祖となす。禪師が如何に幕府の信任を得たるかを見るべし。但し建仁寺は禪宗專門の道場とせられずして天台、眞言、禪の三宗を併置し延曆寺の別院とせられたり。建保元年禪師は幕府に出でて自ら大師號宣下の執奏を請ひしも古來生前に大師號の例無しとて同年六月執奏により權僧正に任ぜられたり。此の事甚だ異樣の感に打たるゝも當時の制度にありて叡山の障碍を打破せんには斯かる地位を得る必要もありしならんか。そはともあれ自ら大師號の宣下を乞はんとする等その自負する所大にして各宗の學僧等を眼中に置かざる意氣を見るべし。當時京都にありては禪宗の氣受け依然として宜しからざりき。嘗つて暴風の都

鎌倉の壽福寺

京都の建仁寺

自ら大師號宣下の執奏

暴風の諺言

市を荒すや謠言して曰く、榮西の徒黨樣の服裝をなして道を行く、その直裰大袖多く颯風を含みて此の禍を致すなりと。巷謠天聽に達して禪師放逐の詔を下されんとす。禪師辯じて曰く、風は天地の氣にして何ぞ人事に關せん、若し人ありて風を起さば大靈の人なりと。朝廷その道理に服し、反りて禪師を賞し建仁寺を官寺となして保護を與ふるに至る。後禪師に命じ東大寺及び法勝寺修繕の工事を監せしめ功により紫衣を賜はれり。建保三年七月七十五歳にして壽福寺に寂す。或は建仁寺に歸りて遷化せりとも傳ふ。禪師の生涯は禪宗建立のために奮鬪したりき。しかも生前に於て十分の功を擧ぐる能はず、我滅後五十年にして禪風揚らんと豫言して寂せり。

禪師の豫言嚴格にして仁慈

禪師は身を律すること極めて嚴格にして建仁寺の風紀は當代並びに後世の模範と稱せらる。しかも人に對して仁慈の念極めて厚かりき。嘗つて一人の貧者來りて家族の餓死を救はんと乞ふや、折しも與ふべき何物も無かりしかば藥師像を作らんとする御光の料なる銅を取りて與へたり。弟子難じて佛物已用の罪に當らずやと問へば、佛は肉身手足を割きて衆に施すを厭はず、衆生を救ふためには佛の全身を與ふとも佛意に叶はん、もし此のゆゑに罪を受けて惡趣に墮つるとも厭ふ所にあらずと答へて平然たりき。此の他、之に類する逸話甚だ多し。禪師の門より出でたる人にて行勇、榮朝、明全、等最も著はる。曹洞宗の道元禪師も亦此の門より出でたるなり。

榮西禪師が正面より興禪護國を唱へ日本佛教の中興を計らんとしたる後に道元禪師は全く反對の態度を以て曹洞禪を鼓吹したり。但し道元禪師は禪宗と云ふ名目をも嫌はれたれば臨濟、曹洞の區別はもとより區々たる宗派の觀念を離れ、偏に佛陀出世の本懷を世に知らしめんとせられたるなり。

道元禪師

公卿の出身

幼時の叡才

出家後の疑問

榮西の門に入る

宋に渡して曹洞禪を傳ふ

深草の幽棲

正法眼藏

越前永平寺の隱退

北條氏の乞を退ぞく

道元は希玄と號す。久我内大臣通親の子にして母は攝政基房の女なり。土御門天皇の正治二年京都に生る。頗る早熟の人にして四歳の時李嶠が百詠の詩を誦し、七歳にして毛詩左傳を讀みたりと傳へらる。八歳の時母を失ひ無常を觀じて出家の志を起し、九歳より俱舍論等の佛書に親しみ十三歳にして叡山に上り十四歳にして得度式を行ふ。斯くて數多の經論を涉獵する中一の疑問おこり來れり。顯密二教共に本來本法性天然自性身と談る、然らば三世の諸佛は何のためにか更に發心して菩提を求めたりやと。先輩學者に之を質すも能く答釋を與ふるものなし。三井寺の公胤僧正教へて曰く、之を知らんと欲せば建仁寺の榮西に參し見よと。乃ち行きて榮西の門に入る。榮西の寂後其の嗣明全和尚に從ひ十五歳より二十四歳の春まで前後九ヶ年間建仁寺にありて修禪工夫の傍、一切經を閲すること二回、貞應二年明全和尚の入宋に從ひて彼の土に渡り天童山に於て如淨禪師より曹洞禪の正脈を傳はり前後五ヶ年にして二十八歳の冬歸朝の途につく。歸來建仁寺に行李を卸し寓止すること三年。京都の煩を厭ひて深草の邊に一菴を結び幽棲の間に法を說くこと十一年。正法眼藏の述作も此の折の事なりき。感懷あり。

生死可憐雲變更、迷途覺路夢中行、唯留一事醒猶記、深草閑居夜雨聲。

深草の地尙京城に近きを厭ひ波多野義重の請を容れて越路に向ひぬ。義重乃ち越前松岡溪の奥、吉峰の地に寺を創し禪師を迎ふ。山幽にして俗氣至らず、頗る禪師の意に適せり。曹洞宗の大本山永平寺と申すは是なり。北條時賴の切なる招ぎに應じて鎌倉に入りしも僅か半歳にして永平寺に歸り、寺を建て鎌倉に止めんとするをも聽かず、越前六條の地二千石を永平寺の寺領に寄進せんとゆ乞をも退ぞけ、默々として山深き所、

座禪觀法十幾年。其の微恙にかゝるや波多野をはじめ數多の信者の請に任せ京師に上り建長五年八月五十四歳を一期として奄然入寂す。

禪師の高姿紫衣の勅賜

禪師が生涯を通じての行動は極めて非活動的なりき。當時京都には聖一國師あり、九重の雲深き處に禪法を鼓吹し、鎌倉には蘭溪道隆和尚あり、幕府を檀越として武人の間に道を講ず。而して禪師は獨り北越の山間に蟄居し

西來祖道我傳來、釣月耕雲慕古風、世俗紅塵飛不到、深山雪夜草菴中。

と歌ひ、只管修養を事とし、眞實道を求むる一個半個の衲僧を接得して宗風の繼續を計れる外進んで道を弘めんと勉められざりき。しかも其の高潔なる心事は韜晦して愈あらはれ後嵯峨上皇より紫衣を勅賜せらるゝに至る。道は說くによりて行はれず、行ひによりて人を化す。權門に出入して勢威赫々たりし人々の年と共に忘れられ行くに當り、紫衣を辭して

永平雖谷淺、勅命重重々、却被猿鶴笑、紫衣一老翁。

と歎じたる禪師の道譽次第に顯はれ千歳の下、幾萬の人を感化す。玆に現實的なる活動のみ眞の活動にあらざるを知る。

荒磯の波も得寄せぬ高岩に
　書きもつくべき法ならばこそ。
水鳥の行くも歸るも跡絕えて
　されども道は忘れざりけり。

と歌はれし國風に禪師の高姿を偲び得べし。其の著はす所正法眼藏の外、普勸坐禪儀、學道用心集等後世を益するもの甚多し。

東福寺京都の禪風擧揚

桑西禪師は時期早く興禪の志全からずして逝き、道元禪師は退いて道を修め縱に後世の薰化を計れる時に當り、横に時代の風を導き積極的に禪宗の興隆を計りて桑西の志を次げるは聖一國師圓爾と道隆和尚蘭谿と なり。

禪師の博學辯舌

聖一國師

は駿河國藤科の人なり。建仁二年に生る。十歳にして久能山に登り天台の教義を學ぶ。十八歳の時園城寺に入りて得度せしも感ずる所ありて禪門に入らんとし、桑朝、行勇等の高僧につきて學び、三十四歳にして宋に渡り無準禪師につきて衣鉢を傳へられたり。仁治二年歸朝して筑紫に法を弘め寛元元年京に入りて諸宗の前に堂々陣を張り相國藤原道家の歸依を受け東福寺の開山第一世となる。後嵯峨、後深草、龜山の三上皇何れも國師に依りて菩薩戒を受け給ひ、禪要を學ばせ給ふ。之より京師の禪風大いに擧れり。禪師博學にして辯說勝れたり。他宗の者の法戰を挑むや、先づ其の人の修めたる學問に就きて難詰し、彼れの屈するを待ちて禪門の一段高きをほのめかすを常とせり。嘗つて叡山の法印靜明來りて禪の宗意を糺すや、國師は反りて天台の宗義を擧げて說明し、子は未だ教を解せず、如何ぞ教外の禪を會するを得ん、先づ暫く教を學び來れと說破し終に彼をして弟子の禮を執らしたり。菅原爲世儒學を以て自ら任じ國師に向つて說を闘はさんとす。國師は卒然問うて曰く、學問は師授を尊とむ、師授に依らざるものは一人の憶說のみ。我は釋尊より五十五世達磨大師より二十七世の法系を受くるものなり。子は孔子より幾世を經たりや。突然意外の質問に爲世一

意外の質問

法化九州より鎌倉以東に及ぶ

語の答なくして退き國師の才識を嘆稱せりと云ふ。國師は京都を根據として其の法化西は九州より東は鎌倉以東にまで及びたり。宋僧の渡來するもの先つ東福寺に入りて禪師を訪ひ其の指示によりて鎌倉に下るを常とせり。道隆が鎌倉に禪風を輝かしたるもの國師の援助預かりて力ありしと云ふ。

宋僧の來朝

蘭谿道隆禪師

姓は冉氏、宋の西蜀の人なり。渡宋の日僧より我國に於ける佛教の盛事と並びに禪宗の未だ振はざるを聞き、志を決して日本に來る。時に後嵯峨天皇の寛元四年にして禪師三十三歲の時なりき。暫く京都の泉湧寺に留まり舊識の僧智鏡の勸めにより鎌倉に入りて壽福寺の大歇心禪師に依る。執權時頼之を聞き喜び迎へて常樂寺に居らしめ建長元年舊刑場の地なる小袋の地獄谷を選んで地域を開き同三年に至りて佛殿落成し、從來刑場に安置しありし地藏菩薩を遷座して本尊となし、且つ同像一千體を造立し、僧堂浴室鐘樓等の結構整備し、巨福山建長寺と號して蘭谿を迎へ開山第一世となせり。聖一國師は遙かに弟子を遣はして其の盛事を助けたりと云ふ。建仁寺、東福寺等未だ純粹の禪寺にあらず、建長寺の建立に至り始めて禪宗の專門道場を見るに至れるなり。これより鎌倉に於ける禪宗は破竹の勢を以て興隆したり。道隆の來朝後十年ばかりにして宋僧兀菴（普寧禪師）來朝す。舊友の緣にたより東福寺の聖一國師によれり。

禪宗の專門道場

鎌倉建長寺

兀菴

無準禪師

は西蜀の人なり。無準禪師に就きて學ぶ。博學强記にして辯說特に勝れ人に對して談論風發縱橫の概あり。一日無準禪師、兀菴に物語る樣、昔し法演禪師と呼べる人あり、守端和尚を訪ふ。和尚語りて曰く、近時青年の禪客廬山より來る、禪學に關して種々の議論あり、云ふ所皆要旨に適ふ。自らの悟りを語らしむれば又能く云ふ。何等の非議すべき所無かりしと。法演之を聞きて和尚の其の人に對する感想如何を尋ねしに和尚は直下未在と云へりと答ふ。蓋し未だ眞の悟りに達せずとして退けたりとの意なり。法演爾來寢食を忘れて直下未在に心を留め、工夫すること七日間、漸くにして其の旨を悟りたり云々と。兀菴聞きて深く感じ、それより談論を愼しみ默々として坐禪し最後に悟る所を師に呈す。無準禪師悅んで之を賞し、且つ誡しむる樣、道を得るは易く、守るは難し、須く默して之を守れ、歲月を經るに及んで效驗あらんと。辯才無礙なりし俊秀の青年僧は忽ち變じて兀々菴にあり自ら守る聖僧となり兀菴を以て號となすに至る。

談論風發の土一朝にして默々の人となる

時頼の歸依

時頼はかねて兀菴の人となりを聞き知れり。その來朝を聞くや禮を厚くして建長寺に迎ふ。時頼の悟道は主として兀菴に依れりと云ふ。其の迎へられて建長寺の第二世となるや、佛殿に入りて本尊地藏菩薩を拜せず、一喝して曰く、地藏の果位は山僧の下にあり、宜しく壇を下りて山僧に禮せよと、先づ佛菩薩の威德靈驗に隨喜渴仰せる當時の道俗の膽を奪へり。

地藏菩薩を一喝す

道隆和尚建長寺にありて道化を布くこと十三年、法席を兀菴に讓りて京都に上り勅によりて建仁寺の住職となり榮西の再生を以て稱せられたり。後延曆寺の怨みを受け煩を厭ひて甲斐に逃れ尋いで奧州の松島に遊びて跡を晦ましゝも北條時宗の請により再び鎌倉に歸り壽福寺より建長寺に戻りて二度の住持となり弘安元年六十七歲にして寂す。時宗の奏請に依り大覺禪師の諡號を勅賜せらる、これ我國に於ける禪師諡號の嚆矢なり。兀菴は時頼の死後揺らずも建長寺内に道隆黨、兀菴黨の暗鬪生じたるより留むるを聽かずして故國に歸りぬ。

禪師號勅賜の嚆矢

我國に禪宗の勃興して以來、日宋間に於ける禪僧の往來頻繁となり從つて彼れの文化の我れに傳はれるも

支那文化の傳來

の甚多く、道元禪師に從つて入宋せる加藤景正が陶法を傳習し來りて瀬戸燒を興したる、木下道正が宋の藥法を傳習し來れる、聖一國師の俗弟子が宋の染織法を傳へて博多織を始めたる等擧げ來らば屈指に遑無かるべし。彼我禪僧の逸話の傳はれるもの數多あれど、くだ〳〵しければ凡て省き、鎌倉男兒時宗の甕の如き膽を鍛へたりてふ祖元禪師を略述して暫く本項を止めんとす。

祖元禪師

名は子元、別號を無學と云ふ。宋國明州の慶元府に生る。二歳の時その天性の嗜好を試さんとして父母の陳列せる數多の物の中一卷の經を取りて將來佛門に歸すべき因緣を示したりと傳ふ。十二歳の時父に伴はれて山寺に遊ぶや、

轆轤の轉ずるを見て大悟す

竹影掃ㇾ階塵不ㇾ動、月穿ㇾ潭底一水無ㇾ痕

と吟ずる山僧の聲に云ふべからざる感想を惹起して出塵の志を生じ、翌年父の沒するに當り終に淨慈山に入りて出家し、十四歳にして無準禪師の門に入れり。師より狗子無佛性の公案を授かり參究工夫七年、或夜更闌け首座寮前なる木板の鏗然として響けるを聞き、忽然として悟る所あり乃ち走りて師前に證悟を呈するや更に香嚴擊竹の偈を問はれ應答尙ほ澁る所あり、重ねて修行の功を積むこと十餘年、一日井水を汲まんとして轆轤の轉ずるを見、圖らずも廓然大悟の域に達し、先きの公案の深旨釋然として了解したりと云ふ。後年台州の眞如寺に住するや、恰も宋の末期にて元兵潮の如く國內に浸入し、道俗山野に逃竄して凄慘を極む。一日禪師の寺を犯す數百の元兵あり。寺僧悉く逃れて祖元獨り堂中に兀座せり。元兵乃ち之を斬らんと振上げし秋霜の下に從容たる禪師の聲あり。

珍重大元三尺劍

乾坤無ㇾ地ㇾ卓孤節、幸得人空法亦空、
珍重大元三尺劍、電光影裏斬ㇾ春風。

時宗の歸依

流石無慚の賊兵も眼中に生死無き禪師の態度に驚歎し、無禮を謝して倉皇寺門を出で去りしと云ふ。宋末の亂を避け時宗の招聘に應じて來朝したるは弘安二年にして禪師五十四歳の時なりき。時宗の禪師を遇するに至り盡せるものあり。早速建長寺の住持となして自ら弟子の禮を取り更に圓覺寺を創して開山第一世となす。

眞の獅子兒

其の初めて建長寺の住持となるや、子元法座に登り先づ天皇の聖壽を祝し、次に將軍の壽を祝し、次に執權時宗の壽を祝して名分を明かにしたりと云ふ。爾來時宗は專心禪師に參して精神の鍛錬に勗めたり。時偶々元兵の大舉來寇するあり、開闢以來の國難に人心の恐惑云ふばかり無し。時宗乃ち武裝して禪師に謁して曰く、大事到來せり。禪師言下に問うて曰く、如何か向前する。時宗身を躍らして大喝一聲す。禪師曰く、眞の獅子兒なり、よく獅子吼す、驀直に前進して回顧する勿れと。時宗拜謝して出づ。時宗の膽已になれり。關東の令を山の如く威あらしめ、十萬の胡兵を海に殲して國難を救ひ得たるもの偶然にあらざるを知るべし。禪師渡來後六年にして時宗沒し、後二年にして禪師亦入寂す、時に弘安九年九月にて行年六十一歳、勅して佛光禪師と謚せらる。

第五節　日蓮上人

一、修學並びに開宗

上に述べ來れる如く、各宗の佛教何れも潑溂たる活動を興し、名僧智識雲の如く湧き來りて精を競ひ美を

爭ふ盛時に當り、時の天下の中心たる鎌倉の公道に立ち、無位、無祿、無援の一僧の身にて

念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊

と梵音高く呼はつて萬人歸依の宗派を破折し、國君の師と仰ぎ四民の佛菩薩と渴仰する一世の高德も眼中に無く、法華一乘の旗さし翳し一天四海皆歸妙法と獅子吼したる日蓮上人は日本佛敎の精華となりて世に顯はれたり。

上人の生立

上人は後堀河天皇の貞應元年二月十六日房州小港の一漁夫の子として生れられたり。父を貫名重忠と云ふ、鏃足の裔孫にして數代遠州山名郡貫名に住し鎌倉直參の武士なりしが讒者のため房州に流竄せられ終に漁獵を業とするに至りしなりと云ふ。上人の誕生には種々の奇瑞を傳へらる。母の夢に日輪蓮華に乘りて懷に入ると見てみごもりたればとて幼名を善日麿と名づけたり。幼より神佛を敬ふ心厚く其の振舞尋常ならねば父母も瑞祥の奇しきに感じ出家にせんと思ひ立ち十二歲と云ふ五月、小港に近き眞言の道場なる清澄寺に連れ上り住職道善に托し藥王麿と改名せり。十六歲にして剃髮し蓮長と呼び替へぬ。斯くて一代の藏經に肝膽を碎きしが一日大疑問をおこして思ふ樣、佛法と云へば一人の釋尊が說かれしものなれば其の歸結は一なるべきを今八宗十宗と立ち別れ、我宗こそ佛陀の本意なれと云ひ爭ふ。そも〳〵何れの宗がまことの釋尊の正統なりや。たま〳〵人間と生れ、遭ひ難き佛門に歸しながら之を正さで盲從するは悲しきことなり。されど此の事人に尋ぬるとも己が宗旨に偏よりて正しきをば保すべからず。涅槃經を讀み見れば依法不依人の金言あり。我滅後は人師の詞にたよらずに經文によりて判せよとの御遺戒なり。されば如何なる善き師に就きたりとて我身が法を判ずるだけの智者とならずば叶ふまじ。此の事人の力のみにて及ぶべくもあらず、當山に祭れ

蓮長清澄山の大疑問

虛空藏菩薩へ願

る本尊虛空藏菩薩は一切衆生に智慧を授けんとの誓ひあること大集經に見えたり。よしさらば茲に祈願を籠めましと、漿水を絕ち食を斷じて御堂に籠り持念すること三七日、願はくは佛の大智を授かり如來の本懷を悟りて諸宗の是非を明らめ末世五濁の闇を照らす法燈たらんと。至誠むなしからず滿願の曉に神人顯はれ夢幻の間に智惠の大寶珠を授けらる。上人の喜悅例ふるに物なく數多たび拜謝して本坊に歸らんとする折しも胸膈氣逼り夥しき血を吐きて其の儘氣絕し仆れしを同寮の所化の見出して介抱したるに忽ち夢の覺めたる如く氣力舊に增して境智格外に開けさながら雲霧を拂つて天の三光を見るが如し。斯くて末法の大導師たるべき上人は新しく生れ出でられたり。爾來專念に一切經を閱するに判釋歷々として浮み來り無量義經なる四十餘年未顯眞實の文を讀むに及びはたと手を打ち釋尊の御本意、諸經の眼目は法華經にありと見定められたり。されど飽くまで已れを空しくし、心を以て師とせざる上人は更に各宗高僧の所說を明らめ、我が考の誤りと悟らば彼が正しきに從はん、彼若し誤りを執しなば諫めて正しきに導かん。とてもかくても法は一なり、正邪を糺して正法のために我身を致さんと生涯の大方針一決したれば上人十九歲と云ふ仁治元年の秋の初め、師の房に暫しの暇を乞ひて鵬翼は茲にはばたかれたり。程は近し、處は天下の中心なり。先づ鎌倉へと志しぬ。途中程が谷なるある賤が家に宿りしに主人は熱心なる佛道信者と見え、口には念佛絕えざるを、さても奇怪や釋迦の像もて玩具とし、法華經もて破れし唐紙を繕ひあり。矛盾せる始末を主人に問へば主人は微笑み、我等は法然上人の敎を奉ずるものなり、偏へに彌陀の本願を賴むのみ、他の諸佛、諸經によるは雜行なれば捨つるなりと答ふ。上人乃ち淨土門の眞義を確むべく當時高德の譽れ高き大阿、然阿の兩上人に就きて三心四修殘りなく淨土の敎義を極め盡し、進んで他宗を極めんとせしも時恰も鎌倉は桑西禪師既に去りて道

大方針一決鎌倉の遊學

淨土門を學ぶ

叡山の遊學

隆、兀菴未だ來らず、良觀の極樂寺も未だ成らずして唯だ念佛の一門のみ盛んなる折なりしかば力落して一先づ歸省し、更に叡山へ向つて遊學の途に就けり。臨終正念を力說する淨土門の高僧入阿上人の死相甚だ惡しかりしもの上人の心に大なる刺戟を與へたるが如し。上人叡山に上りて天台の敎學に心を潛め、智者大師が一代佛敎に對して加へたる理義明白なる判釋に敬服し、傳敎大師が之によりて諸宗を統一し圓頓戒壇を建立して日本國を法華一乘の妙國たらしめんと奮闘せられし雄志を仰ぎ、翻りて是等高德の斷案の我見定めしごと法華經中心にてありけるを悅びぬ。扨て一山の有樣を見るに風儀亂れたるはさてもあれ、其の敎ふる所、修する處、開山の趣旨に戻りて眞言の敎義にけおされ、一念三千の月影は慈覺、智證が理同事勝の雲に覆はれて法流全く濁りたり。歎かはしくて論ずる法席侃諤の議も病膏肓に入りては用ひらるべくもあらず、一二の識者に他日の宿緣を結んで全山の反感を買ひ、折々下りて京都に遊び、反りて知己を俗界の商估に得たり。五條油小路に天王寺屋と稱する書店あり。店主淨本篤實にして眼識あり。はやくも上人の尋常ならざるを認め種々なる便宜を與ふ。後年夫妻ともに上人に歸依し住宅を精舍に化したりと云ふ。上人茲に宿りて四方の龍象と交りを結びぬ。聖一國師、道元禪師、さては道隆和尙等禪門一代の巨匠に親しみて參禪工夫を重ねしは此の折の事なりけり。上人は更に三井寺に遊びぬ。叡山の末流一入濁りの增せるを眺めてさゞ波や滋賀の都の跡を偲び、踵を返して奈良の舊都を訪ひにけり。昔し匂ひし八重櫻、さりともと留りて三論、法相、倶舍、華嚴殘りも無く尋ねつくして高野に登りぬ。佛法僧の鳴く音を聞きて三密の祕奧を窺ひ、弘法の智を稱へて金剛峰寺を辭し、一切の宗學玆に了りを告げ、心に深く期する處あり、歸途聖德太子の廟を拜し、一夜を祈誓に明して京都に歸りぬ。上人は更に儒學、國風の奧をも探らんと、當時の大儒大學三郎能本に就きて儒を

天王寺屋淨本

三井寺の遊學

奈良の遊學

高野の遊學

聖德太子の廟を拜す

儒學に併せて國風を學ぶ

大學能本

學び、冷泉爲家に就きて敷島の道授かりぬ。能本は將軍頼家の外祖比企能員の末子にて執權北條に謀られ一族悉く亡びしかば密かに逃れて京都に上り、武を捨てゝ文を取り儒を以て家を興し、月卿雲客を友とし、折ふしには仙洞にも參じ經史百家の講說を聞え上ぐる身となりしなり。素養十分なる上人は儒學の發達も目覺むる程にて流石の能本も驚嘆し、子の才學を以て出家となるは惜しき事なり、儒者となりて世に立ちてはと勸めしに上人笑つて儒は佛道の一局部に過ぎずと、詢々釋敎の深遠を說き聞かす。能本反りて說破せられ、之より佛道に心を寄せ後年上人の化導を扶け、法弟となりて鎌倉内の屋敷を寺となし妙本寺と稱したり。上人は又東寺にも遊びたり。灘波なる四天王寺も尋ねたり。今や訪ふべきものは皆訪ひたり。學ぶべきものは皆學べり。最後の思念を凝らすべく再び叡山に上り橫川の淨光院に籠り人を避けて誓らく默想の人となりぬ。

橫川の默想

我大願を起してより歲を閱する十五年、一切經を讀過すること既に三回、十宗の敎學その義を極めて、佛道の肝心、如來の本懷は法華經にあること最早動かすべからざるを悟りぬ。謹んで經を案ずるに如來滅後の一千年は正法の代にて如來の敎へは如法に行はる。次の一千年は像法の世にて敎の精神漸やく衰へ寺塔佛像の建設のみ徒らに盛んとなる、夫より後は末法なり。人は氣根衰へて邪智のみ深く、我慢强くして鬪爭を好み、如來の白法全く隱沒し了らん。此の末法の衆生を濟度せんものは卽ち法華經なり。正像了りて後の五百年間に妙法流布し永く末法の燈明たらんと豫告せられたり。天臺大師も後五百歲遠く妙法に沾はんと書き殘され、傳敎大師も正像稍過ぎ末法甚だ近きにありと宣言せられたり。加之純一の大乘は東方の小國にて弘まるべしとは諸經にも見え、先代の高德も屢々之を稱したる處、今や、時末法に入りて二百年、所は豫言の國土に當る。法華經の大いに廣まるべくして反りて其の光を失ひ、餘經の勢力盛んなるは何故ぞ。末法に法華經流布

妙法弘通の大決心

の導師として地湧千界の菩薩に如來の親しく附屬せられたる事、經文の上に明かなり。是等本化の菩薩、就中其の上首におはする上行菩薩は如何したまへる。醍醐りて我國土を觀ずるに一天の君は僅かに位を保たれて倍臣國主の權を握り、往にし承久の亂等には國民擧げて逆臣を助け、君を遠島に移しまつりて鎌倉の武運長久を祈れり。泰時、時賴等島めて仁政を行ひ民の心を攬りたるも今や天災地變しきりにて人の歎き絶間無し。嗚呼これ法の影ならずや。大王の法華經かくれて臣下の餘經跋扈する其の影國土に寫れるならずや。影を正さんとせば其の實體を正さざるべからず。誤まれる此の國土を救はんには先づ此の法を正さざるべからず。我れ此の國土に生を得て斯くと知りつゝ豈此の儘に過さるべき。況んや佛弟子となれる者の、末法成佛の道、唯法華經にありと知りながら、いかで默してさて息むべき。よしさらば上行の先達として我れ先づ妙法弘通の道開かん。經文には末法に法華經廣むる者に大難出で來て身命にも及ばんと說かれたり。法のために身を獻げたるもの成佛の爲には何をか厭はん、不惜身命とは玆なりけりと大勇猛心は涌き起りぬ。斯くと心の決しては支那に渡りて枝葉の學究の望みも無く、印度に航して梵典將來の必要も無し。急ぎ叡山を辭して鄉里に歸りぬ。傳へ云ふ、此の歸途、伊勢の內宮に詣で百日の祈誓を込めたりと。日蓮上人誓の井と稱し、墨痕新しく古跡に註しあるは神宮參拜の人の親しく知る所ならん。既に房州に歸るや、恩愛深き父母に十年の疎濶を詫び、一山の歡びに迎へられて清澄山に登り舊師道善の健在を祝しぬ。修業了りて歸れりと人に見えたる上人の誠の修行は是よりなりけり。長途の疲れ休めともせず、清澄山頂の森に籠り一週間の水行なして、建長五年四月廿八日の朝まだき海洋遙かに見はらして闇を破り曈々さし上る旭に向ひ南無妙法蓮華經と十聲ばかりを獅子吼せり。林に響き、海に鳴り、雲を徹して殷々と十方法界に滿ちぬべく前古未曾有の妙敎は玆

伊勢內宮の祈誓

鳩森の開宗宣言

に宣言せられたるなり。

斯かる大望のあらんと知るよしも無き清澄寺にては上人の歸りを機とし一場の法談會を催したり。遊學十余年にして歸れる新進の秀才より新しき敎へ聞かんと敎多の人は寄りつどひぬ。上人時に三十二歳、開宗第一の折伏的說法は始まりぬ。如來の法門八萬四千と稱し、經文五千余卷に涉れども眞實の敎へは法華經にあり、其の他は一時の權敎のみと該博なる智識を傾けて論じ去り、論じ來り、畢竟此の法華經の正法を捨てゝ唱ふる念佛は無間地獄の業、此の法華經によらずして悟道を說く禪宗は偏へに天魔の所爲ぞかし。經王法華經をおとして大日經を仰ぐ眞言は亡國の宗、法華經に依らざる戒律を云爲する律宗は君命をなみする國賊なり。これ蓮長が私言にあらずして一々經文に明かなる處。人々早く迷ひを醒まして法華一乘の妙法に歸せよと論結するや、滿場總立ちとなりて騷擾を來しぬ。惡き賣僧と怒るもあり、氣狂ひにけりと嘲るもあり、斯かる法談聽くも益なしと散り〳〵に皆歸り行く。念佛信者の領主東條景信は憤怒のあまり刀を拔きて上人を切捨てんとす、師の道善の詫により其の場は無事に收まりしも永く上人の怨敵となりぬ。斯くて上人は如說修行（經文に豫言せられし如く實際身に行はるゝこと）の手初めに清澄山を追放せられたり。子の如くに愛撫せられし師に從はぬはせつなけれども大願の爲には暫く忍ばんと、途中の危きを辛く逃れて父母を訪れぬ。我子の將來幸あれと一筋に止むる親の情を思ふにも早く妙法に歸せしめて決定安心せしめんと、染々のぶる孝子の熱誠は終に兩親を動かしたり。かばかり尊き敎弘むる御身は我子にして我子にあらず、偏へに如來の乘り移られて我等を導くと覺えたり。首途の祝ひに我等も道に入り法弟とならまし。蓮華に乘れる日輪の夢も思へば瑞祥なりけり。之を緣に父は妙日、母は妙蓮と名乘るべし。後五百歲の如來の籤言、法蓮日出度く

清澄山の獅子吼

東條景信上人切らんとす

如說修行の首途

父母の歸依　日蓮の名命

成就せられよと、教化の第一着として先づ兩親は妙法に歸したり。之を聞ける上人の悅びや如何なりけん、父母の偏名を戴きて爾來日蓮と名乘り申さん。明かなること日輪に如くは無し。淨きこと蓮華に勝るあらんや。日月の能く諸〻の幽冥を除くが如く世間に行じて能く衆生の闇を除かん。さらば法戰に出陣致さん、まさきくいませ父母の君、と門出勇ましく袖を別ちて鎌倉に向ひぬ。

上人は佛滅後の第一人なり

吾人は古今の佛教史を按じて佛滅後、上人の如く雄大なる目的と、徹底せる信仰と、堅忍の意志とを以て經文を如說に行へる人を見ず。史上に名を殘せる高德は何れも其の信仰は熱烈に、其の志操は高潔なりき。遠く支那、印度に遡るまでもなく近く日本に求むるも聖德太子、行基菩薩、傳敎、弘法は云ふまでもなし、法然、親鸞、道元の究竟の信仰に座したるは吾人の讃嘆する所として上來縷々述べたる如し。されど上人の如く一代佛教を背負ひて其の中軸を把し、時と處と機とに應じて開宗を宣言し、日本國を中心として全世界に妙法を布かんとし、天象、地文、政治、宗教一切を網羅して悉く經文の上に照らし、理想として見られた

法華經の色讀

る法華經の文々句々を色讀（體讀とも云ふ。經文を心に讀むに止まらず、事實の上に行ひ顯はすを云ふ）して宛然妙法蓮華經の當體となりて活現せられだる壯絕の事實を見る能はざるなり。吾人は徒らに時代の流行に伴ひて上人を擔ぐものにあらず。吾人は寧ろ狷介なる一派の日蓮主義者が皮想の見を以て他宗を破折し、我佛獨り尊としとして阿附する如き態度あるものを慨するものなり。されど上人の大は依然として大なり。吾人稿を起して釋尊以來聖德太子と日蓮上人とを比較的詳細に力說するもの些か權衡を失する觀もあらんか。

本書の目的

されど吾人が本書を草する目的は史實の記載にあらず、敎義の解說にあらず、詩にあらず、文にあらず、唯一片丹心の在するあり。史實を借りて同志の人と談らんとするのみ。彼に粗にして此に密なるもの誠に止むを得ざるなり。見ん人了せよ。

當時鎌倉の佛敎界

二、如說修行　其一、佐渡前

學を修むるは北嶺南都を第一とすれど、法を弘むるは鎌倉に如かず。蓋し上人の目的は一人一個の化導にあらずして根本的に國家の法を正し、萬代不磨の妙宗を盤石の上に築かんとするに存し、直先きに政治の主權者北條を覺醒せんと望まれたればなり。當時鎌倉は前年遊學の時に比し長足の進歩をなし居たり。極樂寺建ちて良觀の名聲高きあり。道隆建長寺に在りて時賴はじめ武人の歸依を擅にするあり。淨光明寺には良忠あり。大佛殿には隆觀あり。多寶寺、長樂寺等何れも名僧の譽れあるもの充ち滿ちて鎌倉佛敎は正に闌なる時なりき。上人鎌倉に來りてより名越松葉が谷の庵室に暫し鵬翼を收め、つてを求めて鶴が岡八幡の經藏に入り讀經に餘念なかりけり。一日松葉が谷を訪づるゝ旅僧あり。叡山の秀才成辨が三塔の學者と議合はず、蓮長の名を慕ひて尋ね來れるなりき。上人深く悅んで玆に師弟の義は結ばれぬ。成辨時に三十三歲、上人より一歲の兄なりき。高位の先達數多あるを捨てゝ當時名も無き年少の上人を師と仰げる成辨の見識有難からずや。

鶴が岡の入藏成辨弟子となる

日昭

日蓮門下六老僧の主座となれる日昭と申すは是の人なり。上人の成辨を得られしは百萬の味方にも增したりけん。若し我れ中道にして仆るゝあらば辨殿をもて志を續がせんとは上人の常に談られし所なりき。成辨が俗緣の甥の十歲になれるが亦上人の弟子となる、日朗上人とて終始上人に附き添ひ艱難を共にして日蓮一代の活劇場裏に於ける花形役者となれるは此人なり。

日朗

小松の辻說法

既にして周到なる用意は成りぬ。妙法の旗高く指し立て折伏降魔の劍を提げて毒鼓蓼々小松の辻に立ち、四個の格言を高唱して折伏の大說法は始まりぬ。風を避けず、雨を厭はず、六尺豐かの魁偉の僧が每日立ちて

瓦礫の難

四條金吾等の歸依

説く法談の、如何に驚異の眼を以て迎へられけん。狂僧と誘るあり、佛敵と罵るあり。はては瓦礫の雨を降らすに至る。かゝる中にも篤信の人はありけり。上人の犯すべからざる高き姿と、何物をも熔かさで止まぬ熱心とに敬服して庵を訪ひ道を求めて歸依するもの追々に生じたり。北條の一門江馬の近臣四條金吾頼基は初め建長寺の道隆に參して禪を修しありしが終に上人の説に服し、上人第一の外護者となりぬ。其の友進士善春亦歸依し、兩總の司として勢威ある富木播磨守も緣にふれて信者となり、房州天津の領主工藤吉隆、武州池上の豪族池上宗仲、荏原義宗、甲州波木井の住人南部實長等何れも歷々の人々皆熱烈なる信者となりぬ。初めは無援の一貧僧何事をかなし得んと齒牙にもかけざりし鎌倉諸寺の僧徒も侮り難き日蓮の勢に漸やく注意を拂ふに至りぬ。

天災地變

建長は六年にして康元となり、康元二年に正嘉となり、正嘉二年に正元となり、間も無く文應、弘長と改元せられたり。改元の重なる理由は天災地變の續出にありしが如し。日蝕月蝕頻りにて旱魃あり、暴風あり、大地震ありて餘波百日に續き、又大流星の人を驚かすあり。疫癘饑饉連年にて餓莩路に滿ちたりてふ慘狀は吾妻鏡に詳述しあり。上人はかねて正法亂るゝ時、天災地變の起り來るべきは經文に照らして豫知したる事なれど、別けても近時大變の續出するを見ては最早一刻も猶豫すべきにあらずと、正嘉二年正月誓く鎌倉を去りて駿州岩本の實相寺なる經藏に入り、更に至心に經文を案じ愈法華經を誘ずるによりておこる佛罰と確信し、一篇の意見書を作りて執權時頼の反省を求めたり。有名なる立正安國論と云ふは之なり。文々悉く經文を以て立證し、連年の凶事は法華經を誘ずるため善神國を去れるに因ると斷じ、藥師經の七難の中五難おこりて二難猶殘れり、所謂他國侵逼の難、自界反逆の難なり。大集經の三災の中二災早く顯はれ一災未だ起

岩本實相寺の入藏

立正安國論

自然現象に對する科學者の觀察

自然現象に對する宗教家の觀察

らず、所謂兵革の災なり。仁王經の七難の中六難今盛んにして一難未だ顯ぜず、所謂四方の賊來りて國を犯すなり。早く邪敎を禁止し正法に歸せずんば殘れる難も近きにおこらんと戒しめ、若し實乘の一善に歸する時は三界は皆佛國となる、佛國それ衰へんや、十方は悉く寶土となる、寶土何ぞ壞れんや。國に衰微無く、土に破壞無くんば身はこれ安全にして心は是れ禪定ならんと敎へたり。天災地變の果して人事に關するものなりや否やは吾人の知らざる所なれども今日に於ける自然科學の智識のみを以て之を論ずるは如何あらん。そも〳〵自然科學は客觀の立場にありて一切を物質の機械的變化と見做し、人生の如きは宇宙間に於ける極めて小なる部分の瞬間的出來事に過ぎずとして棄却し去り、その物質相互の間の關係を實驗的に研究し、總べての現象は機械的力と熱學的變化とに因るものとして論ずるものなれば天災地變の如きも大自然活動の一部分にして人心歸向の如何に關する等とは無稽の迷信と云はざるべからず。されど宗敎にありては主觀の立場にありて人生を重大視し、一切の出來事を他所事と觀ぜずして我等との交渉を求め其の間より安心立命を求め行くものなり。就中佛敎にありては一心法界を論じて自他の境を撤し、三千の大千世界は畢竟我等が過去遠劫の業によりて感得したる依報と見、しかも彼此互に融通無礙にして感應道交するものとなすなり。從つて一心の作用を極めて重視し至誠は以て天地を動かすべく、惡思潮は種々なる禍因となりて天災地變の源ともなるべく論ずるは自然の歸結なり。これに關する吾人の見解は暫く措き、佛敎に絶對の信仰を捧げし人の天災地變を以て我等を戒しむる神佛の警告と見しは更に不思議なきことなり。獨り佛敎に限らず、古來の聖王、天災地變のある毎に身を責めて天地に謝したりてふ史上の事實は昔時の思想を漏らす消息にあらずして何ぞや。日蓮上人の此の臭を以て已れの宗旨を擴めんため天災地變を利用せりと論ずる如きは宗敎的信念

上人の行動は絶對信仰の流露なり

の何物たるを知らざるものなり。他國侵逼の豫言の如きも全く經文の敎ふるまゝを斷言したりと云ふを至當と信ず。上人を以て術數に長けたる人と見ば一切の判斷をあやまるべし。上人の凡ての行動は絶對信仰の流露に外ならざるなり。而して上人の上人としての價値は玆に存す。

上人は自信を吐露するに於て何等の遠慮無かりき。法弘、法然さては良觀、道隆等を謗法の大罪人と斷じ、賴朝、義時等を逆臣と論じて憚らざりき。從つて幕府の忌諱に觸れたるは云ふまでも無く、各宗僧俗の怨憎は其の極に達したり。斯くて法華經豫言の大難は先づ起りて松葉が谷の燒討となりぬ。上人は身を以て辛く一難を遁れたり。篤信の富木氏は再び名越の庵室を建てゝ上人を迎へ曾谷、秋元、太田等の新たなる信者の外に實相寺より慕ひ來れる日興の如き有力なる法弟も加はりぬ。されど第二の法難は續いて起りぬ。良觀の歸依者たる北條重時、その子長時は上人を以て世を亂す曲物となし理非を云はずに召捕りて弘長元年五月伊豆の伊東に流罪に所したり。表面流罪と稱したれど所詮亡きものとする心なりけん、俎岩てふ滿潮には水に沒する離れ小島に捨て去りぬ。一身を擧げて法華經に捧げたる上人は悼む氣色も無く聲高らかに讀經しありしが偶々漁夫彌三郎の見出す所となり、將に呑れんとする怒濤の中より救はれて彼が宿所に伴はれぬ。伊豆の流難は反りて弘法の便宜となり、伊豆の領主朝高、韮山の江川吉久を始めとし數多の信者は此の時を緣として生じたり、(伊豆佛現寺の住職水村大僧都に此の草稿を示したる折り、伊東朝高をはじめ上人に歸依したりと各書に見ゆれど事實は相違せり、此の條訂正するがよからんと敎示せられり。)鎌倉にては重時間も無く狂死し、長時、時宗等の怪しき夢に襲はるゝあり、追善の爲にと弘長三年二月上人の流罪は赦されたり。門弟、信者の喜びは云はんばかり無く、敎へも漸やく弘まり來れば暫く法戰を止めて平和の間に敎化を布かれんこ

松葉が谷燒討の難

伊豆の流難　俎岩

漁夫彌三郎

小松原刀杖の難

法弟の殉難

龍の口の首の座

佐渡の流難　上行の大自覺

とを乞ひたれど元より聽入れらるべくも無く、益々折伏の鋒先を鋭くせり。其の年の十一月第三の法難は湧き來りぬ。天津の領主工藤吉隆の招ぎに應じて行く途中、小松原に待伏せしたる東條景信が腹心の士百餘人甲冑に身を固めて切りかゝる。上人の法弟並びに迎へに越したる工藤吉隆等身を捨てゝ防ぎ戰ひ、吉隆と法弟鏡忍とは終に法難に殉したり。上人も景信の一刀に額を疵つけられたれど危く命は助かりぬ。景信は其夜總身に爛れを來して死したりと云ふ。上人は其の後しばらく人の乞により房總地方を巡化したるものゝ如し。

月日回りて文永五年蒙古の使者の來朝より上人の活躍は更に一段の壯を加へ、法難しきりに起りて終に文永八年九月十二日の龍の口なる首の座となる。天照、八幡に向つて正法守護の怠りを責めたるも此の時なり。法華經の爲に命を捨つるは黃金に瓦を代ふるが如しと悅ばれしも此の時なり。四條金吾が腹切りて殉せんとしたるも此の時なり。而して大雷大風忽然としておこり、靈光暗を照らし飛んで、振り上げし蛇胴の名劍段々として折れたりてふ大奇跡を唱へらるゝも實に此の時なり。斬られず、免せ、の兩使は片瀨より、鎌倉より、互に走りて行合川の名を殘し、上人は佐渡が島への流罪となりぬ。惡口罵詈、瓦礫刀杖、數々見擯出の經文は皆我れ之を身に讀みたり。三類の强敵をはじめとし、法華經豫言の文々今顯然たるに、などか地湧の菩薩の出現無かるべき。飜りて過去を考へ現在を思ふに經文如說の修行の者、日蓮を措きて誰かある。忝け無や、末法附屬の大任は我が此の身にてありけるか。悅ばしや大難しきりに我を苦しめて法華經弘通の前兆著るし。末法萬年の法華經流布、今は何をか疑ふべきと、玆に上行菩薩てふ大自覺は油然として起り來りぬ。釋尊が菩提樹下に於ける大悟成道と、上人が此の大自覺と、趣は異なれども其の精神は同一なり。法華の修行者たりし日蓮は龍の口にて成道し、新たに末法救濟の大菩薩として生れられたるなり。此の大自覺を得られし時

上人の流罪は法義の生命となる

如説修行

の上人の悅びや如何なりけん。法然、親鸞は流罪に所して晏如たりき。上人は佐渡の流罪に當りて無限の法悅に滿たされたり。法然、親鸞の流罪は法義の上にさしたる意味無し。上人の流罪は法義の上の大生命となる。蓋し佐渡の流罪により始めて經文全部の身讀者となり、末法附屬の大導師たることを實證することゝなれゝばなり。如説修行と申すは是なりけり。

塚原の草庵

三、如説修行

其の二、佐渡後

北海波荒れて風寒き佐渡の孤島、雪に埋るゝ塚原の草庵に氷を嚙めて饑を凌がるゝ有樣、よそ目には餓鬼の棲家に似たれども佛智を開きし上人には玉の臺にある心地やしたりけん。ふぶきさし込む窓の下に凍れる筆を嚙みしめて立宗の眼目たるべき開目抄をぞ書かれける。

開目抄

開目抄は其の名の如く盲者の目を開くの義なり。夫れ一切衆生の尊敬すべきもの三つあり、所謂主師親これなり、と云ふに筆をおこして儒教、老壯の道より印度哲學の粹に至るまで次第に說きて佛教に及び、「外典、外道の四聖三仙其の名は聖なりと雖も實には三惑未斷の凡夫、其の名は賢なりと雖も實には因果を辨へざる事嬰兒の如し。彼を船として生死の大海を渡るべしや、彼を橋として六道の巷越え難し。我が大師は變易猶わたり給へり、況んや分段生死をや。元本の無明の根本猶傾け給へり、況んや見思枝葉の麁惑をや」と喝破し、更に進んで佛陀五十年の說教を層々と論じ去り、論じ來りて八萬の法藏皆法華經を說かんための準備なるを明かにし、一轉して法華經の擴まるべき時機今正に到來せることを幾多の豫言と、幾多の例證とにより丁寧反覆し、そを廣むる大任の上人自身にかゝれる事を動かすべからざる經文如說の修行により確證し、一時の權教に執着し居る衆生の眼を開かんためには如何なる困難をも辭せざる金剛不壞の大信念を告白せられて

本門の本尊

觀心本尊抄

誓する所は天も捨て給へ、諸難にも遭へ、身命を期とせん。（中略）善につけ、惡につけ、法華經を捨つるは地獄の業なるべし。大願を立ん。日本國の位をゆづらん、法華經を捨てゝ觀經等について後生を期せよ。父母の頸を刎ねん、念佛申さずば、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義やぶられずば用ひずとなり。其外の大難、風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならむ。我れ日本の眼目とならむ。我れ日本の大船とならん等と誓ひし願破るべからず。（下略）

と宣言せられたり。壯絕と云はんは未だ倫にあらず、大自覺の響き玆に至れるもの、讀んで感奮せざるものは教化濟度の外にあるものと云ふべし。

開目抄に次いで觀心本尊抄の撰述あり、絕對歸向の中心たる本門の本尊を玆に顯はし給へり。

我が已心を觀じて十法界を見る、之を觀心と云ふなり。譬へば他人の六根を見ると雖も未だ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず、明鏡に向ふ時始めて自具の六根を見るが如し。其の明鏡とは法華經なり。十界互具、一念三千の法門に依らざれば有情の成佛も木畫の本尊も有名無實にして此の完備せる法門は法華經以外に求むべからず。しかも迹門に於て全たからず、本門壽量品に至りて已心の三千具足するなり。されば我等成佛するために眞實歸命し奉るべき本尊は三千具足の壽量品より顯はれ給へる妙法蓮華經にて釋迦佛、多寶佛左右に配せられ上行等の四菩薩その脇士に立たれたるものなり。此の本門の本尊は正像二千年の間はかくれさせ給ひ、末法に入りて小が大を打ち、權が實を破し、天地顚倒して迹佛の威盡きたる時に當り地湧の菩薩始めて出現して本門釋尊の脇士となり、閻浮提第一の本尊となりて經文豫言の日本國にたゝるべしと

人開顯法開顯

の意を崇嚴極まり無き筆を以て堂々論述せられたるものが卽ち觀心本尊抄なり。開目抄は主として末法導師の出顯を明かされたれば人開顯にして、本尊抄は末法を救ふべき法の開顯なり。初め國難の前兆と警告せられし天變地妖も今は地湧の菩薩出顯の前兆と述べられたり。觀心本尊抄を結んで曰く

天晴、地明

天晴れぬれば地明かなり、法華を知るものは世法を得べきか。一念三千を識らざるものには佛大慈悲をおこし妙法五字の袋の中に此の珠を裹みて末代幼稚の頸に懸けさしめ給ふ云々。

本尊の大曼陀羅

と。觀心抄に續いて本尊の大曼陀羅を圖顯せられたり。茲に上人の開宗は完備したりと云ふ可し。

佐渡の法論

上人の佐渡に流竄せらるゝや、上人を惡める北越近在の僧徒數百名、法論に事よせて亡きものにせんと計りしも元より其の敵にあらず。反りて上人の高風に打たれ改宗歸依するもの尠なからず生じぬ。阿佛房の遠藤遠藤盛等の歸依

爲盛、天台宗の最蓮房、島の守護なる本間重連等亦無二の信者となりて朝夕の奉仕をなすに至れり。上人の上人の言適中

豫言

豫言着々として適中し、內亂外寇重ね至るに及び文永十一年の二月八日、上人恩赦の免狀は法弟日朗の手に流罪赦免

下り、同じき二十七日には又鎌倉の人となりぬ。越えて四月八日には執權時宗の招ぎあり、款待又昔日に似

宗門弘通の免狀

るべくもなし。時宗の大叔父なる北條彌源太は熱心なる歸依者となりぬ。同じき五月二日宗門弘通の定牒は下されたり。十有餘年間あらゆる迫害を與へて屈服せしめんとし、終に死罪をまで宣したる幕府は今や自ら手を下げて優遇し、鎌倉に愛染堂を建て良田一千町歩を附して天下安全の祈願所と仰がんと乞ふに至る。しかも上人は侃然初志を枉ぐるなく誇法の諸宗を其の儘にしては幕府の信仰を認むる能はずと斷然辭して篤信なる波木井實長の乞に應じ五月十二日鎌倉を出でゝ甲州の身延山に上り久遠寺を開きて爾後八年間法弟の訓育と宗門要書の述作とに余念なく末法萬年妙法弘布の基礎を作り弘安五年九月身延を出でて武藏なる池上宗

北條氏の乞を斥く

身延山隱退

池上の入滅

仲の邸に入り、同十月十三日六十一歳にして入滅せり。身延山御書の末文に曰く

（上略）法華經第七に云く、我滅度の後に於て應に此經を受持すべし、是人佛道に於て決定して疑ひあることなしと無けむと云々。此文こそ餘に餘に憑もしく候へ。此等をさま〴〵思ひ續けて觀念の牀の上に夢を結べば、妻戀ふ鹿の音に目をさまし、我身の內に三諦卽一、一心三觀の月曇り無く澄みけるを、無明深重の雲引覆ひつゝ昔より今に至るまで生死の九界に輪廻すること此の砌りに知られつゝ自ら斯くぞ思ひつゞけける。

立ち渡る身のうき雲もはれぬべし
たえぬ御法の鷲の山風。

第六節　純粹の日本佛教

日蓮宗の開宗は日本國ならざるべからず

其の國特有の國民性に依りて、敎の上に異なる色彩を帶び來るべきは既に述べたり。我國に開かれたる佛敎は支那傳來の宗名を襲ぎて其の統を受けたるものも支那その儘のものにあらずして多くは日本化せられたり。就中天臺、眞言の如きは日本國との融合最もしるく、淨土門も親鸞の眞宗に至りて內容全く支那のものにあらず。されど是等は何れも日本に渡りて日本化せられしものにして日本國ならずば開宗せられずとの確かなる證據あるにあらず、然るに日蓮上人の開宗に至りては萬國の中、日本を措きて他國に開かるべからざる事實に於ける法國一如の敎へなりき。今その理由を略述せんに上人の遺文中到る處に力說せらるゝ如く其の敎へは大義名分にあり。法華經は一切諸經の大王にして他は皆之に臣屬すべきものなり。法華經の上に立ち、若しくは之と並ぶものあらば是れ國賊なり、亂臣なりとして何等顧慮する無く之を破折したり。弘法、法然、慈

上人の觀たる法華經

本覺の大本尊

覺、智證の各高僧を手いたく破したるもの職として之に由る。上人の觀たる法華經は歴史上なる釋尊が初めて說かれし經にあらずして五百塵點久遠の本佛釋尊の教へなり。否教へにあらずして本尊なり。成道始覺の本尊にあらず、本來宛然として無始無終にわたり法界を支配する本覺の大本尊なり。釋尊の成佛も法華經により、彌陀の成佛も法華經により、一切諸佛の成道皆これに由る。斯かる絶對無限の權威ある法華經は久遠劫來如何ならん世なりとも犯さるべからざる法王にして之を衆生の國土界に求むる時、天皇の神聖に比すべきものなり。而して事實神聖におはする萬世一系の天皇は萬國廣しと雖も日本の外にあらざるは今更云ふまでも無きことなり。上人が日本をさして八萬の國にも勝れたりと稱せられたるもの之によるなからんや。法は國によつて興るとは上人の云はれし處、誠に國は法の姿なり。屢々革命を宣する國土に於て法は法なり、國は國なりと、理想と事實とを分別して說かん教へと、法の姿は此のうまし國と一如の相を說く教へと其の權威感化の大小何れぞや。日蓮上人の理想とする法華經の開宗は是非とも日本國ならざるべからず。一切の衆生救濟を目的とする佛教が日本國のみに厚しと云ふ勿れ。佛陀に彼此の區別なし、緣に從つて救はるゝのみ。世界の人を救はんため先づ日本國てふ神聖なる國土の上に、漸次教へを布きて法國一如の妙國となし、範を世界に示して平等に救濟せんとする大悲心によるなからんや。此の事科學によりて判すべきにあらず、信仰の立場にありて誠に見易き所なり。王法、佛法に冥し、佛法、王法に合し王臣一同に妙法を保てる時を待ちて三國並びに一閻浮提の人懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王帝釋尊等も來下して蹋み給ふべき戒壇を勅宣によりて日本の最勝地に建立すべし。唯時を待つべきのみと宣言せられし上人の理想、以て見るべきにあらずや。こは上人一已の憶見にて斷定せられしにあらず、廣く經文論釋を引證して此の斷案に到られしなり。

法國一如の相

日蓮宗の開宗は上人當時の時代ならざるべからず

日本は斯かる尊とき國なるにも關はらず下、上を刻して倍臣權を執り、國民天皇の尊むべきを知らずして叛臣に忠節を盡すを見、これ經王をなみする謗法の教へを信ずるに由るとなし、極力之を責めて或は謗法の國と怒り、或は佛罰によりて國亡ぶべしと戒しめ、人の畏るゝ、鎌倉殿を逆賊と罵りて假借せざりしもの、如何に當時の時勢に憤慨せられしかを見るべきなり。しかも徒らに憤慨に止めずして當時におこれる一切の惡現象を悉く法華經流布の前兆と觀じ、謗法のもの滿つる無くんば法華經の豫言も空しく、我に大なる難儀重ね來らずんば釋尊は妄語の人なり、謗法の人國に充ちて天災地變おこり、法を弘むゝ我に大難續出し來ることも正しく法華經の豫言に應じたれば正法の廣まらんこと大地を的とすべしと悅ばれたるもの玆に大信念に座したる上人の面目を窺ふ可し。

更に他の宗派にありては國を選ばざるのみならず、時代にも亦關係無きなり。勿論時代の變遷に應じて開宗せるは云ふまでも無けれど其の年代の如きは殆んど教義と無關係なり。獨り日蓮上人の開宗にありては是非とも上人の前後になかるべからざるものなり。正像二千年後の五百年間に弘宣流布てふ經文の豫言は日蓮無くんば空しかるべしと云はれしもの誠に故あり。古來東洋の傳に從へば上人の開宗は釋尊の入寂を去る二千二百余年にして豫言適中の信仰は理論以外に力あり。

次に何れの宗派を問はず、開山祖師をば開山祖師として之を尊とぶ。其の人格の上に、其の信仰の上に高姿を偲び德風を慕ふ。されど教義の上に大なる意義の存するもの鮮し。日蓮上人に至りては其の上行菩薩の現顯てふ信仰は教義の上の生命とも云ふべきものなり。釋尊靈山にありて法華經開會の時、數多の法弟菩薩が如來滅後の法華經宣布を乞ひまつれば、如來は汝等その器にあらずとして退けられたり。折しも大地震裂し

教義の上に於ける上人の資格

地湧の菩薩

て無量千萬億の菩薩湧出せり。其の上首は卽ち上行菩薩を始めとし無量行、淨行、安立行の四菩薩なり。かゝる未聞の出來事に皆々驚異の眼をみはり、如何なる佛菩薩にておはすやと問ひまつれば是皆我が弟子なるよと答へ給ふ。釋尊は七十余年前迦耶城に生れられ、十九出家、三十成道以來、道を說かるゝ僅かに四十餘年間、かゝる無量の大菩薩を法弟に持たれしとは見もし聞きもしせざる所、湧出の菩薩は何れも歲たけ、久しく佛道を修せられしと見え神通智力に住し、世間の塵に染まざる事、蓮華の水にあるが如し。如來の得道近くして成就し給へること餘りに多し。二十五歲の靑年が百歲の翁を子にもてりと云ふも誰かは信ずべき。願はくは此の疑ひをはらし給へと異口同昔に乞ひまつれば玆にはじめて釋尊の壽量品に於ける本地開顯あり。

壽量品の本地開顯

汝等今の釋迦牟尼佛は釋氏の宮を出でゝ伽耶城を去ること遠からず、道場に座して阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと思へり。然るに善男子よ、我實に成佛して已來無量無邊百千萬億那由他劫なりと有名なる五百塵點劫の譬をひかれ、かゝる無始の昔より此の娑婆世界にありて說法敎化する久遠の本佛にして壽命無量阿僧祇劫なり。出家成道を示したるは衆生濟度の方便力に依れるのみ。とあかして地湧の菩薩は久遠劫來の佛弟子なるを知らしめ末法の導師として附屬せられたり。此の開顯せられたる釋尊を久遠の本佛と稱へ、方便力にて出家成道を示されたる釋尊を迹佛と稱ふ。迹佛なる釋尊の敎化を助くる菩薩を迹家の菩薩と稱し、久遠の本佛釋尊の化導を助くる菩薩を本家の菩薩と稱す。正像二千年の間は迹家の菩薩が法を弘むるも末法に入りては迹佛の威力盡きて佛種絕えたれば佛勅に應じ本化の菩薩出現して新たに佛種を植うるなり。之を下種結緣と云ふ。日蓮宗の信仰の根底は實に玆に胚胎す。上行の現顯たる上人の敎義の上に於ける位置は匹儔すべからざる重要のものなるを知るべきなり。

衆生濟度の方便力

本佛と迹佛

迹家の菩薩と本家の菩薩

下種結緣

唱題成佛の特色

最後に上人の敎への大なる特色を擧ぐれば唱題成佛にあり。そも〳〵法華經の說相勝れたるは古來の高德の皆認めたる所にして殊に天台宗に於ては法華經を以て開宗の基礎となせること旣に述べたり。されど宗敎は單に理論のみにて成り立つものにあらず、信仰の標的たるべき本尊確立し直切簡明にして平常修し易きものならざるべからず。三論、華嚴の如き敎理高きもの終に永く振はずして淨土門の如き敎理平易なるもの反りて永く勢力を保てるもの誠に故あり。天台宗に於ける法華經亦斯の如し。其の敎理の深遠なる、觀法の高くして修行の嚴肅なる、殆んど理想的宗敎に近きも、信仰の標的漠として把捉し難き怨みあり。天台の學匠が智解愈進みて安心益々難くなり、一念三千の法門も甲斐無くして終に彌陀の本願にたより安心したる幾多の實例は旣に屢說ける所なり。一代の學匠にして且つ然り、況んや一般の信者に對してをや。天台以外の信者にありても法華經の功德を信じたるもの其の例甚だ多けれども單に讀經、寫經の下に一種の信仰を繫ぎたるのみ。是等はある特殊の人に限りて一般の者には望むべくもあらず。斯くて過ぎ行かば法華經は一部の學者の智識欲を滿足せしむるのみにて其中に包まれし衆生救濟の大悲心は終に顯はれずしてやみなまし。六千卷の藏經は八卷の法華經の中に收まり、法華經の六萬餘文字は妙法蓮華經の五字に止まる。されば首題の五文字を誦みまつるは法華經八卷を讀むに等しく、一切經は讀まざるに從ふべし。成佛の法は餘經も法華經も詮なし、唯、南無妙法蓮華經と信を入れて唱へまつるにありと喝破せられたる上人の見識はけに上行の現顯ならではと思はず襟を正さるゝなり。法華經を讀める人の誰も心附くべきは此の法華經の經文以外に眞實の法華經ありて此の經文は其の法華經の功德を讚嘆するにあらずやと思はるゝふしなり。我等も初めて法華經を繙どける折は把捉に苦しみ亡羊の歎をおこしたりき。後に上人の遺文に親しみてより、妙法蓮華經の首題こ

初めて法華經を讀める人の疑問

眞實の法華經妙法蓮華の解說

そ眞實の法華經にてありけれと合點して更に法華經に對し云ふべからざる興味を感じたる事あり。

言ふに云はれず、說くに說かれぬ善美を盡せる境界を歎賞して妙と云ふ。橫に無限の空間を極め、縱に無限の時間を貫きて一切の變化を支配するもの之を法と云ふ。千變萬化の間に一絲亂れぬ秩序あり、漠然限り無き間に渾然として完き趣きあり、茫々意無きが如くにして津々盡きざる味あり。外界億萬の現象も收むれば一心の中にあり、一念の微も之を攝むれば三千の世界を現ず。客觀、主觀ともに一法の則に漏れず。言說に絕えたる法なれば名づけて妙法と云ふ。されどこは一應の解釋のみ。宛然たる大自然の法界は善にあらず、惡にあらず、美醜を超越せるものなれど凡夫は自己に執する一念のために罪惡滿ちたる世界と觀じて苦しみ、憂れる人は是等悉く成佛の因と觀じて寂光土を顯出せしむ。穢土を厭ずるも淨土を願ずるも、一は一切諸法を妙法と觀ぜずして徒らに痴情を催すにより、一は世相皆妙法なりと觀じて勇猛心をおこし、接するもの悉く佛果の因行として修するによる。卽ち妙法を感得する心なき者は穢土の間に苦しみ、妙法感得の心あるものは淨土の間に悠遊するを得べし。

妙法感得の種子

囊にまみれし泥土は本來淨穢の境を離れたるものなれど好惡の俗情にからるゝ眼には穢れしものと見えて之に觸るゝを厭ふ。しかも蓮華は此の間に所して淸淨類なき花實を着く。其の泥土の間より淨き蓮華の生ずる如く穢土と見えたる俗惡世間より佛身を成ずる法を佛道に稱して妙法と云ふ。

妙法の第二解

蓮華を譬喩にとれるにあらずして、蓮華を生ずべき法を名づけて法蓮華と云ひ其の法の妙なるが故に妙法蓮華と云ふ。されど草花の蓮華の譬喩とすれば理解し易きゆゑ中根下根の機に對して蓮華の譬喩として之を說く。

法蓮華の譬喩

上根の機にありては譬喩卽法體、法體卽譬喩の道理を會得すべきなり。法體とは法性の理體なり、譬喩とは妙法の事相の體なり。事相卽理體、理體卽事相なれば法譬一體なり。蓮華は又花實同時に俱備せること衆生の因果を俱備せるに似たり。我等は過去の因業の果體たると同時に、未來成佛の因體なり。我一身に三千の諸法を具足すれば妙法感得の種子だにあれば佛因佛果同時に俱備するを知るべきなり。詮ずる處我等の一身は卽ち妙法蓮華なり、之を當體蓮華と云ふ。一切の衆生皆本來當體蓮華なるべきも妙法感得の種子を有せざる間は妄念の團塊にして當體蓮華と云ふべからず。これ日蓮上人が法華經を信ずるものに限りて當體蓮華なりと宣言せられし以所なり。法華經の六萬餘文字は實に妙法蓮華の內容解說なり。首題の五文字が法華經そのものなりと上人の活釋せられたるもの故あり。末法の初めに上行菩薩出顯して佛種を植うと先きに述べたる其の佛種と稱するものは卽ち妙法蓮華經の五文字に外ならざるなり。斯の如く諸佛をはじめ一切衆生成佛の因は法華經にあるが故に其の題目を中心として釋迦多寶等の諸佛を配したる大曼陀羅を書き顯はされて信仰標的の本尊となし、本尊に絕對歸命の意にて口に南無妙法蓮華經と唱へ妙法の外に心を移さぬてふ戒を保ちて玆に成佛の安心決定するなり。此の妙法の本尊と妙法の題目と妙法の戒とを稱して本宗の三大祕法と云ふ。

當體蓮華

佛種

三大祕法

斯く信仰の標的たる本尊を明白に確立し、修行の形式を極めて簡易なる口稱題目となし、智解無くして單に稱題を行ずるも尙ほ法界微妙の法なれば、宛も籠中の鳥鳴くとき空飛ぶ鳥の集まる如く、妙法の聲に呼ばれて佛菩薩の佛性集まり來り、空飛ぶ鳥の集まれば籠中の鳥も出でんとする如く、集まり來れる佛菩薩の佛性に引かれて我身の佛性も必らず顯はれ出づべし。智識の有無には關はらず稱題すれば必らず成佛するぞとさとされて賢愚老幼を問はず何人も修し得べからしめたれば、堂奧深くかくれ居たりし法華經は營々たる俗生活の間に下り田を擊つ農夫、芹摘む小女と伴ひて、行住坐臥に佛道修行の手引きとなり、玆に佛陀の大悲心が普

籠中の鳥

法華經と實生活